

本居豐穎
木村正辭
小杉楹邨

井上賴圀
落合直文

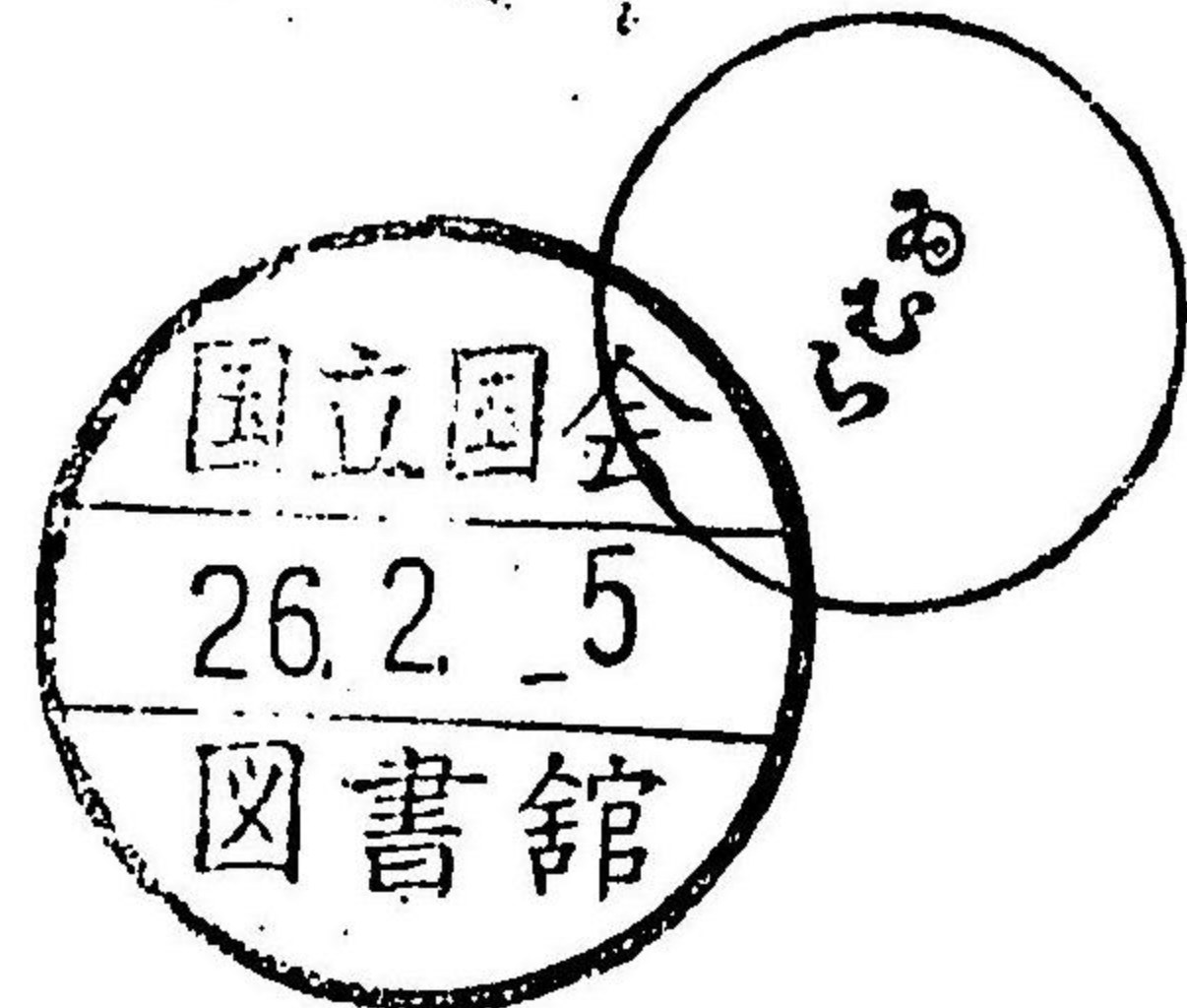
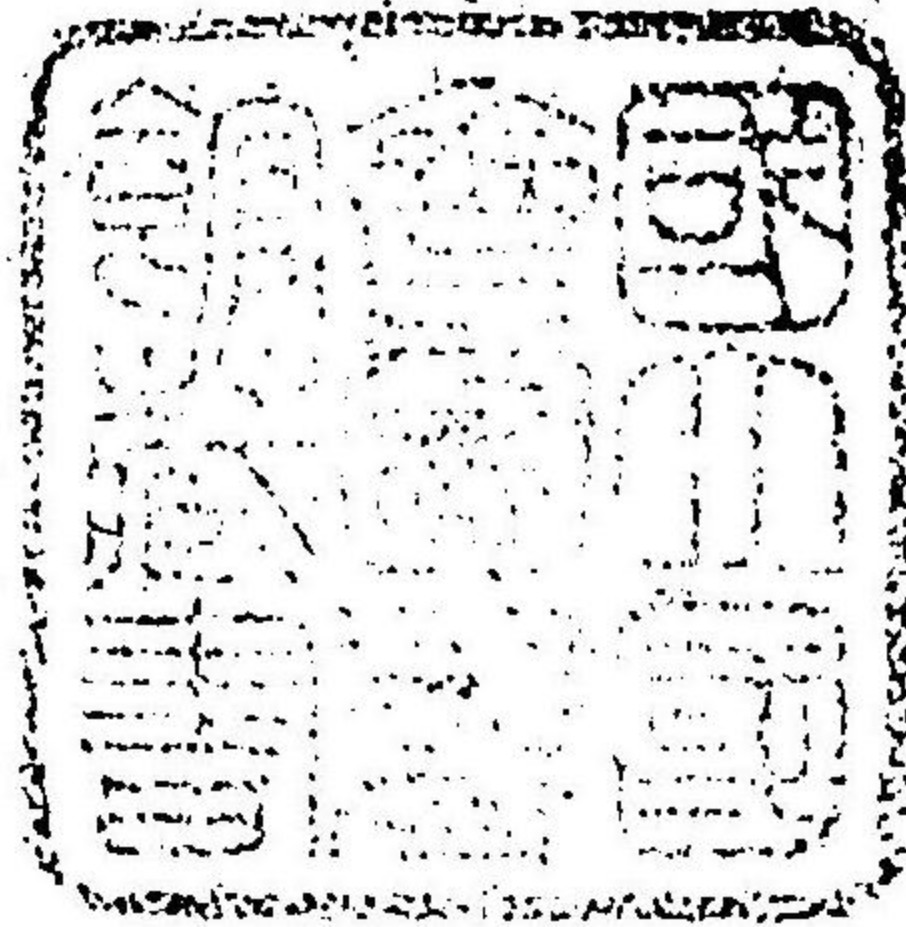
監修

國文大觀

6

物語部 六
狹衣古今著聞集

板倉屋書房



224491

狭衣

狭衣卷第一之上

少年の春は惜めどもとまらぬものなりければ、やよひの甘日餘りにもなりぬ。御前の木だ
 ちなはとなく青み渡りて木暗きなかに、中島の藤は松にとのみ思はず咲きかゝりて、山郭
 公まちははなるに、池の汀の入重山吹は、井手のわたりに異ならず見渡さるゝ夕ばえのをか
 しさ（源氏の侍もなげつべきの、ナニひけむりかくなむい）、獨見給ふも飽かねば、さぶらひわらはのをかしげなる（樹）して（枝）折
 折らせ給ひて、源氏の宮の御方にもて参り給へれば、御まへには中納言、中將などやう
 の人々（おぼろ）さぶらはせ給ひて、宮は御手なりひ繪などかきすさび（ヒキカキ）て添ひ臥させ給
 へ給るに、「この花の夕ばえこそつねよりもをかしく候侍れ。春宮（藤原の、さかりには必みせ
 よとのたまはするものを」とてうち置き給ふを、宮すこしおさあがりて見おこせ給へる御ま
 み、つらつきなどの美しくしさ、花の匂ひ藤のまなひにもこよなくまさりて見え給ふを（おぼ）れ
 いの胸ふたがりまさりて（八字うらまゐたまひつくとまぼられ給ふに、花こそ花のと取り分さ給
 ひ（給）て、山吹を御手まさぐり（花には目もどらさい）給へる御手つきの、いとゞもてはやされて世にも知らず（おぼ）美
 くしげなるを、人目も知らずわが身に引き添へまほしくおぼさるゝぞいみじ（おぼ）きや。「くち
 なしにしも咲きそめけむ契こそくちをしけれ。心のうちいかにくるしかるらむ」とのたまへ

狭衣 卷第一之上

ば、中納言の君、「さるは言の葉は多く侍るものを」といふ。

「いかにせむ言はぬ色なる花なれば心のうちを知る人ぞなき」と思ひつゞけられ給へど、げに人も知らざりけり。たつをたまたまのとうちなげかれて、母屋の柱に寄り給へる御かたちぞなほたぐひなく見え給ふに、よしなしごとによりさばかりめでたき御身を、室の八島のけぶりならではとおぼしこがるゝさまぞいと心苦しきや。さるはこのけぶりのたゝずまひ知らせ奉らむ事も及びなく、いかならむたよりにてなどおぼし煩ふにはあらず、唯二葉より露ばかりへだつる事なく生ひ立ち給ひて、親達を始め奉り、よその人々、御門二條、東宮三條も一つ妹背とおぼしめしおきたるに、我はわれとかゝる心のつきそめて、思ひ侘びはのめかしてもかひなきものから、哀に思ひかはし給へるに、思はずなる心のありけるとおぼしうとまれこそせめと大殿、宮などもたぐひなき御志といひながら、この御事はさらばさてもあれども世に任せ給はじ、世の人の聞き思はむ事も、ゆかしげなくけしからずもあるべきかなととさまかうさまに世のもどきなるべき事なれば、有るまじき事に深くおぼし取るにしもぞあやにくに心はくだけまさりつゝ、つひにいかなるさまにか身をなし果てむと心細き折がちなり。今始めたる事にはあらねど、なほ世の中にさらでもありぬべかりける事は、あまりよろづすぐれ給へらむ女の、御あたりにはまことの御せうとならざらむ男は、いみじうとも睦まじうこそおほしたて給ふまじきわざなりけれ。この頃堀川のおとと聞えて、關白玄給ふは一條院當帝三條などの一つ后腹の二の御子ぞかし。母后もうちつゝいさ御門の御すぢにて、

いづ方につけても、おしなべて同じおとと聞えさするも、いとかたじけなき御身の程なれど、何の罪にかたゞ人になり給ひにければ、故院の御ゆるごんのまゝにうち代り、御門たゞこの御心に世を任せ聞えさせ給ひて、いとあらまほしうめでたき御有様なり。二條堀川のわたりに四まちつきこめて三つに隔て、造りみがき給へる玉のうてなは、北の方三人をぞ住ませ奉り給へる。堀川ふた町にはやがて御ゆかり離れず、故先帝の御いもいと前の齋宮おはします。洞院には唯今のおはき大殿と聞えさする御むすめ關白、一條院のきさいの宮の御おと、東宮の御をばよ。世の覺えうちうちの御有様も華やかに頼もしげなり。坊門には式部卿齋の宮と聞えし御むすめぞ中に心細げなる御有様なるべけれど、女君の世に知らずめでたき一人生み奉り給へりけるを、内齋に参らせ奉らせ給ひてこのごろ中宮と聞えさす。今上一宮さへ出でおはしましける御いさほひ、中々すぐれてめでたく行く末頼もしき御有様なり。かゝる御中にも齋宮齋はおやさまにあづかり聞えさせ給ひにしかば、やんごとなくかたじけなき方も御顔かたち心さま、なべてならず思ひ聞えさせ給へる御方にしも、かくすぐれてこの世のものとも見え給はぬ男君齋さへ唯一人ものし給ふを、いかでかは世の常には思ひ聞えさせ給はむ。千人の中にだにいとかゝらむは親の御心ちにもいかでかはすぐれて思はしかしづかざらむと見えたり。この頃御年はたち今二つばかりやたり給はざらむ、二位中將とぞ聞ゆめる。なべての人だにかばかりにては納言にもなり給ふべきぞかし。されどこの御有様のあまりこの世のものとも見え給はぬに、よろづをおぼしおぢたるなるべし。これを

だに母宮はちこのやうなるものと、あえかにいましましきまでおぼいたれど、おしなべての殿上人にてまじらひ給はむが心苦しきに、内のうへなどの、せちになさせ給へるなりけり。第十六我が釋迦牟尼佛とこの世の光のためとげに顯はれ給へると、かたじけなく危きものに思ひ聞えさせ給ひて、雨風のあらしにも月日の光のさやかなるにもあたり給ふをば、痛はしくゆゝしきものに思ひ聞え給ひつゝ、おほふばかりの袖のいとまなげに、あまりこちたき御志どもをおとなひ給ふまゝに、有りぐるしくおぼす折々もあるべし。よるなどおのづから紛れ給ふよなよなは、二所ながらうちもふさせ給はず、うしろめたき事を歎き明かさせ給へど、向ひ聞えさせ給ひぬれば思ふまゝにもえ諫め聞えさせ給はで、唯うち笑みつゝ見奉り給へる御けしきどもいひ知らず哀げなり。見苦しきあるまじき事を去いで給ふとも、この御心に少しにても苦しき思しめしぬべからむ事はたがへせし聞え給ふべきにもあらず。夢ぼばかりも哀をかけ給はむ人をば、いひ知らぬまづのめなりとも玉のうてなにはぐまむ事をおぼし置きつれど、いかなるにか御身の程よりはいたく静まりて、この世はかりそめにあぢきなきものとおぼして、ありてふ人は知らまほしげにも思したらず、おぼろげならざらむ事に御目をも耳をもとめ給ふべうもあらねば、少しものすさまじう心やましき御氣色なるを、くち惜しく心もとなきものに思ひ聞ゆる人々もあるべし。まれまれ一くだりも書きながし給ふ水莖のながれをば、珍らしうおさがたきものにかごとばかりの行くての一言葉をも、身にしみてをかしくいみじと心を盡し、まいて近き程の御けはひなどを千夜を一

夜になさまほしう鳥のねつらき曉のわかれに消え返り、入りぬる磯の中々なるに心をつくす時待ま人々、高さもおくれたるもさまさまにおのづからいかでかはなからむ。それにつけても、いと恨み所なくすさまじさのみさまり給ふべかめれど、いとなべてならぬあたりにはなだらかななさけを見せ給ひて、をりにつけたる花紅葉、霜雪、雨風のあらしさまざれ、もしは哀まさりぬべき夕暮、曉の鳴のはねがきにつけなど、思ひかけすおとづれたまふ折々もあるは、中々なるいな淵のたきさまさりつゝ、心を盡し給ふなめりかし。さこそまめだち給へど唯引き過ぎ給ふ道のたよりに、少し故づきたる山がつの垣ほの撫子にはおのづから目とまららぬにしもあらぬ程に、野をなつかしむ旅寝を給ふわたりもあるにや、いかなる折にかぼんまう經にや一見於女人とのたまへるとおぼしいづれば、車のすだれうちおろしつれど、そばのひろう明きたるはえたて給はぬなめりかし。さだかにはいかでかはおはせざらむ、男といふものは、あやしきだに身の程も知らず人に心をつくるわざなめりかし。光りかゝやき給ふ御かたちをばさるものにて、御心はへまことしき御ざえなどはもろこしにやたぐひわらむ、この世には今も昔もたぐひなくぞものし給ひける。手などかき給ふさまもいにしへの名高かりける人々の跡は千歳ふれどもかはらぬに、見合せ給ふに人々なほ時にまたがふわざにや、今めかしうたをやかになまめかしう美しくしきさまは、かきまし給へりとぞさたせられ給ふめる。又こと笛のねにつけても雲をひかかし、この世のはかまで澄み昇り天地をも動かし給ひつべきを、ゆゝしう親達もおぼしきわきて何事をもあながちにこのみをせさせ奉り

給はねば、我もことに心をとめて人に耳ならさせ給はずなどあれば、よろづにむしんにも
 のすさまじき人さまにやとぞおしはかられ給へど、はかなき御言の葉けしきなどうち見奉
 るより、わが身のうれへも忘れ、もの思ひはるゝこゝちしてうち急まれあいきやうづき給へ
 る御さまぞたぐひなかりける。「すべて何事も言ひつゝくれれば中々なり。よろづめづらし
 ためしなき御有様」と世の人のことぐさに聞えさすめれば、大殿などはあまりゆゝしく、あ
 め若みこの天降り給へるにや、けふや天の羽衣むかへ聞え給はむと危くまづ心なき御心の
 うちどもなり。源氏の宮と聞ゆるは故先帝の御末の世に、中納言の御息所の御腹にたぐひな
 く美しく女宮生れ給へりしを、今更のほだしと心苦しうおぼしはぐゝみし程に、宮の三つ
 ばかりになり給ひし程に、院も御息所もうちつゝさかくれさせ給ひにしかば、いと心苦しく
 て齋宮やがて迎へ取り聞えさせ給ひて、中將（源氏）と同じ心（源氏）に思ひ聞えさせ給ふ。殿（源氏）もまこ
 との御むすめよりもやんごとなきかたそひて思ひかしづき聞えさせ給へり。十に四つ五つ
 わまらせ給へる、御かたち有様見奉らむ人は、いかなるものゝふなりともやはらぐ心はかな
 らずつきぬべきを、中將の御心のうちはことわりぞかし。暫しはさりともなずらへなる人有
 りなむと頼もしくおぼされしを、かのよししかたがかくれみのをえ給はねども、おのづから高
 きも賤しきも尋ね寄りつゝ、板田の橋は朽つれどいとふるはかき程にこそあらぬ。立ち聞き
 かいま見などかしこく、御心に入れたるまゝにおぼつかなきは少なけれど、この御かたち有
 様になすらふばかりのは、ありがたきわざにこそとおぼさるゝまゝに、いとゞ人知れぬ心の

中に思ひこがれ給ふさまいといとはしう、音無の瀧とやつひになり給はむと見ゆるを、さす
 がにかう忍びまぎらはし給ふ程に、はればれしからず結ばれ給へる御けしきを、おとなひ
 給ふまゝに、人の御くせにこそと忍ぶもぢずりをえ知り給はぬなるべし。おほきおとゞの御
 かたにはいかにやうの人おはせど、つれづれにおぼさるゝまゝに、さるべからむ人の御む
 すめもがな、あづかりてかしづき立てむなど明暮さるはうらやみ給ふめる。源氏の宮の御か
 たちかくすぐれ給へる御名高くて、春宮のいとゆかしう思ひ聞えさせ給へるに、さこそはつ
 ひの事ならめとおぼしたり。内のうへも昔の御ゆるごんおぼし忘れず、哀に聞えかはさせ給
 ひながら、おぼつかなくて過させ給ふもくち惜しきを、「さやうにて内住みもせさせ給へか
 し」とおとゞにも聞え驚かさせ給ひけり。されどいとゞしき御ありさまを、なほ今少しさか
 りにねびとゞのひ給ひてこそなど、おぼろげならずおぼしおきつる御ありさまなるべし。か
 くいふ程に卯月も過ぎて五月四日にもなりにけり。夕つ方中將の君、内よりまかで給ふ道す
 がら見給へば、あやめ引きぬるまづのをが、ひまなく行きちがひもてあつかふさまども、げ
 にいかばかり深かりける。十市の里のこひぢならむと見ゆるわしもとゞものいみじげなる
 も、知らず顔にいと多く持ちたるもいかに苦しからむと目とまり給ひて、
 「うき沈みねのみながるゝあやめ草かゝるこひぢと人も知らぬに」（源氏）とぞいはれ給ふ。玉
 のうてなの軒ばにかけて見給へば、をかしうのみこそおぼさるゝを、御車のさきに顔なども
 見えぬまでうちむれて行きやらぬを、おどろおどろしき御隨身の聲々にとゞめられて、身の

ならむやうも知らずかゝまりぬるを見給ひて、「さばかり苦しげなるものを、かくいふ」とせ
いせさせ給へば、「ならひにてさふらへばさばかりのものはないかばかりかと思ひさふらは
む」と申すを、戀路をばわが御身にならひ給へれば、心うくもいふかなと聞き給ふ。大なるも
ちひさきもつまむとに葺き騒ぐを、車より少しのぞきつゝ見過ぎ給ふに、いひ知らずちひさ
くわやしき家どもにも唯一すぢづゝ置き渡すを、何の人まねすらむと哀に見給ひつゝ、扇を
笛に吹き給へる夕ばえの御かたち、まことに光るやうなるを、はじとみに集まりて見奉りめ
づる人々ありけり。御車など今はおとなしくなり給へれど、御どもの御隨身など、いとわか
うをかしげになべてならず見ゆるを、「わはれわれが身にたに有らばや、なに事を思ふら
む」とわかき人はめで惑ひて過ぎ給ふもなほ飽かぬば、軒のわやめを一すぢ引きおとして急
ぎかきて、はしたものを、をかしげなるしておひて奉る。後れてはしる御隨身に取らせて歸る
を、「いづこよりとか申さむ。やがて御車に乗り給へ」とてとらへつ。御覽すれば、

「知らぬまのわやめはそれと見えすともよもぎがもとは過ぎずもあらなむ」とぞ書きた
る。いかなるすきものならむとは、ゑみて問はせ給へといはむやは。心とき御隨身袴そのわ
たりに硯もとめて奉りたるして、たゝう紙にかたかんなにて、

「見も分かで過ぎにけるかなおしなべて軒のわやめのひましなれば。今わざと参らせ
む」といはせ給ひて、「わらはの入らむ所たしかに見よ」とのたまへば、「はじとみ高くわけ渡
して人々あまた見え侍りつ」と申せば、なに人ならむ見知りたりつるにやとばかりはおぼせ

ど、かやうのうちつけげさうなどはわざと御心にも入らず、あるまじき事をぞいかなる折に
も御心にとめ給ふべかめる。又の日は所々に御文書き給ふ。色々の紙の色はだへなどえな
らぬあまた取りちらして、墨こまやかにおしすりつゝ書き給ふ。御手はげになどてか少しも
の、心知らむ人のいたづらにかへさむと見ゆるに、御歌どもぞなべての人の口つきにてだ
にをかしたも見えぬはわしう人のまねびためるにや。左大将の御ひすめ宣耀殿ときこえて、
春宮戀にいみじう時めき給ふを、いかなる風のたよりにかほのかに見聞えさせ給ひけり。さ
れどいかでか思ふさまにしもあらむ、御せうそこなどだにおぼろげならでは通ふ事かた
くぞ有りける。餘りまぢどはなるも戀しく思ひいでられ給ひて、

「戀ひわたるたもとはいつもかはかぬにけふはわやめのねさへながれて。一條院の姫
宮の御けはひもほのかなりしかばにや、なべてならぬこゝちせしを、いかで御かたちなどよ
うみ奉らむなど、心に懸り給ひて少將の命婦のもとに例のこまやかにて、中に、

「思ひつゝ、岩かき沼のわやめぐさみどもりながら朽ちはてねとや。藤などやうにてあまた
あめれど、同じすぢなればとめつ。かやうに折につけたる言の葉などはちらし給へど、心
の中はいつまでかとのみ、この世はかりそめにもすさまじくおぼさるべき。丁子に黒むま
でぞそぎたる御ひとへにくれなるの御はかまき給ひて、つら杖つきて、池のわやめのこゝち
よげにまげりたるを眺めやり給ひて、「音羽の山には」など口すさび給へる御聲は、なほたぐ
ひなし。有りつる御返りいづれもをかしき中に、宣耀殿のは御手も心ことをかしげにて、

「うきにのみ沈むみくづとなりはて、けふはあやめのねだになかれず」とある氣色など、むかひ聞えたるこゝちしてらうたげにあはれ淺からねば、少し涙ぐまれ給ひぬ。その夕ざりはもしさりぬべきひまもやと内わたりに出で立ち給ふに、いとゞ召しさへ有れば参り給ふとてまづ殿の御まへに参り給へれば、けふはまだ見奉り給はざりつればにや、めづらしきにはひ添ひ給へるこゝちしてうちゑみてつくづくとまぼられさせ給ふ。「内より召しさふらへば参り侍るを、中宮（中宮）の御方に御せうそこや」と申し給へば、「れいならぬさまに聞き奉りつれば参らむとしつるを、風にや、こゝにも惱ましうて暮し侍りぬるを、つとめての程にためらひて参らむ。あつき程は暫しいでさせ給ひても休ませ給へかしと思ふを、例の御いとまや有りがたからむ」などを聞えさせ給へば、御いらへして立ち給ひぬ。「まだしきにあつさ所せき年かな。何しに常に召すらむ」とつぶやき給ふを、母宮（母宮）聞き給ひて、「苦しく覺え給は、何かは参り給ふ。うちわなどせさせてものし給へかし」と心苦しげに見やり聞え給ふ。さうかんのくれなるのひとへ、同じ御直衣のいと濃きに、唐なでしこの浮線綾の指貫着給へるやうだいこしつき、指貫の裾までたをたをとおてになまめかしう着ない給へり。ものゝ色合などなべての同じものとも見えぬを、などかう餘りゆゝしう思ひなり給ふらむとて、涙を一めうけてせちに見送らせ給へるを、御前なる人々ことわりなりとあはれに見奉る。内（内）にはわざとせちゑなどもなき、よのつれづれにおぼさるゝには、雨雲さへ立ちわたりてもものむつかしき慰めに、春宮（春宮）渡らせ給ひて御物語などあるなりけり。御前のひろびさしに大きおとゞ

の權中納言（權中納言）、左兵衛督（左兵衛督）、左大將の御子の宰相中將（宰相中將）などやうの若上達部あまたさぶらひ給ふに、源中將（源中將）の参り給はぬは、いとゞしき五月雨の空の光なきこゝちせさせ給ひて、召すなりけり。「今宵の宴にはさぶらふかぎりの人いちのぎえを手の限り惜まで一つづゝ試みむ」とのたまはするを、春宮も「興ある事」とのたまはせて、さまざまの御ことゝも奉り渡す。權中納言に琵琶、兵衛の督に玄やうの琴、宰相中將和琴、中務宮少將さうの笛、源中將によこぶえ賜はず。唯今のいみじきものゝ上手どもなるべし。「おのおの今宵このねども手をつくして聞せよ」とのたまはするを、たれも一つにかきませてこそあやしきまざらはしてつかうまつらめ、いとわりなきわざかなと仕うまつりにくゝわび給ふ。中にも中將（中將）は「よろづの事よりも更にたはぶれにもまねび侍らぬものを」と奏し給ふを、「唯その知らざらむ事を今宵始むべきなり」とのたまはすれば「教ふる人だに侍らばたどるも仕うまつるべきこそ。おのおの手をつくし給はむ中にたどたどしう始め侍らむは、げにたぐひなき世のためしにやなり侍らむ」とて殊の外に手もふれ給はねば、「いとかばかりの心ばへとは思はずこそありつれ。殊の外にこそありけれ。年頃おとゞの思ひたるにも劣らずこそ思へ。かばかりの事をだにいふまゝならざりければ、まいてよろづおしはかられぬ。よしよし言はじ」とまめだゝせ給ふに、いと侘しくて畏まりて取り寄せ給ひて、ものにませつゝおのづからかたのやうにまねび候ひなむ、獨はいとわりなきわざかなと惱める氣色のをかしさにぞ恨み果てさせ給ふべくもあらず御覽じける。こと人々も中々心ことなるべき夜の御あそびと心づくろ

ひつゝ、とみに手もふれ給はで、「中將の四五のぎえばかりにだに候はぬもの、ねをまぎれなくひきわらはし侍らむおもて恥かしさよ。萬の人のかはりに、ことをかへつゝ仕らまつらせばや」と權中納言奏し給へば、「一つをだにさばかり心ではからむに、まいて人の代りはすべくもわらざめり」とせめさせ給へば、おのおの心づくろひいたくしてひき出でたるもの、ねどもいとおもしろし。中將の御笛になりて、「さていかに仕らまつるまじきか」とたびたびまめやかなる御氣色にてせめさせ給へば、いとわびしう、かうと知らましかば參らざらまじものをと、くやしけれどのがるべき方なくて、笛もうひうひしげに取りなしてことに人の聞き知らぬ調子一つばかり吹きならし給へるを、うへは音には聞きつれどいとかくまではおぼしめさいりつるを、今まで耳ならさうりけるうらめしさをさへひきかへし仰せられて、めで驚かせ給ふさまいとこちたし。聞く限の人々も更にこの世のもの、音とも聞えぬに、涙もといめがたけれど、中々なる程にてやみぬるを、「いとわるまじき事」とせめのたまはずれど、「唯かばかりなむおとゞのたはぶれに教へ侍りてこれよりほかにはすべて覺えさふらはず」と奏し給ふを、「いとうたて、そら言をさへつぎづきしくもいふかな。おとゞの笛のねに似るべくもわらざめり。すべてかく苦しと思はれば更にはいはい」と仰せらるればいと侘しうて、皇太后宮の姫宮たちなどのうへの御つばねにおはします頃にて、心にくき御あたりは何事も残りなく聞かれ奉らじと思ふ方さへいとゞしきなるべし。月もとう入りて御まへのとらるの火どもひるのやうなるは影にかたちはいとゞ光りまさりて、柱に寄りゐて、まめやか

にわぶわぶ吹き出で給へる笛のね、雲を響かし給へるに、御門を始め奉りて九重の内のまづのをまで聞き驚き涙を落さぬはなし。五月雨の空のものむつかしげなるに、ものや見入れ奉らむとまで、ゆゝしくわはれにたれも御覽するに、おとゞまいて見給はゞいかばかりいまましきまでおぼさむと、わがこゝちにも驚かせ給ふ御袖もまぼるばかりにならせ給ひぬ。宵過ぐるまゝに雲のはたてまで響きのほるこゝちするに、いなづまたびたびして、雲のたゝすまひれいならぬを、かみの鳴るべきにやと見る程に、空いたくはれて星の光月にことならず、輝き渡りつゝこの御笛のねの同じ聲にさまざまのもの、ねども空に聞えて、かくのおとゝいとおもしろし。御門、東宮を始め奉りて、いかなる事ぞとあざみ騒がせ給ふに、中將の君もの心細くなり給ひて、いとゞねのかぎり吹き澄し給へり。

「いなづまの光に行かむ天の原はるかに渡せ雲のかけはし」とねのかぎり吹き給へるはげに月の都の人もいかでかは驚かざらむと覺ゆるに、かくの聲々いとゞ近うなりて、紫の雲たなびき渡ると見ゆるに、びんづらゆひていひ知らずをかしげなるわらはの、さうぞくうるはしくまたるからばしきものふとおくるまゝに、いとゆふか何ぞと見ゆる薄き衣を、中將の君にうち懸けて袖を引き給ふにわれもいみじうもの心ばそくて立ちとまるべきこゝちもせず。かくめでたき御有様の引きはなれ難くて笛を吹き吹きさそはれぬべき氣色なるに、御門の御心騒がせ給ひて世の人のことぐさに、この世のものにはわらず、天人の天降れるならむとのみいひ思ひたるはげにこそはありけれ。おとゞのかやうの事をたまさかにもせさせ

す、月日の光にもあてじとあやふくいまいまじきものに思ひたるものを、この人をかく目に見す見す雲のはたてにまよはしては、我が御身もこの世に過ぐさせ給ふべき御心ちさせ給はねば、涙もえとゞめさせ給はず、いとみじき御氣色にて引きとゞめさせ給ふを悲しく見奉り給ふにも、まいておとゞ母宮など聞き給はむ事をおぼしいづるに、いとほしく思さるゝこの世なれど、ふり捨てがたきにや、かゝる御むかへのかたじけなさに、ひとへに思ひ立てど御門の袖をひかへて惜み悲み給ふ。親たちのかつ見るをだに飽かずうしろめたうおぼしたるを、行くへなく聞きなし給ひて、むなしき空をかたみと眺め給はむさまの悲しさに、このたびの御ともに参るまじきよしを、言ひ知らず悲しくおもしろく文作りて、笛を持ちながら少し涙ぐみ給へる御顔は、天人のならば給へるにも匂ひあいぎやうこよなくまさりて、めでたき御聲してずんじ給へるに、あめわかみこ涙を流し給ひて、かう何事にもこの世にすぐれたるによりさそひつれど、ことわりにめでたう悲しき文の心ばへにより、とゞめつるくち惜しさを作りかはして、雲のこし寄せて乗り給ひぬる名残の匂ひばかりとまりて、空の氣色もかはりぬるを、あさましなども世の常の事をこそ言へ、めづらかなりと見る限りは夢の心ちま給ひけり。中將の君はみこの御ありさまのおもかげに戀しくいみじくもの哀と思ひたるさまにて空をつくづくと眺め入りたる氣色、いとゞこの世に心とゞめずやなりなむと、あやふくうしろめたくおぼしめされて、何事に心を少しまざらばさむとおぼしませすに、大臣になすとうれしと思はじ、おとゞも更にうけひかじとかひなく思しめさる。皇太后宮の女

二の宮の御かたち心ばせ、ことわりも過ぎておはしますを、いみじう悲しきものにま奉らせ給ひけり。一の宮は此の頃齋院にておはします。后もこの宮をばたぐひなく思ひかしづき聞えさせ給ひて、世の常の御有様などおぼしかくゞもなきを、中將の笛のねにあま人に聞き過ぎし給はで、おりおはしてさそひ給へるに、たゞにてやませ給はむもあるまじき事なるに添へて、かういと心細げに思ひあくがれぬべき氣色なるに、二の宮の此の頃さかりにとゞのひ給へる御有様見奉らばこの世は得あくがれじとおぼしめしなりぬ。大殿には中將の君は今宵はいで給ふまじきにやと尋ねさせ給ふ程に、藏人所の方に人々こゑ高くもの言ふを、何事ならむと聞かせ給ふに、「伊豫守何がしのあそん参りて内にかうかうの事なむさふらふなる」と申すを聞き給ふ。御心ちどもいかにばかりかはありけむ、更にうつゝの事ともおぼされねばぬ給へりつらむ跡をだに今ひと度見む」とのたまふ事より外に、ものも覺え給はぬを見給ふに、母宮は唯御を引きかづきてぞ臥し給へる。世はいかになりぬるぞと見ゆるまで殿の内騒ぎたり。道の程おぼしつゝくるもいみじうゆゝしきに、御車の内より流れ出づる御涙ちくまの川渡り給ひけるにやと見えたり。道の程れいよりも遠うおぼされて、陣の程人に引かれ入り給ふに、九重の内はもの騒がしげもなし。火たき屋の火ども常よりはわかてこゝかしこのはさま、へいのつらつらなどにいふ聲々唯この事なるべしと聞きたまふに、さてまことに空に昇り給ひぬるにや、いかにいふぞとおぼすに、こゝちもいとゞまどひてたふれ給ひぬべし。「殿参らせ給ふ」と人々立ち騒ぐを、中將この事によりてならむかし、いかにばかり

御心ちまどはし給ひつらむとおほすもいとほしうて、殿上の口にさし出で給へるを、おはしましけりとうち見つけ給へるぞ中々いみじきや。いかなりつる事ぞ、おのれを捨て、いづこへおはせむと云給へるぞとも得いひやらすおぼれ給ふを、げにとまらずなりなましかば限ある御命もいかなり給はましとおはれに見奉り給ふ。ためらひておまへに参り給へば、ありつる事ども語らせ給ふにすべうつゝともおぼされず。「何事も言ひ知らせ教ふる事も侍らず、おほやけに仕うまつり、わたくしの身のため男のむげにむさいに侍るはいとくち惜しき事に侍れば、そのかたばかりはかたのやうに見あかせとやいひ知らせ侍りけむ。まいてこの琴笛のかたは、たはぶれにてもまねびさふらふらむとこそ思ひ給へ侍らざりつれ、いかにしてかう世のためしになりぬべきねをさへ吹き傳へ侍りけるにかとめづらかにも思ふ給へらるゝかな。いかにもまたたぐひもさふらはねば、たい心に驚く事なくていきて侍らむ限り見給へらむのみこそこの世のよろこびはさふらふべきに、いと餘りなる身のさえなどは更に嬉しくも侍らず。遂にいかなるみだりぞちをまどはさせ侍るべきにかと、かへりてはいとつらくなむ思ふ給へらるゝと、今宵はすべうつし心も侍らず。空しき跡を見給へつけたらましかば、あすまで長らへて大やけにも仕うまつり、わたくしのあまたのはだしども、見給へざらましを、かはらぬさまを見せさせ給へる事」と喜び申し給ひつゝいとあやふくうしろめたしと見やり給へる氣色の、ことわりにいと今宵よくは見え給へば、人々も皆泣き給ひぬ。中將の君はかういところたき御遊びの名残ものむつかしうあやまちさへまたるこ

ちしてさぶらひ給ふを、うへ召し寄せて御さかづき賜はするとして、

「身のまろもわれぬぎ着せむ返しつと思ひな侘びそ天の羽衣（舞）とおほせらるゝ氣色、さにやと心うる事あれど、いでや武藏野のよるのころもならましかば、げに代へまさりにもや覺えましと思ひぐまなきこゝちすれど、いたう畏まりて、

「紫の身のまろ衣それならばをとめの袖にまさりこそせめ（類）といはれぬるもなにとかは聞きわかせ給はむ。いづれもむかひのをかは離れぬ御事どもなれば、常よりももの哀なるけしきにて、静まり給へるよういかたちなど、おほろげの女は御門の御むすめなりともならべにくきを、二の宮はけしうはおはせじとおほしめす。鳴く一聲に明くる心ちすれば人々まかで給ふ。殿も中將の君一つ御車にて出で給ひぬ。母宮待ちうけ給へるけしき思ひやるべし。「いかにこうじ給ひぬらむ」とて御手づからまかなひすゑて、そのかし給へど、誠に苦しくなやましくおぼされて、「今宵はいかにもいかにもふよりにさふらふ」とてやすみ候はむとて我が御方へ渡り給ふを、いと今宵よりは、かた時立ちはなれ給はむもうしろめたうわりなしとおぼしたる氣色にて、「今宵はこなたにもし給へ」とせちに聞え給へば、おましなど敷かせてぬ給ひぬるやうなれど、めづらかなりつる事どものみ思ひつゞけられて、まどろまれ給はず。何となく心もまことに浮びて、ありつるみこの御かたちもおもかげに戀しうくち惜しう覺え給ふ。げに殿のたまへるやうに、この世にはありはつまじき始にやと我ながら心細し。こはたの僧都（僧）召し寄せてこの御かたはらにさぶらはせ給ひて、殿もいもぬ給は

す、今宵の事ども語り給ひつゝ、いとものゆゑしくおぼして、あすより始むべき御祈ども、事などのたまはず。さるべきけいしきさきども召し集めてやんごとなくあるし有るべき人々して始め行はせ給ふべき御祈のさま、いとこちたげにおぼし置きてのたまはするさま、聞き給ひてもなごかうしもおぼすらむ、かゝる御心どもを知らず顔に、あぢきなくさるまじき事により、身はいかゞまなきむとおぼゆるに、人やりならず枕も浮きぬべし。あるまじきこととかへすがへす思ひ返せど、明暮さしむかひ聞えたればにや、わき返る心のうちには更に思ひやむべきこと、ちもせず。うへのいみじき御志とおぼしめして、給はせつる御身のまろはいつかたじけなくおもだしけれど、かひがひしく聞かまほしくもおぼされず、紫のならましかばと覺えて、

「色々にかさねては着じ人知れず思ひそめてし夜はの狭衣（たせぎ）とぞかへすがへすいはれ給ふ。ねぬに明けぬといひ置きけむ人もうらやましきに、からうじて明けぬる心ちすれば、ひんがしのわたどの、つま戸おし明け給へれば、雨すこし降りける名残、あやめの雫所せければ、空はあま雲はれ渡りてはのぼのと明け行く山きは、春の曙ならねどをかききに、花橋に宿かりにや、郭公（つとむ）はのかに鳴き渡るねにあらはれにけりと聞き給ふ、

「夜もすがらなげき明して郭公鳴く音をだにも聞く人もなし」（つとむなど）獨ぞちてたゝずみ給ふまゝに、「身色如今山端（やまのへ）甚微妙」とゆるゝかにうちあげてよみ給へるいみじう心細うたふとさを、母宮、おとゝなど聞き給ひて、なほさまさまに餘りなるありさまかな、などかうし

も思ひ出でけむ、又天人の迎へもこそ之給へとゆゑしく思されて宮るざり出で給ひて、「などかく夜深くおき給へる。さ月の空には恐ろしきもの、あなるを」とものたまふまゝに、はな聲になり給ひぬなり。とのも起き給ひて、「なほこの頃ばかり内にもな参り給うそ。けふより七日ばかりと始めさする祈どもの程は、同じ心に佛をも念じ給ひてものし給へ」と聞え給ふに、「たはぶれの口ずさびも、こちたうむつかしうさへおぼさるれば、いづちがまかり出でむ」と申し給ひてたいへわたり給ひぬ。その頃のことぐさには唯この事を天の下にいひのしりけり。大やけにも日記の御からびつわけさせ給ひて、あめわかみこと作りかはし給へる文ども書き置かせ給ひけり。その夜さぶらはざりける道の博士ども、高きもいやしきもこの御文を見て、涙を流しつゝ、めで惑ふを此のころの事にはまたり。あつさのわりなき程は水こひ鳥にも劣らず、心一つにこがれ給ふを知る人もなし。晝つ方源氏の宮の御方に参り給へれば、白さうす物のひとへ着給ひて、いと赤き紙なる文を見給ふ。御色はひとへよりも白うすき給へるに、ひたひの髪（かみ）のゆらゆらとかゝりこぼれ給へる。裾はやがてうしろとひとしう引かれいきて、こちたうたゝなはりたる裾のそぎすゑ、いくとせを限りに生ひ行かむとすらむと所せげなるものから、たをたをとあてになまめかしう見え給ふ。隠れなき御ひとへに御ぐしのひまひまより見えたる御腰つき、かひななどの美しくさは人にも似給はねば、餘り思ひしみにけむわが目からにやとまもられて、れいの胸はつぶつととなり騒げど、よく忍び返してつれなくもてなし給へり。「いとあつき程にいかなる御文御覽するぞ」と聞え給へば、「齋

院（院）より繪など給はせたる」とてくまなき日のけしきに華々と匂ひみち給へる御かはつ
きを、まばゆげにおぼして、少しうち赤みてこの御文にまぎらはし給へる用意、氣色、まみな
と言ひつくすべしうもあらず。めでたう見え給ふに、涙さへ落ちぬべう覺え給ふまぎらはしに
この繪どもを見給へば、在五中將の日記をいとめでたう書きたるなりけりと見るに、あいな
う一つ心なるこゝちして目とよまる所々多かるに、得忍び給はで「こはいかに御覽する」と
てさしよせ給ふまゝに、

「よしさらば昔のあとを尋ね見よわれのみまよふ戀の路かは無ともいひやらす涙のはろ
ほろとこぼるゝをだにあやしとおぼすに、御手をさへとりへて袖のまがらみせきやらぬ氣
色なるに、宮いとあさましうおそろしうなり給ひて、やがてとらへ給へる御かひなにうつぶ
し臥し給ひぬる氣色の、言ひ知らぬものにとらへられたらむやうにおぼしたるも、いと心
騒ぎして、こゝら思ひつむる心のうちをかたはしだにもうち出づべうもなく、涙にのみおぼ
れ給へり。」いはけなく侍りしより心ざしことに思ひそめ奉りてこゝらの年頃積りぬる心
のうち、あまり知らせ奉らでやみなむも、たれも後の世のためまでうしろめたう侍るべき
により、もらし侍りぬることあさましけれ。またいとかうあるまじう見苦しきもの思ふ人の
たぐひ、昔も侍りけるにやと見ゆるに、あまりうとまじげにおぼしめしたるも心うくこそ。
「かくばかり思ひこがれて年ふやと室の八島のけぶりにもとへ懸かたはしだに洩しそめ
つれば、年を経て思ひこがれて過ごし給へる心のうちを聞え知らせ奉り給ふに、おそろしき

夢を見るこゝち給ひてわなゝかれ給ふを、むげに御覽じ知らざらむ人のやうに、かばかり
をだにおそろしとおぼしたる事」と泣く泣く恨み聞え給ふ程に、人近く參る氣色なれば少し
のきて「今よりはいかに憎ませ給はむすらむな。俄ならむ御心がはりは中々人目あやしく侍
らむ、おぼしうとむなよ。岩切り通し侍るとも、おとぎもあるまじき事と思ひ知りたれば、
よも見苦しき心の程は御覽せられじ。餘りに思ひ侘び侍りなば、通はぬ里にぞ行き隠れ侍ら
むかし。さやうならむ折はさぞかしと思しめし出でさせ給へかしてなむ」など聞え知らせ
給ふ事も思ひやるべし。「されどいと近くしも侍らはぬ人は、いつもけぢかき御なからひに
めもたゝぬならむかし。るみ侍らむ」とて人々近く參れば、宮は御こゝちれいならぬとまぎ
らはして、ちひさき御几帳引きなほして臥させ給ひぬれば、君（君）も顔の氣色やまるからむと
おぼせば、立ち給ひぬるに、宮（宮）は今ぞよろづにおぼしつゝくる。かゝる心おはしける人を露
知らで、誰よりもなつかしく思ひて明暮さしむかひて過ごしけるよと、うとまじうおそろし
きにも、さるべき人々の御あたりならでおひいでけるを哀におぼし知られて、やがて臥し暮
し給へるを、御めのとたちなど例ならぬみけしきはいかなる事ぞとあやしがるにも、誰もか
ゝる御心をも知らぬよ。かやうに常にあらば耻かしうもあるべきかなとおぼすに、ありてう
き世はとけふぞおぼし知られる。中將の君（君）もふと出でそめて後はいと忍び難き心のみ
だれまさりて、つくづくと詠めふし給へるに、殿の御方より參り給へとあれば、何となくこ
ゝちのなやましきにもものうけれど、ささゝ給はゝまた驚き騒ぎ給はむも聞きにくけれど、

うづくまどけなげにて参り給へり。びんのわたりもいたううち解けて、ないがしろなる御うちとけ姿のうるはしきよりも、中々またかくてこそ見奉るべかりけれと見えて、見まはしうなつかしきさまのま給へるを、例のうち笑まれて見奉り給ふ。「よさう中宮（源氏）のいで給はむに参り給へ。うへもひと日餘りとりこめたりと仰せられき」とのたまひて、「源氏の宮の御事を春宮かく心もとながらせ給ふに、いたく侘びさせ奉る」と恨みさせ給ふに、涼しうなりてさもやと思ひ立つを、右の大い殿の唯獨かしづかるらむむすめの、十にだにならばと心もとながる。からうじてこの八月に参らせむと氣色とらるゝをせいすべさにもあらず、さしろひ給はむもびんなければ冬つかた、さらずば年返りてなど思ふはいかゞあるべからむ。春宮も急がせ給ひ、内にもさこそわらめと御氣色あれど、「何かは人のいつしかと思ひ急がれむを、とゞめむもいとほしかるべし」など聞え合せ給ふを、つひの事ぞかし、さこそはわらめと思ひながら胸はふたがりまさりて氣色もかはるらむと思へどつれなくもてなして、「人の事をのべさせ給はむいとほしうや侍らむ。この御事はいつも心のどかにあえ侍りなむ。權中納言の身に添ふ影にて騒ぐなれば煩はしさにかく急がるゝとぞ聞き侍る」と申し給へば、「こゝにもさ思ふなり。右のおとゞのひすらむむすめ、此の御方にえこそならばざらめ。そんなうだち鼻高にさらさらしきさまにや有らむとぞ推し量らるゝや。母、めのとより外にわたりにも寄せず、さほもなくこそかしづくなれ。みづから悔ゆる宮ばらのむすめのやうにやあらむ」とて笑ひ給へば、かの思ひかけざりし宵のは影は、いとしも玉のさすは見えざりしかど、

鼻だかはよく言ひあて給へりと思ふに、少しはゝゑまれぬるけしきをまろく見給ひて、若かりし時がいま見を常にせしかば、さもさまさまなる人をあまた見しかな、人はいと有りかたきものぞかし、思ふやうなる人にあふ事はかたきわざなりや、故院のこと事はいみじうおぼしめしながら、この方はあやにくにせいしさいなみてたやすくもありかせ給はざりしかど、かしこうぬすまれ出で、いたらぬくまこそなかりしか、かくさまさまえささらぬ人あまたものし給ふにおしけられて、哀と思ひしわたりも有りしかど、かひなくこそやみにしかなど昔の事どもおぼし出でたり。「若くよりなほやんごとなき方に定まりぬるはおもりによき事なり。ひとりあるはおのづからさもあらぬ心もわくがれてかるがるしくわろき事ぞ」などのたまひて、「かの御氣色ありし笛のろくはいとかたじけなき事にこそ。その後内々にもあない聞えさせぬはいとびんなき事なり。吉き日して侍従の内侍のもとなどにはのめかし給へかし」などのたまへば、あなむつかしや、あり果つべくも覺えぬ世に、さやうに定まりぬていかに侘びしからむも聞くにさへぞあつかはしきよるの衣なりける、御氣色かたじけなかりきといひながらさばかりの御事を承りて聞えさせ出でむや、中々なめげに侍らむとてすさまじげなる御氣色なれば、心に入らぬ事なめりとおぼすも、うへのおぼさむ事いとほしくてたちまちにこそいはれざらめ、さのたまはせてむを知らず顔ならむは、ひがひがしかるべきわざかなと例ならずものしげなる御氣色なれば、煩はしくて立ち給ひぬ。

「はかざまに藻鹽のけぶりなびかめや浦風荒く波はよるけとも」類などいなぶちに口ずさ

び給ひて、母宮の御所に参り給へれば、「あつげにやこの頃こそいたう瘦せて見え給へ」とて
 心苦しげにおぼしたるけしき、飽くまでらうたげに見え給ふを、殿のさばかり隈なく見集め
 給ひけむに親と聞えながらもすぐれたる御覺えはことわりぞかしと見奉り給ふ。「なつやせ
 はえせもの、事にとかや。かたへ涼しき風に従はむもあしかるべき事は。などかうしも言
 ひそめけむ、渡守にやとはまし」とてゑみ給へる、匂ひさところぼる、こゝちを給へるを、めづ
 らしからむ人のやうに若き人々見奉る。中務といふ人「道のはてなると歎きし人の有りしこ
 そことわりは憎からぬ」と獨ぞつを、まじり目に見おこせ給ひて、「いかにとかや、残りゆかし
 きひとりごとかな」とのたまふを、「あな侘し。聞えけるにや」と侘ぶるさまもにくからず見渡
 し給ふ。殿の「女二の宮に御文奉れ」とのたまへるこそ唯さばかりのなはざりごとだに、大
 宮（中務）聞き給ひて「目ざましくあるまじき事とむづかり給ひけるものを、さやうにはのめかし
 出で、はしたなめられ奉らむこそ唯なるよりは心やましかりぬべけれ。唯さばかりの御氣
 色にて其の夜のめいぼくは限りなかりさかし。中々なる事いひ出で、うへもあざれたりと
 ぞおぼされむ。敷ならぬものはすきすき事好まで、さりぬべからむかげの小草の露より
 外に知る人もなきなどを尋ね出で、よすがともなれかし。さらすば又、いく世もあるまじか
 らむ世にはだしなからむかし」とて涙ぐみ給へるを、母宮御覽じて御顔の色もたがひて、「た
 はぶれにもゆゝしき事なのたまひそ。いみじき事なりともわが御心にこそあらめ。ものうく
 覺え給はむをわながちにも何かは。まいて母宮のさのたまはむには有るまじき事にこそは。

ひと日三位の物語せしついでに、笛のねのめでたかりしにめで、二の宮の事をほのめかし
 、「はいかと思ふらむ。この頃さかりにをかしげにおはするを、行く末の頼もし人に譲らむな
 どうへののたまはせけると語りしは、かたじけなく聞き過してやとこそありしか」とのた
 まふ。かくだにのたまはいいかいはせむとうち歎かれて立ち給ひぬ。暮れぬれば内へ参り給
 ふついでに「まことかのよもぎがもとはいづれぞ」と問はせ給へば「みおきし隨身こゝもと
 に侍る。そこと申しさふらひしかば、又の日見給へしかばおろしこめて人も侍らはざりしわ
 やしさに、かたはらの人に問ひ候ひしかば、筑紫へまかりにける長門守といふ人の家にさふ
 らひけるめのは、ちからどもなむ宮仕へ人にてあまた候ふなる。中務の宮の姫君のめのとに
 ても侍るなり」と申せば、さやうのものゝき集りたる折のまわざにや、少將（中務）のめのとと
 やいひて、大納言の五節に出でたりしげれものゝやなどおぼしやらる。中宮（中務）出でさせ
 給ひぬればみこ（中務）さへうち具し奉らせ給ひていとおほやけしくさうらうしき御有様なり。
 内の御つかひ日毎に参りなどして、殿もかゝる程はこなたがちにぞおはします。宮（中務）の御
 有様かたちなど有らまはしうけ高う恥かしげにてもし給ふ。おほきおとゞの御方（中務）は中
 のこのかみにてもとがしはにおはすれど、かゝるあつかひぐさも持ち給はねばにや、わが御
 有様一つを華やかに今めかしうもてない給ひて、我はと誇りがにおし立ちたる御心おきて
 にぞおはしける。人よりはいかでもて出でたる御物好みなどして、いとわらゝかに憎から
 ぬ御心おきてなるべし。かくさまさまにもてかしづき給ふ御さまどもをぞわけくれうらや

ましくおぼしたる。中將の君はありし室の入島ののちは宮のこよなく臥し目になり給へるもいとつらう心うきに、いかにせましとのみ歎きまざるを、わが心にも慰め侘ひ給ひておもものなきにや、娘捨山にのみぞおぼざる。「春宮に参り給へれば入りぬるいそなるが心うき事」と恨みさせ給へば、「亂りて、ちの例ならずのみ侍りて、あつき程はいと、宮仕意り侍るなり」とけいし給へば、「何ぞ、ちにか常に悪しかるべきぞ。思ひ給ふ事ぞあらむ、わが心には隔てずのたまへ」と近うむつれか、らせ給へば、「こゝちのあしかるばかりは何事かを思ひ侍らむ。これ御覽せよ。かくやせ侍るは死ぬべきなめり」とてさし出で給へるかひななとの白く美しくしげなるさま、女もえか、らじかしと見え給ふ。源氏の宮はかくやおぼすらむとわぢきなくよそへられ給ひてせちに引き寄せさせ給ふを、「わなむつかし。あつく侍るに」とひこじろひ給へる御あはひいとをかし。「かくやせそこなはるばかり思ふらむ事こそ心ななきなめりと今こそ思ひ合せらるれ」とまめやかにのたまはするを、人のとふまでになりぬるよと、いと、苦しけれどつれなきさまにて、さしぬすさまをだに好み侍らぬに、なごありがたき戀の山にしもまどひ侍らむとなほこと少な、るけしきやあるからむ。「あなうたて、あるやうあるべし」とのたまはするも、「御心習ひなめり」とて笑ひ給ふ。

「わが心まどろもどろになりけり袖よりはかに涙もるまで」とぞ思ひつげらる。「心

習ひはげにさもやあらむ、まことならぬいもうとを持たらぬは「など言ひたはぶれさせ給ひて、宣耀殿（大納言女御）にわたらせ給ひぬれば、「今宵はかひもあるまじきなめり」とすさまじくまかで給ひぬ。たそがれ時の程に二條大宮の程に遇ひたる女車、牛の牽きかへなどして遠き所に歸ると見ゆるに、物見少しあきたるよりまろがしらのふと見ゆるは、此の御車を見るなるべし。はやく遣り過ぎぬるを、あやし、ひが目かとおぼす程に、供なるわらはへのもたる物やまゑるからむ。此の御ともの人見つけてがやがやと追ひと、むるに、逃げておひと、められぬ。御隨身のいたく答めかゝりて、「またすだれ懸け給へるはやんどなき僧にこそはおはすらめ。さはありとも暫しおしと、いめであやにくに遣りちがふるはたぞたぞ」と荒らかにとへば「仁和寺の何がしあざ梨の御車にて母上のものにこもりて出で給ふなり」とわな、きいふわらはのあれば、「いでさは尼君か見む」とてすだれ引き上ぐるに、法師走りおりて顔を隠して逃ぐるを、「この尼君はなど逃ぐるぞ」と追ひて走りの、しるを、御車をとめて「かくなせそ」とせいせさせ給へば、牛飼わらはを捕へて「何者ぞ何者ぞ」と問へば、「仁和寺に何がしにぎしと申す人なり。年頃懸想じ給へる人のうづまさに日頃こもり給へるが出で給ふをぬすみ給ふなり。法師だてらくわながちなるわざをま給へば、佛の惡み給ひてかゝる目を見せさせ給ふなりかし。おしと、いめであやかにも遣らせ給はで、年頃の思ひかなひて急ぎ給ふ程に、女車とぞ御覽すらむ。唯とくやれとせめ給へば、師には従へといふ法文を僧のわたりに年へ侍りぬるまゑるしに聞き習ひて走らせ侍りつるなり。今よりは更に更にこの師には従

ひつかはれじ」とおどろおどろしう悲しと思ひたる、をかしようなりてゆるしてけり。君様に志かまかなむ申しつる。「車には誠に女のおはするなめり。人は皆逃げ侍りぬ。かくてうち捨てはいとほしうこそ侍るべけれ」と申せば、「何しにかゝるわざを志つる。常にせいする事を聞かで、いくらむ所はいづくにかあらむ。いかでかさては捨てむ。そのわらはに問ひておくれ」とのたまへば、「わらはの罷りつらむ方も知り侍らず、今さりとも車取りにありつる法師まうできなむ。このわたりに隠れてぞさふらふらむ。御たい松まるらで暗うなり侍りぬ」と「御車つかまつれ」といへど、ぬすまれたらむはいかやうなる人ならむ、心ならぬ事ならばいかばかり怪しかるらむ、暗き道の空にさへさすらふよ、かくて捨ては、ありつる法師はいのまゝにやめて行かむ、さらぬにても今宵かくてあらばいかなる心ちせむなど思すに、いといとほしければ送るべき所も知らず。今宵ばかりは殿へやめて行かましとおほすも、けさうちかづきて走りつる足もと思し出づるもをかしく、道の程手や觸れつらむと、心づきなくゆゝしきに、飛鳥井に宿り取らせむとも語らひにく、おぼさるれど、なほいかなる人のかゝる目は見るぞとゆかしければ、引き返しわの車に乗り移りて見給へば、いとたどたどしき程なれど、さぬ引きかづきて泣き伏したる人有りけり。「あないとほし。いかなる人のかゝる道の空にたゞよひ給ふぞ。いかなる事ありともひとりうち捨て、心うく逃げぬる人はつらくはおぼさずや。吉野の山には思はざりけるにこそ。見捨て、罷りなば今宵今少しおそろしき事も有りなむ。又ありつるかしらつきもまるいぬと見分さもこそすれ。まことに御心なら

でかゝる事ものし給ふならばおはし所教へ給へ。送りさこえむ。なほはいもあり、あの人とわたらむとおぼさばまかりなむ」とのたまふ聲、けはひの聞きならはすあてにめでたきはさばかりにやと見え給ふを、誰にかと覺えなく恥かしけれど、かくのたまふに聞えずばげに捨て、こそおはせめ、さらば有りつるゆゝしきもの、来て、ゐて行かむ事と思ふにかなしければ、ほのぼの覺ゆるまゝに聞えむと思へど、唯わな、かれてとみにも言ひ出でられず唯泣きにのみ泣きまざるけはひなど、よそにて思ひつるよりはあてにらうたければ、苦しうなり給ひて、「さらばまかりぬべきなめりな。御心ならぬ事と聞きつれば、さもやといとほしさになむ。何か泣き給ふ。このわたりにぞものすらむ。よも見捨て聞えじ」と氣色を見むとてのたまへば、おはしぬべきなめりといと怪しきに、言ひ出でむ所のさまの恥かしさ、またははかばかしうも覺えぬに、泣聲はましていとわりなけれど、「堀川といづくとかや。大納言と聞ゆる人のむかひに竹多かる所とぞ覺ゆるを、さていかに」といふけはひいとらうたげに見まさりぬべき人にやとこよなく心とまりて、いき所を問ひ聞きておくらむとおほしつれど、心やすげなる里のわたりと聞き給ふも、やうかはりて中々ゆかしければ、見おかまほしくやおぼすらむお給はで、やがておしあてにおはしぬ。堀川のおもてにはじとみ長々として入る門いぶせくわつげなる所なりけり。戸を忍びやかにたゞければ人出で来てとよなりけり。「さていかいふべき」と問ひ給へど、泣くよりほかの事なくとも言はねば、おしあてに「うづまざより出でさせ給へる」といはせ給へれば、「今まで出でさせ給はずとおほづかなが

らせ給へる」とてあけたれば、蚊遣火さへけぶりてわりなげなり。

「わが心かねてや空にみちぬらむ行き方知らぬ宿の蚊遣火」とのたまふけはひ、やうやうもの覺え行くまゝに、めでたく恥かしげなるにぞ覺えなくあさましき有様を見給ふもたれにかあらむ、いかにしても有りつるものに見えじと思ひつるまゝに、かゝるふせやの下をさへ教へ奉りつるも、いかにおぼすらむと今ぞあさましく耻かしきつまとなるべし。人あけて「こゝに」といへば、車さしよせたるに五十ばかりなるおとゝのまなじしからぬさまえたる、火をいとわかくともして「な」と遅くおはしましたつる。御車の遅かりつるか。たいふの君や参り給へる」とて寄り來たるは影すがたの見知らずわやしきも、うとましく覺え給ひて「覺えなき人來たりとてうちもこそすれ。とくおき給へ」とておこし給へど、火さへわかくてかたはらいたくわりなきに、とみに動かれぬを引き起し給へれば、きぬなどいとあざやかならぬ薄色のなよゝかなるに、髪はつやつやとかゝりて、いとわりなく耻かしと思ひたる氣色など、なべてのさまには有らず唯いとをかしき人さまにぞ有りける。あやしう思の外なるわざかな、誰ならむ見でやみなましかばいかにくちをしからましと思ふものから、さるべきにや、かゝるうちつけ心などはなかりつるものを、いでや、うとましかりつるかしらつきになれつらむかしと思へばなほ心つきなけれど、「かゝる道行く人をおるかにはえおぼし捨てじな。有りつる人に思ひおとし給ふよ」とのたまふに、いと耻かしくておりなむとすれば、ひかへて「などいらへをだにま給はぬ。道のまるべを嬉しとおぼさましかば、とまれとはのたま

ひなまし。あな心う」とゆるし給はねば、

「とまれともえこそ言はれね飛鳥井に宿りはつべきかげしなれば」飛鳥井といふさまぞなほその水影見ではえやむまじうおぼされける。

「飛鳥井に影見まほしき宿りしてみまぐさかくれ人飛鳥や咎めむ。車まつほど人に見せて置き給へよ」飛鳥とており給ひぬるを、あな苦し、びんなさまものをと苦しげに思ひたれど誠に御車の後れたりける、待ち給ふとてやがてそのはしつ方に引きとゞめ給へるに、月は華やかにさし出でたり。女いとはしたなしと思ひたるものから、いたく消え入りたるもの恥にもはあらず、唯いとなつかしうをかしきさまのもてなしなどあやしきまでらうたげなり。家の人々いかなることぞとあやしがり立ち騒ぎたり。御車ぬて参りたるにやと聞き給へど、かばかりにて立ち出づべき心ちもま給はねば、有りつる祈の師や入りこむとものおそろしなから、とかく語らひ給ふ女たれとだに知らぬをわりなしと思ひたり。君飛鳥は思はずなりける契の程も淺からず哀におぼさるゝこと限なし。ものぎたなくうたがはしかりつる祈の師の心清さも、見あらはしては我がすぐせの有りて、さる心もつきけるにやとまであさからずおぼさる。かねていみじう心をつくし、やんごとなきあたりよりは習はぬ草の枕めづらしくて、その後はよひ曉の露けさも知らず顔にまぎれありき給ふよなよな多く積りにけり。この女はそちの中納言といひける人のむすめなりけり。親達皆うせにければ、めのと時かぞへのかみなどいふものゝめにてなま徳ありけるが、又なきものに思ひかしづきて年頃有りけるを、男時うせて

後はわりなき有様に過ぐしければ、この仁和寺の祈の師を語りひて、これに君の事をも知りあつかはせければ、おほけなき心ありけるものにて、人知れず思ふ心つきてかゝるわざはしたるなりけり。車なども又かる人なくて、うづまさに行き、のたよりを喜びてぬすみもて行くなりけり。ありつる牛飼そこに來ても語りければ、「いとあさましかりける事かな。たれといふ人さるわざをし給ひつらむ。わか君（おぼ）いかになり給ひつらむ。いきて見よ」などいひ騒ぎける程に、かくておはしたるなりけり。その後いぎしはおともせねばことわりいといはしくて人やりたれど返り言をだにもせねば思ひ歎く事かぎりなし。この人「かくてやみ侍りなば御まへの御あつかひもいかでかはし侍らむ。ゆゝしきわざかな。早く源氏の宮の内参りとてやんごとなき人々の参りつとひ給ふなるに参り給ひぬ。おのれはいづちもいづちも罷りなむ。此のおはする人はたれぞとよ。あやしくいたう忍び給ふは、御まへには知らせ給へりや」といへば、「知らずよろづ唯心より外にあさましき有様なれば」とてうちなき給ふを、さすがに哀と見て我もうち泣きぬ。又或る人と一日もみかどをむごにたゝかせ給ひしに、明くる人もなかりしかば、「おはしますをいとひまゐらするか。別當殿の御子とは知らぬか。いたうあなづり奉らばかどのをさなどゐて來てこのかど明けさせむ」などいひければ、「少將殿こそおはすなれ」といへば、「まれまれある女ども、この頃はおぢてまうでこす、いたうわりなきや、あてにやんごとなくめでたしとてこの君にはいかゞはせむ。年老いて侍れば行く末の事も思ひ侍らず。あづまの方へ人のさそひ侍るにや、罷りなましと思ひ侍るを誰に見

ゆづりてかと思ふもほだしにてぞおはしますや」と言へば、うち泣きて「誰を頼みてかは。いづくなりともおはせむ所へこそは」とのたまふも哀に心苦しければ、まことに知る人もなくてたよりなきに思ひ侘びてみちのくにの奥のさうぐんといふものゝめになりてやいなましと思ふなりけり。君は見なれ給ふまゝに哀れさまさりつゝ、なほざりごとにはあらず契り語らひ給ひぬべし。さるはこれに劣るべき人も見給はず、わが心もすぐれてこの事のためたしなどわざと御心とまりぬべき故もなけれど、唯ぞゝるに見ではえあるまじういとほしく心にかゝらぬひまなく、我ながらものぐるほしきまでに覺ゆるを、これやげにすぐせといふものならむ。かくのみ覚えばすぐせくち惜しくも有るべきかなと、日に添へてえさりがたう淺からずのみ覚え給へば、待たるゝよなよなもなくまぎれありき給ふこと月頃にもなりぬ。御ともの人々は「まだかゝる事はなかりつるものをいかばかりなる吉祥天女ならむ。さるはいともものげなき氣色なるを」とおのおの言ひ合すべし。かく言ふ程に、このめのといでたちいとすがやかなる氣色にて「見おき奉るべきにもあらず。さりとしてまたかゝる人（おぼ）さへおはしますめればいかでかは具し奉らむ。いかにして過ごし給はむとすらむ」と言ひつゞけてうちひそみ泣くを、「暫しの程だにおはせざらむ世にはあるべき心ちもせぬを、ましていつを限にかとゞめ置かむとは思ひ給ふらむ。かくよろづに所せき身を、いかにも失ひてこそいづくへも」など言ひもやらず心苦しげなる氣色なれば、「さらばいで立ち給ふべきにこそあなれ。御志ありげなる人を見捨て奉り給ひて、あさましき有様に引き具せられ給はむも、いと有る

まじき事と思ひ給ふれど、かくのたまはすれば「などさすがにことわりをかへすがへす言ひ知らせつゝ、唯出で立ちに出で立つを見るに、さらば今いくかにこそなど人知れずかぞへらるゝに、いと心細けれど、たれとだに知らせ給はぬ氣色もさすがにたのみかくべくもあらぬに、かくこそなどほのめかし聞えむも御心のうちを知らねばつゝ、ましくて、唯何となく思ひみだれたる氣色なるを、なほかくおぼつかなき有様のたのみがたくつらさにやと、心苦しけれど、またわが行くへをも蟹の子とだに名のらねば、心くらへにて唯哀に覺え給ふまゝ、いひ慰めつゝ、この世のみならぬ契をぞかはし給ひける。かゝる程に夏も過ぎ秋にもなりぬ。

狭衣卷第一之下

源氏の宮はふるき跡尋ね給へりし後、さやかにも見合せ給はず、ことの外なる御氣色をさればよとつらく心うきに、今はた同じ難波なるとひたぶる心も出で来て、さるべきひまを見給へど、人目こそかはる事なければとあさましくうかりける御心ばへのうとましく思されて、またいかでかさる耳だに聞かじと用意し給へば、岩間の水のつぶつと聞え給ふべき人まの程だにぞ更に有りがたかりける。晝つ方参り給へれば、大宮（源氏）もこなたにおはしましてもろともに恭うたせ給ふなりけり。「とく参りてけんぞ仕うまつるべかりけり」とて近やかに給へるに、ちひさき御几帳なども押し遣られて常よりもはればれしければ、宮はいとはした

なしと思せど、母宮の見給へば例のやうにも得そむき給はず、御顔はいとわかくなりてごもうちさして恭盤に少しかたぶきかゝりて御扇をわざとならずまぎらはし給へる御かたはらめ、御ひたひつき御ぐしのかゝりなど今始めたる事にはあらねど、うち見奉るごとなは類ひあらじと見え給ふ。御有様の美しくさは、千夜を一よにまもり聞ゆともあくよ有るまじく覺ゆるにも、飛鳥井のやどりはたはぶれにてもあさましく覺え給ふに、いとゞしき涙こぼれ給ひぬべければまぎらはしに、「さて誰かせむをば」など聞え給へど、見つけ奉り給ひて例のまづこと事おぼしたらねば大宮もなほとも聞え給はで、「よべ内よりたびたび尋ねさせ給ひしはいづくにももし給ひしぞ。なほかの侍従の内侍のもとに、せうそこのし給はぬはひがひがしき事」とむつかり給ふめりき。こゝには唯何事も御心にまかせてと思ふに、「いざやいかなるべき事にか」とうち歎かせ給へるも人の親げなくわかうをかしき御有様なり。其の御いらへはいかにとも聞え給はで、「殿（源氏）の例ならぬ御氣色なりつるはこの勘當にこそ侍りけれ。東院（太政大臣女）の西のたいの御まつらひは何事にか」と聞え給へば、「故きさいの宮にありける母君のむすめはかこつべきゆゑやありけむ、母うせて後いと哀にてなど聞き給ひけるを、かのうへ（暎）迎へ取りてつれづれの慰めにせむとなむのたまふ」とぞありし。「さやうのれうにやあらむ。をのこゝのいとあやしきもあなれど、宮の少將（源氏）に似たりとて、かの宮の子にまたまふとなむ聞きし。そもさるべきやうやありけむ」などのたまはすれば、「それも殿（源氏）の御子にてあれな。なにがしには似ぬにやあらむ、はらからあまたもたる人こそうらやましけ

れ。忍ぶべき人だになきはとてもの哀とおぼしたる氣色の、げにたゞ見る人だに心苦しげなる御さまなれば、大宮「例のゆゑしき事にくちなれ給へること心愛けれ」とていとまいましくとおぼしたるを、かばかりの事をだにかく思したるよ、行く末はかばかりかしかるまじき心のうちを御覽せさせたらば、ましていかになど思ひつゞけらるゝに涙もこぼれぬべし。ちひさき几帳に宮はまぎれ入り給ひぬれば、すさまじくてはしつ方に人々と物語し給ふに、御前の木立こぐらくあつかはしげなる中に蟬のあやにくに鳴き出でたるを見いだし給ひて、

「聲立て、鳴かぬばかりぞもの思ふ身はうつせみにおとりやはする（蟬など口ずさびにいひまぎらはして）蟬黄葉にないてかんきう秋なり」と忍びやかにうちずし給ふ御聲めづらしげなき事なれど、若き人々は死にかへりめでたしと思ひたることわりなり。さばかりあたりまで匂ひみちて、むかひ奉る人はもの思ひも忘るゝやうなる。あいきやうなどをほこりかにもてなし給はで、いたく静まりてこゝちよげならず、思ふ事ありげに残り多かる御氣色にて折々はもの思はしげに心細げなる口ずさびなどのみま給へば、あらしきえびすも泣きぬべき御さまなり。日の暮れ行くまゝにひもとき渡す花の色々をかしう見わたさるゝに、「袖より外におきわたす露もげにたまらぬにや」と詠め出してとみにも立ち給はず。蟲の聲々野もせのこゝちしてかしがまじきまでみだれ合ひたるを我だにと、もどかしうおぼされけり。月出で、更け行くけしきに、かの程なき軒にながむらむありさまもふと思ひ出でられ給ふ。おぼろげならぬ覺えなるべし。おはして見給へばおぼしやりつるもまろく、葎などもいまだおる

さではしつ方にぞ詠めふしける。こざらましかばと哀にて袖うちかはし、こまやかに語らひ給ふに、晝の御有様思ひ出でらるゝに、よろづにこよなき目うつしなどには、なにの慰むべきぞと思ひ出でられながら、わざとけだかく誠しきよりは、中々さまかはりたるうち解けなごより始め、ものはかなげにらうらうしからぬもてなしなどの、あやしきまでらうたく見ではえ有るまじくおぼせば、思ふ事かなふまじくは有りはてせと思ふ世に、はだしとまでやならむと思ひつゞけらるゝにも、例のもろき涙はまづ知るを、いかゞ心うらむと常よりももの歎かしげなる氣色の哀なれば、久しう世にえあるまじきこゝちのすれば、世の人などのやうなる心ばへなどもことになくて過ぐしつるを、いかなりける契にか、はかなく見そめ聞えて後は見捨てむ事の哀に覺え給ふを、「さらばいかゞはおぼす（行）べき。そをだにのちのとたれ言ひけむな。逢ふにはかへまほしかりけるものを」とておしのごひ給へる袖の、少し濡れたるなど、さやかなる月影にこれはなほおとに聞き渡る人にこそおはすめれ。我が身の程を思ふにもなほたのむべき御有様かは、かやうにおぼし捨てざらむ程に、雁の羽風にまよひなむこそ心にくからめと思へば、げに涙とりあへずこぼれぬるもはしたなくて、顔をふとこゝろに入るゝまゝに、

「花がつみかつ見るだにもあるものをあさかの沼に水や絶えなむ（鶺鴒）ものはかなげにいひなしたるけはひなど、若びたるものからいとらうたし。

「年ふとも思ふ心し深ければあさかの沼に水は絶えせじ（鶺鴒）。かくいと浮きたる事と思ひ給

ふとも長らへては心の程も今見給ひてむ。ならはぬなほざり事などは人にいふものとも知らざりけり。心よりほかの事おのづからあるともわたくしの志はかはらじとなむ思ふ」など心ぶかけに語らひ給ふまゝに、いと悲しくなりまさりてなほかくなむとやはのめかして、御氣色を見まほしと思ふも、思ひ立つかたの事とても少し人々しきさまにだにあらす、中々おぼしやらむにもあさましう恥かしければ、唯行くへなくてやみなむと思ひとる方はつよきものから、あさましかりける心の程かなと暫しはいかにおぼし出でむすらむと思ふに、せきやる方なき袖の志がらみを、君は唯ひとへに若びたるさまに我が行くへなきもてなしなどをつらき方に思ひたると心得給ひて、とかへる山の椎柴とのみ契り給ひけり。誠やかのおほきおとりの御方には、此の姫君迎へ取り給ひて西のたいの玉をみがけるにまづらひす給ひて見給ふに、あてやかにさてもありぬべきさまなれば、年頃のほいかなひてはればれともてかしづき給ふさま世づかぬまで見ゆ。殿のうちにも世の人も、「いみじかりけるさいはひかな」とめでけり。年は二十にぞなり給ひけれど、いたくおほどき過ぎて、餘りいはけなくものはかなきさまにて、げにおぼろげに思ひうしろむ人のはかばかしきなくば、うしろめたげにぞおはしける。心に思ひ餘る事ありとも色にいだし給ふべうもあらず、ことの外にあさましき事なりとも人だにもてなせば、おのづから忍び過ぐすべくおはするを、よき女のかしづかれ給ひたるは、かくこそおはすべけれと見ゆるものから、あまりうもれ給へる御有様にはたがひて、行く末やいかゞ見なされ給はむと心苦しかりける。又なきものに思ひかしづかれ

たりし親の御もとにてだに、かくはるけ所なかりし御心ばへの、まいて俄に母にもおくれかなしくせしめのともしつゝせにしかば、心のうちにはいと悲しかりけるに、まめやかに思ふ人だにそはで、かく知らぬ所に迎へられて、ありつかずはればれしうもてなされ給ふに、いと我にもあらぬこゝちしてはれまどひ給へり。うせにし母のなままぞくの高きまじらひして、人かすならで世にあり侘ぶるさすがにゆゑづきもの見知り顔にて、かたはらいたきもの好みさらすと覺ゆるありけり。をばの尼君かゝる人よび取りて添へたる、げにゆゑゆゑしげにて母をろにまたり。うへ時々見給ふに、いでやともものしく見給へど、こまかなるお心さまにはあらで、さすがにおほどかにて人の有様などはいたうも見知り給はず、心をやりてうへばかりはかしづき給ふに、此の御母をろぞ悪しくせばかたはらいたき事も有りぬべかりける。心にまかせたるつくり親どもまてたるわかうどの思ひやりすくなき限り、數も知らず集め侍らはせて、よるとなれば殿上人、諸大夫まで出し合せてさわぐ氣色どもいと今めかし。君は唯わかこのむつきにつゝまれたる心ちして、あるにもあらずまかせられ給へるまづらひ、有様などのめたく同じ我が身とも覺えぬを、人知れぬ心のうちには、「母やめのとなどにこれを見せたらましかば、いかで人なみなみななむ」と明暮いひ思ひたりしものを、よしなき人にまかせられて、心に思ふ事もいはまほしき事も包ましく恥かしうて聞にむかひたるやうに覺ゆる事と思ひつゝけては、忍びてうち泣き給ひけり。されど唯見るにはうつし心もなきやうにてぞおはしましたしける。九月ついたち頃なほしものゝあるに、中將の

君中納言になり給ひにけり。大殿これをもいまいましげに思したれど、さのみやとてまだいのまゝにわがり給ふなるべし。よろこび申しに内、春宮などに参り給ふとてつくりひ立て、まづ殿の御方に参り給へるに、かたち有様などつかさくらるに添へてゆゝしきにのみ光りまさり給ふを、こといみもまわへ給はぬ氣色にて、立ちぬつくりひ給ふ氣色ぞことわりにも過ぎてかたじけなく哀なりける。おほきおほいと、御方に参り給へるついでに、この今姫君のすみ給ふ西のたいの前を過ぎ給ふまゝに、いかやうにかとけしきもゆかしければ、わたどのより少しのぞき給へば、みす所々おしはりて、人々あまたけはひしてとこぼれ出でたり。かのささいの宮職の人々もあまたなむわたり参りけると人の語りしも心耻かしう、まだ見給はぬあたりなれば、用意して歩み出で給へれば、人々見つけて入り騒ぐけはひどもいともの騒がしきをあやしと見給ふに、几帳ども奥より取り出で、がはがはそよそよと立て渡し、裾うち廣げひもどものよらはれたるをと引きかく引き、廿人ばかり立ちさまよひつくりひさわぐきぬのおと、几帳などのおとにももの聞えずあわたしくみつかぬ心ちま給へど、今やそゞやむともの言はで、つくづくとる給へば、からうじて几帳立て、後、おのおのきぬの裾、袖口、わらはべのかざみの裾などのみだりがはしくなりたるをつくりひみて、こかしこよりおし出で渡して、やうやうのどまるにやと覺ゆる程に、几帳のはころびをはらはらと解き騒ぐおともまゐるくて、一つ綻びより五六人顔をならべて、まづ我見むまづ我見むと争ひたるけはひどもの忍ぶるからにいとかしがまし。からうじて見えたるにやあらむ誠

にめでたかりけり。「あなものをぐるはしや。日比見つる殿上人などは唯つちなりけり」とさゝめき合へるいとをかしう覺えて、「このみすの前はの今までうひうひしう侍りけるも咎めさせ給ふべくやと恨みまゐらする」などのたまふ御けはひ、げにおぼろげの人はふといらへにくげに耻かしげなればにや、そこらはしはしと聞ゆる人御いらへ聞ゆるはなくて「そやまづは不用なり。君のたまへ君のたまへ」とつきまろひさゝめき立ちて逃ぐるあるべし。「あなわりな。ものにくるふ君かな。まろはまして不用なり」とてそゞばしるなれば、きぬの裾を引きとゞむるにやたふれぬ。きふきふと殊更めき笑ひ入りつゝ、まはぶきにまゐるも有り。あるはまたあなまやあなまや。さばかり耻かしき御有様に、なごての程と思ひ給ふかなともせいするなり。さまざまわやしきこゝちま給ひて、まじ目耻かしげに見入れつゝ、なげしにおしかゝりて給へるけしき、このみすの前にはあはずぞ有りける。なほ唯きえ入りきえ入り、扇などうちならしつゝ、笑ひそぼるゝけはひどもものぐるほしければ、「こはいかにとよ。うるまの島の人も覺え侍るかな」とて少しは、笑み給ふ氣色などみすのうち耻かしげなり。奥より人寄り来て几帳の前なる人に「唯恨み歌を母とよみかけよ」とさゝめくなれば「わう君ぞながめ聲はよき。まろは更に更に」と笑ひ入れば「あなまはゆの色好みや」とて肩のわたりを扇していたく打つなれば「たうしは君なしとてつむなるべし。あしうまてけり。いたしいたし。そこはなてはなて」と忍びあへぬ聲、いづくならとをかしきに死ぬべければ、立ちのきなむとする程に、おとなしき聲の高やかに、またりがはなる出で来て、「いでや、さぶ

らふ人、人がらくそよき人はをかしき名も取らせ給ふわざなれ。かばかりにてはわかうどたちさぶらひ給はでありぬべし」とさすがに忍びて、にくみわたしてさし寄りて聞ゆ。「めづらしき御聲こそおぼしたがへたるかとまで、

吉野川何かは渡る妹背山人だのめなる波の流れて」母とげに母と詠みかくるけはひ、またどのどかわきたるを若びやさしたちて言ひなす。これぞこの母代なるべきと聞き給ふ。「恨むるに淺さをまさる吉野川深き心は汲みて去らなむ。おぼつかなきこゝち去侍りつるに、嬉しき御けはひと思ひ給へるにものをこそわしざまに申しない給ひぬべかりけれ」とのたまへば、さわやかにうち笑ひて、「さらば今よりのけざんをまめやかにつとめさせ給へかし。若き人々の思ひむせぶめればいぬもときとてかや」と高やかに言ふ。いとわやしきたとひかなり。「まめやかにはおもておせにやおぼさるゝとて今まで参らざりつるを、けふはかはるゑるしも御覽せられむとてなむ、おまへにかくときこえさせ給へ。このみすの前はならひ侍らねばはしたなく思ひ侍れど、かくごんのうすさにけふばかりはなぐさめ侍るを、今よりのちぞうらみ聞ゆべき」とて立ち給ふに、萩のうは風のあらゝかに吹きこしたるに、俄にみすを高く吹き上げて几帳もたふれぬれどとみに引きなほす人も無し。「あなわびし。あれを見給へ。あれを見給へ」と言ひつゝ、我も我もきぬを引きかづきつゝ、一つにまろがれあひたる程に、のどのどと見入れ給へば、かうぞめににび色のひとへ、紅のはかまの黄ばみたるを着てひるねきたる、人々のさわぐにおどろきてあうなく起きあがりたるに、いとよく見わは

せてあさましきや、とみにうちそむきなどもせずあきれたるけはひ、かははいとをかしげなり。心なのさまやと見えながら、女房のありさまともよりはこよなく見つべかりけりと思ひまし給ひつ。かのせうとのかこちけるゆゑにや、少將殿にぞいとよく似たりける。殿の御子とは言ふべくも有らざりけりと見るに、たゞならずや思ひ給ふらむ。やうのものとおやしの心ばへやと我ながら心つきなし。母老ろからうじて几帳おこしつれば立ちのき給ひぬ。又の日殿の御前にてきのふの事どもなど申し給ふついでに「かの東院にはものしたりきや、西のたいに住むる人をこそまたとぶらはね。いかやうなる氣色か見ゆる」とのたまふ。うちうちのありさまのいとわやしきを、子ながらもいかゞ見給ふらむと恥かしうおぼすなるべし。几帳のはころびあらそひしすきかげども思ひ出でられていとをかしきを、念ずる氣色やゑるく見給ふらむ、うち笑ひて、「よしなきものあつかひ好み給ふ程に、たがためにも中々なる事やとこそ見ゆれ。年頃もかくいふものありとは聞きしかど、覺えぬ事なればかやうの人少なきくさはひにも取り出でぬものを何のたよりにかくまでも有りそめにけるにかとありつかずや」とうめき給ふもげにとは聞けどあさましと、あきれたりし顔はさすがにくむべうも有らざりつれば、「つれづれにおぼされむに、こと人よりはなごてかわしうも侍らむ。たしかなる名ざしにてとかくさすらへむもいとほしう侍るべし」とどのたまふ。「いざや、かく言ひそめけむも覺えなくぞあるや。夜目に見しかば宮の中將殿にこそいとよくにたりしか。せうと殿のまれのあなり。それもかの宮殿の御子とぞいふなる。これ殿もさなるべし」などの

たまふ。まことかの飛鳥井にはめのと皆出で立ちて君をさへ引き具せむもいと心苦しう、さりとてとゞむべきならぬば、さすがに思ひなげくに人知れぬぬのみなかれて、たれをたのみはなれ聞えむ事は忍びがたくあはれに覺ゆるも、かつはことをこがましき心と思ひたる氣色のいとほしきを見るに「さらば何かは下らせ給はむ。京にもたよりなくて獨とゞまらせ給はむこそうしろめたなうも侍らめ。又われもいかにともおぼしめさめ。女は千人の親めのとやくなし。御をとこのおはせぬ程なり。まいてかくやんとなくものたのもしき人にもおはすなり。御志いとねんごろなるを引きはなれて、かゝるあづまぢに立ち添ひ給はむいとあるまじうかたじけなし」などさすがにあるべき事をばいひながら、いかに思ひかまふる事かあらむ、この人様のおはするよひあかつきのかども心安からずかき失ひがちにもてなしつぶやくけはひ、御ともの人々聞きて目ざましうあさましきに、ふみこぼちて入りなまほしき折々ありけり。殿様にも忍びて「たれと思ふにかかくなむ」と申せば、女の氣色のあやしうのみあるはこの見しほかげの女のありし法師に取らせむとてするなめり。さやうの事に思ひむすぼれたるなめりと心え給ふ、いと心つきなくゆゝしけれど、女君のありさまのあやしくのみ見ゆるは、いでやさらばとてやむべくもおぼされぬばいかにせまし、殿にさぶらふ人々のつらにてやあらせましと思へど、人知れず思ふあたりの聞き給はむに、たはぶれにても心といひる人ありと、いかで聞かれ奉らじと思ふ心し深ければさもえあるまじ、さらではさ

すがにこゝかしことあつかひ給はむもいかにぞやとおぼされつゝ、今おのづから我と知りなばえいとほじ、かくろへぬべき所も有りぬべくは、ありさまに従ひてとおぼすなるべし。「女君にもおひ人のにくむなるべしな。ことわりなりや。たのもしげなりしりの師を引きたがへてかくものはかなき身の程なれば、おとなしの里尋ね出でたらばいざたまへよ。わづらはしき人のさすが有れば、まばし人に知らせじと思ふ程に、かくおぼつかなくあだなるものにおぼしたるもことわりなり。我は何ぞにてかはあながちに知られじとは思ひ給ふべき。いひ知らぬまづのめなりともこれよりかはる心あるまじきを、なほ頼む心のあるまじきなめり」とうらみ給へば、さそふ水だにあらましかばとも哀に思ひて、此の別當の少將と思はせ給へるなめり、せいすべき人ありなどのたまはしと思ふにも、かりそめにうち頼みて行くべきかたを思ひとまらむ事はあるまじう覺えながら、いとかくめでたき御ありさまにてなつかしう哀に語らひ給ふを、「行くかたの目安からむにてだにいかでかは哀ならざらむ。森の空蟬」とて涙こぼれぬべきをまぎらはしたる氣色、いとうたてげなり。かくいふ程はこの女君たゞにもあらずなりにけり。うちはへてものをのみ思ひて、ありしさまにもあらぬ氣色なるを、誰も唯この御いでたちを思ひなげき給へると見るに、まるき事どもありてめのともし見知りて、「あないとほしや。かくさへなり給へるものをいかせさせ給はむする。君になは聞え合せ奉り給ひて、御氣色にこそ従ひ給はめ。かくなり給へると聞き給ひてはよもあだあだしくも思ひ給はじ」といへど、いかなりとも頼むべき有様ならばこそあらめ、見え

ぬ山路のみこそよからめといふものから、げにかくさへなりにけるを、露知らせでやみなむ事などいみじう覺ゆれど、かけてもまいていひ出づべきにあらねば、日を數へつゝ泣き歎くより外の事なし。この殿の御めのと大貳の北の方にてあるなりけり。ことゝもあまたある中に式部の大輔にてらひ年つかさ得べきが、かやうの人などの中には心ばへかたちめやすさですきずきしう色好むありけり。いかなりともかたぢすぐれたらむ人を見むとて、めもなくて過ぐすに、此の女君うづまにこもりけるをのぞきて見て、思ふさまなりければせうそなど去けれど、みづからは聞き入れぬに、このめとはいと耳つきに覺えけれど唯今かく頼む僧のいひ契りたればえいなむまじうて、たちまちのうけはせねど、つかさなど得て下り給はむ程にはさもやなど契りけるに、かく事どもたがひて身はたよりなし。なま公達のいたうかくろへてよるよる時々おはするを、いとふさはしからねば、あづまをとこにつきてやいなましとおどすなりけり。されどこの式部の大輔親のともに筑紫へ下るに、「思ふさまならむ人をなむゐて行かむとする」といひおこせたるに「いと思ふさまなるこゝちして別當の御少將の通ひてあるなれど、めのとうけひかずなむむつかる」といふ人のありけるを喜びてせうそしたりけるに、寺にてはあはるまじきさまを聞きしを、めのこと思ふやうにめでたく覺えて「あづまも思ひとまりてまことにさもおぼさば、まばし君には聞かせ奉らでくだり給はむ程に迎へ奉り給へ」といひければ、いみじう喜びて、「さやうのはそきん達にかけめにておはせむよりは唯試み給へ。おとの御さいはひにてこそおはせめ」などことよく語らふ。い

で立ちのものなどげによげにおこすれば、心ゆきはて上下の人もとめなど去けるに、式部大輔のもとよりは「くだりも近うなりにけるを、さはたがへ給ふな」と日に千たびいひおこすれば、「あなまがまがし。世にたがへ侍らじ。その曉に御車を給へ。さりげなうてふとわたし奉らむ」といひやりて心のうちには皆いでたちたり。君にはいでたちはとまりぬ。たいならずさへおはしますすにいと心苦しうて「此の度はいひはなちてやりつるなり。今はとかくおはしまさむを見てぞいづちへもまかるべきなめり」と心ゆきたるさまにていへば、女君まことと思ふに心少しおち居ぬ。うちへこちさへあしかりつるも、惜しからぬ身はとういかにもなりなばやと急がれつるを、かくなりにけりと聞きあらはして、哀なりける契かなと思ひ知られてうき身とのみ思ひ入れつるを、少しいたはしう思ひなるも哀なり。野分だちて風の音あらゝかに、窓うつ雨もものおそろしう聞ゆる宵のまぎれに、例のいと忍びてまぎれ入り給へり。いつもなえなえとやつれなし給へるに、雨にさへいたうそぼちて、匂ひばかりはいとなしろせきまでくゆりみちたるを、隣の山がつども、あやしがりけり。「かやうの有様はまだならはざりつるを、人やりならぬわざかな」とて濡れたる御どときちらして、「ひまなくうち重ねても心より外にへだつるよなよなのわりなきを、さは思ひ給ふや。かばかり人に心とむるものところならはざりつれ」などつきせす語らひ給ひて、

「あひ見ては袖ぬれまざるさよ衣一夜ばかりもへだてずもかない。わりなき心いられなどはいつならひけるぞとよ」とのたまへば、

「へだつれば袖はしわぶるさよ衣つひには身さへくちやはてなむ」體といふものはかなげなり。よし見給へよ。世のはかなさなどこそうしろめたけれ。名残なき心などはいかなる人のつかふわざにか」などのたまふを、さしもあらじなどかどしきさまにもあらず、心のうちにはいかならむ、目のまへはたおなじ心なるさまにもてなして、かくたしかにいひ知らせ給はぬをも、とやかうやとあながちにも尋ね知らず。また我が身の行くへもさりといはぬものから、なよなよとらうたげにてなびき聞えたるさま、あやしうまことにらうたげなるを見つくまゝに、限りなき人々の御有様にもおとるまじくて、忘るべきものともおぼされざりけり。例のよ深く歸り給ひて、我が御方にふし給ひて少しまどろみ給へる夢に、この女の我がかたはらにあると思ふに、はらの例ならすふくらかなるを、こはいかなるぞ、かゝる事のありけるを、など今まで知らせ給はざりける、かゝる契もありければ何か行く末をもうたがひ給ふとて夢のうちにも哀と思ふに、この女、

行くへなく身こそなりなめこの世をば跡なき水を尋ねても見よ體といふとおぼすに、殿の御かたより、「けふあすはかたき御物忌なりけるを忘れさせ給ひにけり。あなかしことよりの御文など取り入れさせ給ふな」などのたまはせたるに、ふとさめて胸さわげは抑へて「承りぬ」とは聞え給へど、心騒ぎせられてあやし、いかに見つるぞ、まことに例ならぬ事やあらむと今ぞ思ひあてがする事もありける、心細げなりつるはいかなるにかなど常よりもおぼつかなくゆかしきに、よさりもえおはすまじきなれば、こまかに御文をぞ書き給ふ。「常よ

りも今も見てしがとなむよさりも物忌なればえものすまじきにや、

飛鳥川あす渡らむと思ふにもけふのひるまはなほぞこひしき體。誠とく語りあはすべし夢をこそ見つれ、心もとなく」などこまかなれど、返り事には唯、

「渡らなむ水まさりなば飛鳥川あすは淵瀬となりもこそすれ」體。筆づかひもじやうなどわざとよしとなけれど、なつかしうをかしささまに見ゆるは思ひなしにや。かしこには筑紫の人、曉になむ夢々たがへ給ふな」といひければ、「唯曉にさりげなくて車をふと寄せ給へ。たがふといふ事はあなゆゑし」といひにやりて女君のひとりながめふし給へる所に來て「あすのまたつとめてこの西に井ほるとて家あるじ外へわたりけり。いかせさせ給はむする。車の事を誰にいはまし。君かやうの折にこそいさしは思ひ出でらるれ。かくのみ世の中にたよりなきにこそ思はぬ山なくわりなけれ。いみじう思ふともやめめは思ふ事のかなはぬにぞくち惜しきや。かゝればえせ宮仕へ人は忍び、語らひ人はまうくるぞかし。まことまこと此の隣の駿河のめ君こそものゝなさけありていはむ事聞かむといひしか。いひにやらむ、さてこの藏人の少將殿の御めのとの家かりてまばし渡し奉らむ。なんぞふことか侍らむな。年頃いみじき知る人なり。この御事のち中々いとつゝ、ましうておとづれぬを、かくとや聞き給ふらむ。さるにても悪しかるべき事かは」といひ散して立ちぬるを、「あな見苦し。ありきもこりにしかば、つちいまでもありなむ。まいて其の知らぬ人のもとはいかでか」とのたまへば、「あなまがまがしや。たゞならぬ人だにつちいまぬや侍る。まいてかくおはします人

はあな恐ろしあな恐ろし」といふ。よろづよりはかの少將殿と思ひていかなるひが事言はむとすらむ、よなよなの月影も常にまへわたりま給ふひかり見合すれば、まぎれ給ふべくもあらぬものをと思へど、とやかやとこの事をいはむにもよき事と思ひたらぬ氣色なるにはいとつゝましければ、いかなるひが事どもをま出でむすらむと思ひつゞくるにも、もとよりものはなくわやしかりける身の有様思ひ知られて、かくまでもさすがに見え奉る契は淺からず我ながら思ひ知らるゝを、此の事誠にさもあらばさりともし思ひかすまへ給ふやうにありなむかし。のたまひ契るありさまもさりとも空言にはあらずやなど思ふに、「我が身少しいたはしうなりにたるを、この頼もし人やいかゞもてなしはてむとすらむ。源氏の宮の御方へと思ひしもかやうの人に見え奉らむが恥かしさに、心どはきやうにてやみにしを、げにかく思はずなるさまにても見え奉りけり。今はまいていつくにもいつくにも、さやうのすぢなど思ひ立つべきにもあらずかし」などいひひのはてはては、うしろめたうぞ思ひつゞけるゝに、枕も浮きぬばかりになりぬ。めのと又きてよろづのもの取りまたゝめ、さるべきものはぬりごめに置きなどまつ、「京の内には一夜ばかりと思ふまじきものぞ。まいてこの非は五六日にもなりぬべかめり。筒など立てむ程までこそはおはしまさめ。車も有りがたきにたまたまありかせ給ふもかくうるさながらせ給ふめるに」などいふめれば、君「此のたまひつる所かさらばなほいくまじとこそ思へ。知らぬ所にいかでかさてはあらむ」とのたまへば「さ思しめさばとまはどのに渡らせ給へ」といふは故中納言のらうせし西山のあたりな

りけり。いざまだそれも久しうつちをいまじとおぼしめさば御心なり。おのが申さむ事のはかばかしからじ。とかうおはしまさむ折の御有様もさすがにそれまでいきて侍らば、わやしの女の身こそは見奉らめと思ふ給ふに、「いまいましきぞや。さらぬだにこそ子生むにはどうといふものはかならず出でくれ。御いみのかたにさへあるよ。この頼もしき人の御心ばへ、さやうの程とてもかひがひしうもてなしあつかひ給ふべきにこそ見え給はぬ。いひ思へばくにてぞ侍らむ。かやうの君たちは親などの立ちたのもしきあたりをだに少しもうしろみやめばうち捨て給うつ。いでやまして何の敷とかは思ひ給はむ。あなをこがましや。又御志あらば所かはるともおはせざるべき事かは。戀こそみちの」とさすがにうち笑ひていふ。かく外へいさしく、するもこの人によりてと思ふぞかしと思へば、「其の事にはあらずわやしきありさまなればありきものうく覺ゆるを、いざやいとものごりして」とのたまへば、「さてそれも悪しうや侍りける。それによりてこそかゝる御さいはひも御覽すれ。かしこは中々若き人のおはし通はむにをかしき所なればうち忍びて二三日も居給ふやうもありなむ。何がしそれがしとめて侍れば、御使にもそこそこ教へ侍りなむ。おはしましたむにも、よくよく案内申せよといひおき侍りぬ」などぞいひむ。げすどもよびたて、いふもかたはらいたければ、「さまで尋ぬる人もあらじ」といといおぼつなきものにのたまふ。げに行くへなくば昔物語などのやうにことさらびてや思さむ。誠にかくと聞えばやと思ふに、「かはらじといひし椎柴待ち見ばや常磐のもりに秋や見ゆると非難。とかへる山のとあり

し月影はこの世の外にならぬとも、思れ給ふべくもなきをいかになしたるぞよ」とおやしきもの心細く、火をつくづくとながめて涙ぐみ給へるまみの氣色いとゞらうたげなるを、めのはくちをしきさまかなと涙ぐまれけり。曉に車のおとして門たゞくなれば、「いであはれ人を、聞くにも胸うちさわぎて、飛鳥川を心もとなげにのたまはせたりつるはよさりなどは例のものし給はむに、いかやうにいひてか歸り給はむなど、なほもめうきもうたてある心かなと、めのとのものいひも心恥かしながら、おぼつかなくもものし給はむは心より外なる身のあやしさをまづ思ひつゞけられて動かぬを、つゞ戸おし明けて、「さらばとう渡らせ給ひぬ。人のいそぎ歸らむに久しうならむもいとほし」といひてあざやかなるきぬもて来てうち着せ、櫛のはこやうのもの車にとり入れなどして、唯急ぎに急ぎて、「おそしおそし」とおしするやうにすれば、われにもあらでぬざりうづるに、何と思ひわく事はなけれど心さわぎしてむねつとふたがりたるこゝちす。鳥も今を鳴くなる、

天の戸をやすらひにこそ出でしかどゆふつけどりよとはいこたへよ」船のなほ唯今などは聞えまほしきに、とみにものりやらす涙せきあへぬ氣色を、まいていかにと道の程の有様思ひやらる。めのと又一人ばかりぞ去りに乗りぬる。門引き入るゝよりやなぐひなどおひたるもの見も知らぬ姿どもまたるものかず知らず多く、火は晝のやうにともして「明けは

てぬさきに「なごいふ氣色もあやしきものおそろしきに、こはいかなる事ぞと唯かきくらすこゝちすれば、衣を引きかぎきてふしたるに、かの行き方知らぬとありしを、聞きはじめしより月傾いひ契り給ひつる言葉、けはひ、有様思ひ出でられて、我が身いかになりつるにかと思ふだにいみじきに、淀といふ所に行きつきぬれば船にのせむとのゝしり合ひたるに、さればこそ常磐にあらざりけりと思ふに、ものも覺えぬと目は見ゆるにや、岸に船ども寄せてのせうつさむとて、二十ばかりの男船のきたなげなしとやいふべからむ、つきづきしうをいふかなるかたちなどいといみじう思ふ事なげに心ゆきたるけしきにもてなして「大貳殿は今鳥かひといふ所わたりまではおはしましぬらむな。中納言殿船の御物忌かたかりつればとみにえいで、後れ奉りぬるなり。御さそくよろしからざりつればいとまもえ申し出づまじきなめりと思ひつるに、高名の馬をこそ賜はせたなれ」などいひて、おくりの人々なるべし、同じ程のものども「えぐちのせうえうこの度はふようなめり。大貳殿いそぎ給ふ」などはこりがにうち笑ひたるを、何者ならむ、行幸賀茂の祭などに別當の去りにやおそろしげなるものさげつゝ、あるものこそかゝるかたちは去たれと、見るだにうとましげなるに車に寄りきて、「御船に奉りぬ」とてかきいだきてのせうつす程の心ちいかばかりかは有りけむ。めのとの心ゆきてものいひえわらひなどするをきくに、ねたう悲しとも世の常なり。いかなるものゝいづくの世界にゐて行くにかあらむと、すべていひやるべき方ぞなきに、たゞやがて起き走りて河におちいりなばやと思へど、唯今おとしひれて見る人もあるまじければ、唯かし

らをだにさし出でず引きかづきてふしたり。男添ひ臥してえもいはぬ事どもを慰むれば、いと泣きまさりてあやしくなるけしきなれば、「さのたまふともたけきことおはせじと思へばをこがましや。何がしの少將のかげめにて、道行き人ごには心をつくし胸をこがし給はむやは。あやしくとまたなくかしづき奉らむを、とり所におぼせかし。なまさんだちは中々いとこゝちあしきものぞ。殿のおはしまさむかぎりは何がしらをばえこそ其のきん達はあなづり給はざらめ。さばかりの少將にはならむと思ははなりぬべし。よし見たまへよ。らいねんばかり、かへり殿上して五位の藏人になりて、其のぬしといづれかまさりけるとなりいで、見せ奉らむ。くち惜しうはいなしとおぼすとも、今はいふかひなければ、唯おいらかにもてなしていとまなじしからぬやうにても御心に他かぬ事なく安らかにて過ぐさせ給へ。きんだちならずとておのれをばゆるきものと人にも思はれたらねば、まだこそ女にくみならはされぬ。御まへよりはまさりてやんどなき人たち我も我もとのたまひつれど、うづまさにて見奉りそめてしより思ひまみし心なほりがたくてかくめんぼくなき目を見侍るにこそ。おとこそなほこれ申しなほし給へ」などいひあだへつゝ、かづきたる衣をせちに引きのけて顔を見るに、はのかなりしよりもちかまさりして、いとゆうたてげにをかしげなれば、思ふさまに嬉しくて、いかでとく思ひ慰めて、あかぬ事なくかしづきて見むと思ひけり。おとこつれづれなりし名残なく其のあたりのものどももてあつかひたるこゝち嬉しう思ふさまなるに、女君の御ありさまのいとあきたくあやにくげなるを、いかに見奉らむ、「さ

ばかり我も我もとむこにはしがりし人を捨て、かゝる御氣色御氣色はさいはひとこそ覺ゆれ。物のさまたげのま奉るなめり。あらみさきといふものはなたぬ人は、かくよかるべき事は悪しうなむ覺ゆる」と人々言ひ合せてなげくを聞きて、「おとこだにさし出で給へや。かくまで心うき御心ならむと思はざりしが、はいなきやうにはいかでかおぼさゝらむ。さりともいとあやしや」とてもものうげなる氣色なり。かわぢやうのもの明けさせて、人々のえさせたりつる扇、たき物などやうのもの取り出で、「はかばかしからぬど、或る人々にもし給へ。かゝる人おはすべしとも知らせざりしに、いかでか聞きけむ。忍びて人ゐて行くなり」とてそれがし、かれがしなどいひて取りちらす中に、女のさうぞくの心ことなるがあるを、「これはまろが中納言殿の、誰と知らぬどゐて行くなる人に必着せよとて、給はせたりつる御志のまゝに奉り給へ。御涙にいたうまをぬるなめり」などいふを、「げになべてならぬ色あひにこそ侍るめれ」などめでゐたり。又この御扇も賜へりつるを、新しきよりはとて申し取りたる。「めはづかしき人にもこそわれ。いたうなれたり」と惜ませ給ひつ。されどかたみに見よとて賜はせたるぞはかなくうち持たせ給へる。「かやうのものどもさへぞなべての人には似させ給はぬや」といふを聞くにも、これはさばこのうづまさにて聞きしものにこそわれ、こと人にだにあらで、あな心うの有様やと思ふに悲しければ泣き入りたるに、この御扇をさしよせて、「これ御覽せよや。いかにして一もじも見ばや一もじも見ばやと、高きも短きも心をつくして騒ぐ御手よ。これ見給はまろがにくきもなぐさみ給ひなむ」といふは誠に我が見し同

じものによとゆかしきに、人目も知らず起きあがりて見のべき心ちすれど、顔などのあきらかに見えぬべければ、なほ泣き臥したるを、「わが君をこそかやうに戀ひ悲しめ。その青びれ男によりて命絶えぬべくも見え給ふこそかへりては心つきなけれ。何事をいとさまで思ひ給ふぞ。まろが顔はこよなくよきぞ。見給へ見給へ」とあだへて、きぬをせちに引きあげむとするに、「神佛かゝる目見せ給はでとくうしなひ給ひてよ」と泣きこがる、さまのあまりにうたておれば、むつかりて立ちぬるまにこの扇を取りて見れば、唯一夜もたまへりしなりけり。うつりがのなつかしさはうちかはし給へりしにはひもかはらで、まなかななど書きませ給へるを見れば、「渡る舟人かぢをたえ」などかへすがへす書かれたるは、その折はわれと知りて書き給へるはあらじなれど、唯今わが見つけたるはことしもこそあれと、いかでか悲しと覺えざらむ。顔にわて、流るゝさまも皆おちぬべし。

「かぢを絶え命も絶ゆと知らせばや涙の海に沈む舟人。

添へてける扇の風をさるべにて返る浪にや身をたぐへまし戀など思ひ續けらるゝも物覺ゆるにやと我ながら心うし。今朝又御文ありつらむかし。いかにいひてか返しつらむ。又いかに待ち聞きて、思しつらむ。飛鳥川とありし折かゝらむものと思ひかけざりかし。海までは思ひや入りし飛鳥川ひるまをまでとたのめしものを。心えぬ夢とありしはいかなりけるにかと、聞きたに合せやみぬるいぶせさよ、たゞならぬことをいかで知らせ奉らじとなどて思ひけむ、ざりとも今少し哀とおぼし出でましと思へど、又うち返し思ふに

かなはで命長らへば、行く末に聞き合せ給ふやうもありて、さてこそわれと聞かれ奉らむも今少し心うかりなむかし。などてさしはなれたるあたりだにあらで、かくまたしくよろづ聞き合せぬべきゆかりにしもありけむ。遠き程まで行き着きて、この有様を見あつかはれぬさまにいかにしても死ぬるわざもがなと思へば、かく五六日にもなれど水をだに取り寄せず。めのと來つゝよろづにいへどいとかくうかりける心を知らで、年頃親の同じ心に頼み過しけるさへ心うく覺ゆれば、かしらもたげ見合せむつらう悲しくて聞きも入れず、唯引きかづきて臥したり。男もまばしはいかでか心ならぬことなればびなしとおぼさうらむ、さのみもあらじと思ふ程に、かくいとあさましうて命絶えぬべきさまなれば、かくまで思ふべき事かといとあやしく心づきなくさへ覺えてあやにく心もつきまざりてとかく引き動かしうらむれば、思ひ侘びて「おしはかり給ふるやうにいとかく思ふべき身の程ありさまならぬばびなしなどにはあらず。こゝちの例ならずのみもとより有りしがいとまざりて、きのふけふは長らふべき心もせぬなり。今はいかなりとも御心にこそあらめ。いとかく覺ゆる程を過ぐし給へ。人の近きもいと苦しう覺ゆるはいかなるべきにか」と泣くはひなどげにいと頼み少なげに消え入りぬべきさまなれば、「たゞならぬ人はこゝちなど常にあしうするとかやさやうにてかゝるにや、いとかく物などくはではかやうの事もあしかんなるものを」といとおそろしきわざかなとさすがにいとほしくていたくもあやにくたゞすくだる僧どもに祈せさせなど、よろづにもてあつかひつゝはひ寄りては、とぎまからさまにいひ恨むるを聞く

たびごとくに、いかにせまし、かくうきを知らぬ命ながさにてつひにいかならむと思ふにすべ
 き方なければ、この海にやおちいりなましと思ひなりぬ。京にはよもすがらおぼつかなく思
 ひわかし給ひて、又の日いつしか御文遣はしたるに、かどさして人のおともせねばあやしう
 て、なほたゞけばいみじげなるげすの出できたるにとへば、「知らず、よべこの殿にはやどり
 侍りしなり。つくしのぶんと髣髴といふ人のこのたちぬる月にこの殿を買ひ給ひてしなり。
 けふあすぞわたり給はむする。それやおはし所は知り給ふらむ。おのれはたゞ人なり。今
 宵のよとありしかばまうでこしなり」といへば「かくすめりな。今さてさてやまむやは」など
 おどしおきて、となりの人々にとへどたしかにいふ人もなければ、参りて「まかまかなむ」と
 申せば、いとあさましくあへなしともよのつねなり、いかにめめのとがまつることこそあ
 らめ、みづからの心には何とどのつらさにかはたちまちに行きかくれむとも思はむ、いみじ
 くともわが心とさやうにはあらじと見えし心ざまを、今までかくておきたりつるげぞかし、
 唯ありし法師の取りかへしつるならむ、いかばかりねたしと思ふらむと、知らぬには有らざ
 りつれど、もてさわがむもさすがにいかにぞや覺えて、かくなしつるもあまなるわが心の
 たいだいしさぞかし、あすは淵瀬にとありしも、かゝるけしき見てやいひたりけむなど思ひ
 つゞけらるゝに、いみじうち惜し、何とともたぐひありがたくめでたかりしにはあらで唯
 なつかしうあはれと覺えつれば、たちまちに見じとまでは思はざりつ。わがかく行くへなく
 なしつるよとおぼすに、胸ふたがりてつくづくと詠めくらし給ふ。まことしくやんごとなき

きはにこそあらざらめ。さる方の下草の露のかごとみなぐさめつべかりけるを、まことにお
 そろしげならむもの、なれよからむありさま、いかばかり思ひまどふらむと、ねたうもゆか
 しようもさまざまおぼしやるに、戀しく思ひ出でられ給ひて、よもすがらまどろまれ給はず。
 「まきたへの枕もうきて流れぬる君なき床の秋の寝ざめに」舞。何事よりもかの夢のおぼ
 つかなさ、いかなる事ぞと聞きあきらめやみぬるは、いといぶせくおぼつかなさなども
 世の常なり、いづれにてもはかばかしき人にはあらじを、誠にさる事もあらばなれがほにも
 てなさむこそ心苦しうかたじけなけれ、まして年月経て鏡の影もかはらぬさまにて、いひま
 らぬもの、中に生ひ出でたらむよ、いでやかゝればこそよからぬふるまひはすまじきもの
 なれ、少し人かすなるもの、かく跡はかなきやうやある、何しにかあながちに思ひかすま
 ふべき、さる事も有らじと強ひてあさきかたさまに思ひなせど、よろづよりもこのおぼつか
 なき方の事は胸ふたがりて、あづまのかたへなど聞きし、ことしきもあらばふせやにや生ひ
 いでむなど、なほ心にかゝりてわが御すぐせの程くち惜しうおぼさる。
 「その原と人もこそ聞けば、き木などかふせ屋に生ひ始めけむ」舞。常よりもこゝちよ
 げならぬ御ことぐさに目なれにたる中にも、この秋は蟲の音まげさあさぢが原にことなら
 ず、泣き暮し給ひても晝はおのづからまぎれ給ふ。心のつまとか言ひふるしたる夕暮のそら
 霧わたりて、ありか定めたる雲のたゞすまひさらやましう詠めやり給へり。西の山もとはげ
 に思ふ事なき人だにもの哀なりぬべきに、雁さへ雲の遙に鳴き渡りつゝ、涙の露もさかり過

きたるをぎの上に玉とおき渡しつゝ、なきよわりたる蟲の聲々さへ常よりも哀なるに、お前
近きすいがいのつらなる吳竹を吹きなびかしたるこがらしのおとさへ、身にまみりて心細く
聞ゆればすだれを少しまき上げ給へるに、木々の梢も色づき渡りてさと吹き入れたり。

「せく袖にもりて涙やそめつらむ梢色ます秋の夕暮。

夕暮の露吹き結ぶこがらしや身にまみりて秋の戀のつまなる「類などさまさま戀ひわび給ひ
て涙をおしのごひ給へる手つきの美しくさは、唯かばかりをさいはひにて、この世の思ひい
でにまつべしとぞ見えける。雨さへ少しふりていと霧深く見えたる空の景色は、誠にもの
見知らむ人に見せまほしげなり。「又これ涼風暮雨の天」と口ずさみ給へるなどを、かの常磐
の森に秋待たむといひし人に見せたらば、ましていかにはやき瀬に沈みいで供むとことわ
りなりかし。かの舟には目かすのつもるまゝに心ちも誠にあるかなきかになり行くを、かく
て死なば空しきからをこれかれ見あつかはむもいみじうくち惜しくねたうて、なほいかで
海に入らむと思ひてさるべきひまを見るに、さすがに人目まげくて日頃にのみなり行くに、
この大夫「類」よろづにうらみつゝ、衣の關を恨みわぶれど、同じさまをのみなごやかにいへばさ
すがになさけだつ心にて、いとよわけなるさまを心苦しう思ひつゝ、近くもえよりざりけり。
かゝる程に大貳の舟にやんごとなき人の、なべての女房には似ぬがまじりたるに、心がけて
語らひわりきけり。宵過ぐるまで見えぬ「類」程を嬉しと思ふ程に、かゝる事をめのといとやす
からずはらだゝしきにも、君のかく臥し入り給へればぞかし。例のやうにておはせましかば

かゝる事なからましと思ふにも、いと心うくつらう覺え給へば、「おのが身をとさまかう
さまにもせため給ふよ。かゝる人のものいたく思ふはいみ侍るなり。たひらかにて命あらば
忘れがたう思すらむ。人にもあひ見させ給ひてむ。いと心をさなくいふかひなき人の御心は
いかなる人かある」などいみじき事をいひ聞かすれど、この大夫が見えぬ折々の出できたる
を、わが思ふ事はなりぬべきなめりと思ふよりはかの事もなければ、いであな哀なるにまか
せては見で、あながちに身をもてなしてかくうきめを見するぞかし。身をなげたる跡にめ
のといかなるありさまにて長らへむとすらむと、さすがに哀にはかなく覺え給へば、いと
ねのみなき、いらへもま給はねば、うちむつかりて立ちぬるまに、かしらをもたげてつくづ
くと沖の方を見やれば、空はいさゝかなる浮雲もなくて月のさやかに澄み渡りたるに、海
のおもてはさし方行く末も見えず、遙々と見渡されたるに、よせかへる波ばかり見えて船の遙
にこがれ行くが、心細き聲して、「むしあけの瀬戸「瀬戸」へ今宵」と歌ふもいと哀に聞ゆ。

「流れても逢ふ瀬ありやと身をなげてむしあけの瀬戸に待ちこゝろみむ「瀬戸」とて袖を顔
におしあてゝとみにも動かれぬ程に、人や見つけむとまづ心なければ、泣く泣くひとへばか
まばかりをきて髪かいこしなどするに、ありし御扇の、枕がみにありけるが手にさはりたる
も心さわぎせられて、まづ取りて見れば涙にくもりてはかばかしうもみえず。すみばかりぞ
つやつやとして唯今書き給へるさまなるに、さしむかひたるおもかげさへふと思ひ出でら
るゝに、この世にて又見奉るまじきぞかし、唯今かくなりぬるとも知り給はでいづこにか

にしてかおはすらむ、ねや玄給ひぬらむ、さりともねぎめにはおほしいづらむかしなどより外は又なき心まどひなり。硯をせがいに取り出で、この御扇にも書かむとするに、目もさりふたがりて、手もわななきてとみにもかゝれず。

「早きせの底のもくつとなりなきと扇の風よ吹きも傳へよ」（鶯）えも書きはてず人のけはひすれば、とうおちいりなむとて海をのぞく。いみじう恐ろしとぞ。

狭衣卷第二之上

物おもひの花のみ咲きまさりて、汀がくれの冬草はいづれともなくあるにもあらぬ中にも、尾花のもとのおもひぐさは、なほよすがとおぼさるゝを、むげに霜にうづもればはてぬるはいと心ほそくおぼしわびて、

「たつるべき草の原さへ霜がれてたれにとはまし道まばの露」（鶯）あさましう行くへなく誰とだに知らでやみにしは、なほ思ふにも餘る心ちぞ玄給ふや。ありともことごとしうまことしきさまに思ふべき程にはあらざりしかど、他かぬわかれば何にもまさればにや、木草につけても忘れがたうのみおぼさる。かのくだりし式部の大輔は肥前の守のおとゝぞかし。三郎（三郎）はくら人にもいまだならず、さうしきにてぞある。あにの藏人になりていとまなくなりにしのは、御身に添ふかけにて忍びの御ありきには離れねば、飛鳥井にも唯ひとりのみぞ

御ともにも参りありさける。あに（三郎）にも玄かぞかこそなど忍び給ふ事なれば、何にかはいひ聞かせむ。又あれもそこそこなる人こそけさうすれ。筑紫へもゐて行かむするなどもいはざりけるなるべし。君のかくのみ歎き給ふ氣色を見て、さかしき道季は人知れずこの人を尋ねけり。物まうでをして神佛にも、「この人の行くへ聞きつけさせ給へ」と申しありさけり。大貳道よりまゐらせたる文に、「それがしがめの俄になくなりて侍れば、その事どもによりびせんになむとまりてさふらふもの、始めにかくいまいましき事を歎き思ふ給へる」など申したるを、「たれともなくて俄にいみじう忍びてゐて行くときしなゝり。哀なりける事かな」と大殿ものたまはするに、中納言殿（殿）ひとりれいの詠めぬ給へる所に道季参りて「あやしき事をこそ承りつれ。道成がめは海に身をなげてさふらふなりけり。めのと異なるもの、なくなく言ひつけて申しける事ども承れば、唯この行くへなくなり給ひにし人とこそ覺えさふらへ。今思ひ給へ合すれば、うづまさにて見し人をなむ尋ね出でたるなどこそ語りさふらひしは、もしさる事や侍りけむ。かくおはしまし通ふ所とはかけても知り侍らざりけるなめり。誠にそれならば」など申すを、「げにさもやありけむ。知りながらもさやうのものはさのみこそあれ」とて物しげにことずくなる御氣色を、いとほしく誠にしもなからむものゆゑいそぎ申しつらむ事いとほしかりける。御心のうちにはまことさもあらば中々行くへなく思ひつるよりも心うくもあるべきかな、一夜二夜にもあらず、さはいへど程へにしをさりともし知らず聞かぬやうはあらじを、うづまさにて見そめなどして、めのと、うちうち語りお

きて取りたるならむかし、さすがにあざれてさやうのわざもまつべきものぞかし、かの祈の師にこりかへされたと思ひしは中々よかりしものを、ねたく目ざましくもかへすがへすあるべきかな、いかでこの事とく聞き定めむと、今すこしおぼつかなきも目ざましきもまじりておぼしなげかるれど、この道季が前にてもこの事とかくも絶えてのたまはせざりけり。年返りて中納言、大納言にて大將かけ給ひつ。かくつかさくらむ年のかずそひ給ふまゝに、何事もさはことなる光を添へ給へば、世の人もあまりゆゝしう見奉りあつかへば、まいて母宮、大殿などは五月の夜の事などをおぼし忘るゝ世なく胸をつぶし給ひける。内には女二宮のさかりにとゝのはせ給へるを見奉らせ給ひて、中々見奉る人なからむもくちをしう見えさせ給ふ。母宮（中納言）の御方さまとても露ばかりたのもしき人もし給はず、故みやす所の御はらからにこそおはすれ。源氏の宮の御あたりをこそはまづはま給へるに、中宮（中納言）参らせ給ひてのちは、かくあたり苦しく時めき華やき給ふに、あるにもあらずおしけたれて心細げなるありさまを、さしらはしくせぐせしき御心にはあらねど、あまりうちとけむつび給はむもつゝましう思されて、狩場のをのになり行き給ふを、殿の御心いと心ひろう有りがたうものし給ひて、さるべき折々などはこまやかにあつかひ聞え給ひけり。みかどはなほかの宮（中納言）の御うしろ見に大將をのたまはせ契りてしかば、うちうちにももしさやうにやはのめかすとおぼしめせど、おとなきはものうき事やおぼしせめば、その後は御氣色もなけれど、殿に御對面のついでに、「かの笛のろくはすけなげなんめりと見れど、世もいとほかなくの

み覺ゆるに、たのもしき人なかんめるありさまの心苦しきを又たれにかはと覺ゆれば、唯知らず顔にてあづけてむとなむ思ひなりぬる」とのたまはするを、うちうちの御氣色ものうげなるを見給へば、いかなるべき事にかと心苦しうおぼされるれど、かくのたまはするはおもだしう嬉しくてかしてまゝり給ひて、「ものうくなどはいかでか思ふやうは侍らむ。喜びかしてまゝりてこそ侍れ。これに過ぎたるめんぼくさふらふべきやうなし。たゞとく仰せ言に従ふべきなり」と奏し給ひける。さらば卯月ばかりになどぞのたまはするを、かへすがへす喜びかしてまゝり申し給ひながら、かの御心のかひがひまげならぬをいかゞ思ひ給はむと、心苦しきまで覺え給ひけり。まかで給ひて大將にまかまかうへのたまはせつるを、さきさきもうけひかぬ氣色とは見えながら、いかでかさは奏せむとすると思ひつれば、さるべきさまに申しつるをいかゞはせむと、「せうせう心にいらぬ事なりともなみなみの人にもあらばこそは聞き入れでも過ぐさめ。いかにもかう召し寄せらるゝめいぼくの程もおろかならず。程もやうやう近くなりぬなり。聞かせ給ふ所など憚りてこそ今より申し給はめ。わたくしの御心のとかくあらむをせいしふべきにもあらず。まづいかにいかに思ひおきてつる年頃のはいなる、かく思しのためはする御心もかたじけなし。ひが心など聞せまゐらせ給はむいどかたはらいたかるべし。はやはやよき日して御文などこそものし給はめ。心に入らぬ事とても聞きすゞしてやむべきならず」などのたまふものから、すこしもいかにぞや思ひ給はむ事をば、みかどの御事なりともなま心やましくわが御心にもおぼされて、うち歎かれ給ひぬ

る御氣色の、例の人のおやげなく衰に見え給へば、それよりまさりておぼえ給はむ事をもえ
ぞいなび給ふまじきや。「何事にか物うく思ひ給はむ。唯かく心にまかせてならび給ひて苦
じき事どもやなど思ひ給へれば、今まばしはさらでもと思ひ給へるにこそ。さてかの大宮殿
膳の、あるまじき事にかはなれたのたまふと聞き侍るぞいとむつかしく覺え侍りぬへ。」
など申し給へば、そは高きも卑しきも女はさぞ心も口もたてたるやうなれど、うへの御心に
こそあらめ。大宮殿も中宮殿の御かたさまを、びんなきことにのたまへるにこそあらめ。さ
らではまじきばらにおはすれども、さしもあるまじき事とおぼすへきにもあらず。今始めて
ぞこの御世よりみかどの御むすめ奉りそめたるかは。有りがたくめでたき身のさいはひ
と思ふへきならず。身のくち惜しくなりにけるばかりこそめまじきものに人のたまは
むよ。何事につけても中々めやすき御行く末にこそあらめ。うへはかじこうおぼし置きつる
にこそぬめれ。さしならべたらむにかたはらいたげならむは、いとうち出でにくかりぬへき
は、この宮はさてもなとてかはと見ゆればこそたまはせけれとて、いとめでたく美くしと
おぼしたる氣色のあはれげなるを見給ふにも、おぼすさまにて見え奉らまはしけれと、我
も人^{御氣色}もさまじきまに定まりて、今はと思ひはなれて世にありなむやと、かへすがへす思ふ
にもわが心のうちはあるまじき事なれば、人の御心ありさま見定むる程はかやうにてうま
たるさまにて長らへむ程は、え忍び過ぐすまじう覺えは、身を捨てむさまにいとやすし。さ
ばかり心苦しからむ御有様を見奉りそめていかにいみじきはたしと覺えむ。母宮殿の、され

ばよと思ひなげき給はむ心のうち思ひつゞけらるゝに、なほなはいかさまにしてこの事お
ぼしとまるわざもがなと人知れず歎かれ給ふ。内にさぶらふ中納言の内侍は、大貳のめのと
のはらからぞかし。皇太后にもむつまじきゆかりにてをさなくよりさぶらへば、宮達の御有
様なども見奉りて物語のついでにも時々聞えさせしを、大將も耳とゞめ給ひしかど、かゝる
御氣色と見給ひて後は、中々わづらはしくなりて、同じ百しきの内ながらこき殿^{御氣色}にはこと
に参りなども送給はぬを、大貳のめのと懇くたりてのちは、「同じ心にこそ」など常に聞えさ
ずれば、つぼねのあたり立ち寄りなど去給ふ折もありけり。聞えさすへき事などたびたび
申せば、つぼねに立ちより給ひてあんないま給ふに、「宮殿ののぼらせ給へる御供に」といへ
ばはひなくも、そのわたりをたゞすみ給ふに、まやらの御ことの緒いたうゆるびけるを、ば
んまきでうにまらへて、わざとならず忍びやかにてたえたえに聞えたる御つまおと、なへて
のはは似すなつかしくをかしきは宮達のなるべしと過ぎがたくて、南の戸口のかたに寄り
て聞き給へば、つま戸細めにあきて火の光ほのかに見ゆ。寄りてやをら明ぐれどとがむる人
なし。火桶に火などおとしおきてよめるのわからさまに出でたる跡と見ゆ。やをら入り
て火をあふぎけちてまやうじ口まで寄り給へど、宮殿も上に昇り給ひて、夜もふけにければ
にや、人の音もせずまじめとしてこのねばかりぞ時々聞ゆる。もし見えぬべしやと猶も
あらでまやうじより通りて、あまた立て重ねられたる御几帳どもにつたひつゝ、かべまろの
中に入り立ちて見給へば、こなたは宮達の御方なるべし、帳の前に二所ふし給へり。ほのか

なる火の影に、いづれがいづれともとみにわかれ給はず、奥の方にことをまさぐりつゝ、かたはらふし給へる御ぐしのかゝり、なべてならず見え給ふなり。二の宮におはすらむと目とまら給ふ。前近く人二三人ばかり候ひて物いふをき、給ふに、わが御うへなりけり。「さても珍らかなりし世の事どもかな。音にき、し天わかみことかや見てしかな。うるはしくよがりしかたちかな。この世の人とも覺えざりき」などいへば、又或る人、「されど大將の笛もてなやみて、いかにせましと思ひやすらひ給へりしほかげの匂ひ、わいさやうに似たるものなかりき。中務の宮の姫君に語り聞えさせしかば、そのまゝに書い給へりしみの御かたちは、繪にもうるはしく清らなればにたりき。大將の御有様を筆およぶべくもあらずとて、はてはやり給ひにき」など語れば、この三の宮にやと見え給ふ少し起きあがりて、「その繪はなど見せぬ。心うかりけり」など怨み給ふ氣色をさなびて美しくしげに見え給ふ。繪は御覽せさせむとせしかど、ちらざとてかくし給ひしかばくち惜しくてこそ。「かの姫君中務こそ大將の御ぐにもまづつべけれ。心ばへもりやうりやうじくこそおはすれ」など口々に物語などすれど、今一所御物ものたまはずことを手まさぐりにして人々ものいひ笑ふを見給へり。口つき、まみなどより始め、ほのかなる火のかけなればにや、げにこれこそたぐひなき御かたちなめれとよそに聞き奉りつるよりはこよなく心といまりて、とみにも立ち出でられぬ程に、出でたりけるよるの僧参りて、つま戸あら、かにかけつるおとすれば、いとわりなくて出でずなりぬべきにやとなは見たち給へば、この宮の物語をたつる人この遂が門とありし歌もたり出で、

「姫君中務の御めのとこの小宰相といふが、まかまか聞えたりし」など語るにも誰ならむと思ひしを、さればよなど聞き給ふもをかし。少しおとなしかりつる人、「例のみだり心ちあしうなりにたるかな。今宵はよもおこらじとこそ思ひつれ。あやしきわざかな。夜ごとにはさへなりぬるにや、大宮のおはしまさぬ程にだにさぶらはで、宮どのいざとく御かたはらにさぶらはせ給へ」などいひおきておる、は御めのと中務なるべし。ものいひつる人も「いたく更けさふらひぬ。御帳に入らせ給ひぬ」と聞えさせれど、うたゝぬに皆臥し給ひぬ。ことひき給へるはやがて枕にて顔引きふし給へるようだいなど、心苦しげにらうたき御氣色なれば、見奉りおきていでむはくち惜しく覺えなりぬるも、さばかりみすのとをだにわづらはしき御あたりとおぼしつるには、たがひたる御ころのにくさなりかし。かうなむけちかき程にて見奉りつるとばかりは、かの御耳に聞え知らせざらむも、あまりうもれいたき心ちしてやをら入りて奥のおましにすこし引き入れ奉り給ふに、おぼしもあへず「こはたぞ」と言はれ給ふに、
 「死にかへりまつに命ぞ絶えぬべき中々何にたのめそめけむ」中務とのたまふけはひなべてならぬを、いみじき御心まどひの中にも聞きや知らせ給ふらむ。いと恥かしくいみじきに物も覺えさせ給はず、唯引きかづきてなき給ふけはひもいと近まざりて、そこらはぶき給ふ年頃の心の程よりは、かばかりにて立ちのかむともおぼされねば、かのよはの身のまろ衣もさりともおぼしかへさむやはいとたのもしきに、こけも心の亂れまざりつゝ、大宮中務の御氣色もつゝましく承れば、御文などをだに聞えさせねば、人づてならで聞え知らせむと

てなむ、「心のどかにおぼしめせ。御けしきとらでは、さりとともなめげなる心のおほけなさはよもつかひ侍らじ。よし御覽せよ」など聞え給ふ。げにうとましかるべきさまにもあらねど、かばかりも知らぬ人にけぢかく見えさせ給ふは、あさましく恥かしうおぼしめされて、唯ひとへの御ぞにまとはれ給へど、いたくほこるびてあえかにかしげなる御身なり。はたつきなどげにこれこそあるべき程なれど、限なき御有様もことわりは美しくしう覺え給ふにも、まづかのむるの八島の煙立ちあめし日の御かひなは、さまことに思ひ出でられ給うて、かばかりもいかにしつるぞ、もし氣色見る人もあらばいと、のがれ所なく召し寄せたらしむ時、いかなることにして命待つまの程はなほさやうなる事なくてこそあらめ、又かう心苦しき御有様に入知れぬ物思ひを添へ奉らむも、いと心苦しうあるまじき事と、かへすがへす思ひ取りながら、いとかばかりにてはのち行く末のたどりも、さすがに心づようおぼしたるまじうみだれたるやうにて、消え入りぬべうおぼしまどひたる御有様の心づるしきも、いかにかりにけむ。これやさはのがれがたき契の程ならむと思ふも、さまさまにおろかなるべき志とは覺えぬにしも、胸さわぎと思ふまは見え奉らむ事のなつかしう、さりとて今もひとかたにうへの御氣色にまたかふべきこと、ちもせずなど、いとみだれはせぬる心のうちなほく我ながらもどかしうくやしきにて、この御氣色さへいとみじきを、とかくなぐさめ奉りてわれも涙をながし添へ給ひつゝ、思ひやまなきやうにうへの聞かせ給はむにより、御ゆるしなからむほどはおぼるげならで見奉り、御文などだに有りがたくぞ侍るべき。中納言の

すけ（中納言）までぞ思ひあまる折々聞えさすべき。なほ「あが君おほつかなきさまにもてなさせ給ふなよ。さりとて今いく日もへだり侍らじなど思ひなぐさめてなむ」といみじき事どもを聞えさせ給へど、中納言にさへいひ知らせむ程の恥かしさ、心うさをおぼしいるに、いと唯今なくなりぬる身ともがなとおぼされて、やすき事は身も浮きぬばかりにながれたる御涙いと心づるしくわりなきに、左近のぢんの時申すも、あけぬなりと聞ゆれば、いとわづらはしさもなのめならず、かたがたに心のみ亂れて、いかなるべき身の有様にかとかへすがへす物なげかしさ、いとやる方なくて起きもわがられ給はず。さりとてかつら木の神のひとかたにあらはれぬべきこと、ちもせぬにや、

「岩橋をよるだにも渡らばや絶えまやおかひかつらぎの神（岩橋）。いとあまうちちたき御氣色は人もこそとがめ聞ゆれ」とよろづになぐさめ聞えさせ給ふ程に、よへの戸の鳴るは僧のいづるにやと聞ゆれば、やを立ちいづるもうしろめたく心づるしきに、なぞやかく思ひやりなくあやしき身なりけむ。横の戸の思ひかけやすかりしも、よへはうれしかりしに、物思ひそへてたちいづるは恨めしきまでおぼされておしたて給ふ。

「くやしきもあけてけるかな横の戸をやすらひにこそあるべかりけれ（横）とまでおぼされけり。そのすなはち母宮うへよりおりさせ給ひて、やがてこの御かたはらにうち臥させ給ひて、みからしどもまゐりなどしておきさせ給へるに、母宮の御跡の方にふところ紙のやうなる物の落ちたるを、あやしう何ぞと取りて御覽すれば、白きまきしなどいへど、なべて見ゆ

るさまにはあらぬが、すこしまほみてまみ深くうつりがなども世の常の人とは覺えぬを、たれかはこゝに落すべきとおぼしまはすに、御胸ふたがりて心騒ぎも世の常ならず。姫君の御とのごもりたるやうなるを見奉り給へば、夜もすがら泣きあかし給ひける御ぞの氣色、いとまほどけいにて引きかづかせ給ひける。御ぐしもいたう濡れたるを、さればよ人の入り來りけるにこそ、あな心うや、たれなりつらむ、かばかりの御身の程にかゝるためしあらむや、左大將のなべてならぬ有様を、うへの行く末の御うしろ見にとのたまはするだに、いでや宮達は何となくて過ぐし給へるこそよけれ、かるがるしき御有様に思ひよそへられ給はむ事、あるまじき事とこそ思ひつれ、こはいかなる事ならむ、さりともえるべする人ありつらむなどあさましくいみじけれど、人に問ひあないま給ふべきにしあらねば、唯心一つにおほしくだくさま、唯かた時の程だにいみじげなり。物にすこしきはたけきまですぐよかにけだかくおもりかなる御心にて、わが御宿世いとくち惜しうおぼしつゝけらるゝに、人目もえつゝみあへず涙こぼれてせきかねさせ給へるけはひを、宮^三御とのごもりたるやうなれど聞かせ給ふに、やがてきえ入るやうにぞおぼさるゝ。大將は中宮の御かたにて夜わかし給ひて、つとめて御前^二に參り給へれば、御視わけさせ給ひて文書かせ給ふなるべし、「よろしき紙やさふらふ。筆のおろし給はらむ」と申し給へば、みづしわけさせ給ひて、からの淺緑よの常ならぬを硯にぐして賜はすとて、「うへ^一の、今よりさばかりうしろめたかるべき御心とのたまはするやうあめるを」とてうち笑はせ給へるにはひも、かばかりなる事のかたきぞかしと見奉

り給ふ。ほゝるみて、「大方今より硯にも向ひさふらふまじきにや。わりなき仰せごとかな。ゆだのたゆたに」と口ずさびて見まゐらせ給へるまみの恥かしげさは、げにおほるげならぬ御すさびもことわりぞかしと見え給へり。御帳のそばに引きかくして書き給ふも、心ぐるしかりつる御氣色は、おもかげに立ちてかきほにおふるにもおとらねど、もし見る人あらむにと、つゝまじさのわりなくて書きもやらね給はねど、さりとしてこれさへおぼつかなくて苦しかりぬべければ、人やりならずなげくなげくよろづにあらぬさまに書きなして、

「うたゝねを中々夢と思はゞやさめてあはする人も有りやと」^二などやうにて引きかくしてやがてこ微殿におはしぬ。中納言のすけのつばねに立ちより給ひておとなひ給へば、「けさの御供にさぶらひて風の起り侍りにけるにや、みだりごゝち例ならで、え起きあがり侍らで」とてげにうちとけたる寝くたれ姿にて出できたり。「よべも尋ね聞えさせしかどもほいなくてこそは歸り侍りにしか。遠き人のかはりにはたのみ聞えたれど、そののちしもなかなかに見放ち給へれ」とのたまへば、「ひと日うへの御まへにのたまはする事の侍りしを告げまゐらせむとて御せうそく聞えさせて侍りしなり。かの御事はいと近うなりにて侍るを、などかくおぼしめし立ちげも見えさせたまはぬ。萬おもふさまに侍るべき事とこそ」と聞ゆれば、いざや、世の中にありはつまじき夢を見しかば物のみ心細くて、さやうの事も思ひ絶えて侍るに、なみなみならざらむ事は人の御ためいとほしかりぬべき事を思ふなり、あやしあやしながらも長らへて仕うまつり果てよとこそおぼしめすらめ。かすまむ空の名残ばかり

にては心苦しくやと、人知れぬ心のうちには思へど、とかく申す事もなきを、殿などはいかに心得させ給へるにか、「物憂がるなめりとしてさいなむこそわりなけれ」とて涙ぐみ給へるを、げにいかなればかくのみおぼしのためはすらむと心苦しうて、われも涙落ちぬ。「いぞやいみじき事といふとも唯わが御心にこそ侍らめ。さらば殿にもさやうに聞え給へかし。大宮はあだなる御心ありとていみじくうしろめたげに聞えさせ給ふ」と聞ゆれば、「あやしのおだ名や。さのまるどのを聞きたがへさせ給へるにや。この御こともいかにぞや。世の人の心ならば行く末までの人の御うへもたどらで、時のまにも見奉らむを嬉しくこそ思はめ。法師などだにかゝる心はかたきにや、若無比丘と佛のせちに戒め給へるよ。げにこそ思ひ合せらるれ」とてるみ給へる御顔の近くてはいとわかく美しくしげにて、あやしげなるわが顔にもうつりやすらむと覺ゆる御匂ひげにいかならむ。あやまちをだにま給ふべきに、かうおぼしつゝみ、行く末の短かゝらむ事をさへのためふも、げに世の人の聞ゆらむやうに、へんげのものにやとぞ覺え給ふ。「いとあまりなるひじり詞なのたまはせそ。さしも聞え侍らぬ事ども、侍るなり。宮中の御有様はしもほのかに見奉らせ給ひては、えさしも心清からずやとこそ思ひ給ふれ」とてわらへば、「せちにかくいひおとし給へば、心かはりこそ法侍らぬべけれ。げだうのむすめにも佛ははかられ給はざりけるものを」とてありつる文ふところより取り出で、とらせ給ふ。「あなかしこ、宮中などの御覽せむに、取り出で給ふなよ。ことごとしきさまにいひなすなる手も、見おとさせ給はむいと恥かしかりぬべし。かの御め一つにはには

といふ鳥の跡もむげに御覽せざらむは餘りおぼつかなりぬべければ」とのたまふを、「それは中々参らすともかひある事は侍らじかし。大宮の御まへなどに取り出で、侍らむも、びんなげにはよもとこそ思ひ給へらるれ。うへの御前などもあやしう今までおとなきは物うきにあなどこそ仰せらるなれば、少しちらして侍らむもなか」など聞ゆれば、「あなわびし。わが君わが君、さる事ま給ふな。唯ひと所に御覽せさせ給ひてやがてやり給へ」とまめやかにおび給ふもあまりあやしと思ふに、「誠にかく常にのたまふありさま少しげぢかくて見せ給へ。さてやげにこの世にとまる心もいできけると、今宵などもびんなかるまじくは」など例ならず心に入れてのたまふを、からうとてめやすき御心かなと嬉しけれど、「いであなうたて、まだしきに目ならし聞え給はむこそあぢきなう侍らめ。おほろげにてはさやうの御かいまみなど侍るべき御有様かは」と事のはかにいふもをこがましけれど、この人にもさやかなるけしきたちまちに見せて、かくあながちなる關守をやぶらむもわづらはしく覺え給へば、こまかにも語らばぬものから、美しくかりつる御けはひありさまは、おもかげに覺えぬにしもあらで、「あなわりなの事や。なほさうぬべきひまわらば」などのたまひても歎かしきものから、

「あふ坂をなは行き返りまどへとや關の戸さしもかたからなくに」と口ずさびて立ち給ひぬるを、あやしと心も得ぬは御返りも聞えあへずなりぬ。この御文を引きかくして御前に参りたれば宮は起させ給ひにけり。二の宮は御帳の内にていまだ御殿ごもりわたりける。

御帳のかたびら少しゆひあけて、大宮ゆかにおしかゝりておはしますを、御帳のはころびより見まゐらすれば、をとこのたゝら紙をうち返しうち返し御覽じて、御袖を顔におしあて、いみじうなかせ給ふ。あないみじ、いかなる事ぞと思ひつゞくるに、などこの御文のけさしも急ぎておぼし立ちつらむと思ふに、ありつる關の戸ざし今思ひ合するに、心一つにいとおぼつかなく、この御文いみじうゆかしけれどいかでかはあけむとする、げにこれをば大方に取り出で、はいとびんなかりけり、もしさる事もあらばわがまたるこそそれもおぼしめさめなど思ふに、いとわづらはしくなりて、とりも出でずなほかくしもちて、大宮もよろづにまぎらはさせ給ひて、「よへまではさる氣色もものせさせ給はざりしかば、うへにも昇りにしを、俄にいかなる御こゝちにかとなほ歎き給ひてまづわが方に渡らせ給ひぬる。いつもいつも何事にてかよるよる苦しうすらむ。よろしくは昇れ」などのたまひて、今ぞ御かたに渡らせ給ひぬる。中納言の佐近う参りて、「いかにおぼしめさるゝぞ」など聞えさすれど物ものたまはず、唯御枕のまたはあまも釣するばかりにぞ流れ出で、ふさせ給へる。唯さなりやと心得はてぬるに、むげに知る人なくてはいかでかさる事あらむ、又さるにてはこの御文を給ふべき事は、いかなりつる事にかとわれも胸ふたがりておぼつかなくあさましければ、とばかり物もいはれでつくづくと見奉るに、大宮の御心のうちぞいとほしき。この御かた人におぼしのたまふは、かならずおぼし疑ふらむかしとあぢきなく苦しけれど、とてもかくても今はいとゞのがれがたき御中にこそは。つひには聞かせ給ひてむと思ふぞたのもしかりけ

る。「この御文いかに引きこめてやむべきならねば、けさ大將殿のまゐらせよとてこれを心づかひにてもし給へればえこそいなび侍らざりつれ。又大宮などもこの外にはよも見なしなどは仰せられじと思ひ給ふれば」とてうちおくを、宮はあるかなきかの御こゝちにもこれをさへちらして、大宮の見給はむ事とおぼすに、いとゞ死にはつるこゝちせさせ給へば、引きかくしてよといはまほしけれど、残りなくいひ知らせつらむも恥かしくて、えさものためはず、いとゞせきやる方もなげなる御氣色なるを、ことわりかな、よき人と申す中にも心ぶかけなる御有様に、いちじるきえるしをさへおとしおき給ひて、大宮のいかなりつる事ぞとおぼしわはて給へる御氣色は、いかばかりかはおぼさるらむと心苦しき事限りなし。「この御文を大宮に御覽せさせたらばしも、誰ならむと行くへなくおぼしこがるゝ事はあらじかし。同じくばわはわはしからぬさまにてこそはなどおぼさむ事はくち惜しからめと思へど、あなかしこあなかしこのたまはせつる御氣色も、なほおぼすやうある事にこそあめれ。など一かたにしも寄る心なられば、わがわやまちのやうにいと歎かしくて。つくづくと見奉る。大將は出で給ひておきふしおほしつゞくるに、かけても思ひよらず。かごとばかりを聞くだにもむつかしうわづらはしかりつる御あたりには、いかに尋ねよりつる夢のうきはしどとうつゝの事とだにおぼされず。心ながらかうのがれがたかりけりとても、ひとへにさらばと世に従ひて定めむことは、なほいとくち惜しかりぬべし。ざりとて又萩のうへの露ばかりにてはいかでかはなどおぼしつゞくるに、人やりならず涙もこぼれて心苦しきに、いと

いもの思はしきぞ、信太の杜のぢえはものにもあらずなり給ひにけり。日ひと日なげき暮し給ふにも、わが心はかへすがへすもどかしう心づきなきものから、いとみせかゝりつる御はしきは、いかゞ人も見奉りつらむと、おぼつかなきもゆかしきもやる方なれば、中納言のすけのものと文かき給ふ、「今朝のものはいかゞなき給へる。けふは誠に一の心にかけて暮し侍らつれば、なごてかはその光もかたうはなごたのもしきをいかにやるし見せ給はずば、かひなくこそ侍るべけれ」とのたまへるを、つれなの御心がまへやと思ふもにぐくはあらでうちをまればり。御返りには、「今朝のはまゐらせ侍りければ、いさや心え侍らぬ事どもは思ひみだれてなむ。うしろめなき御心の程こそけだいなからむ御行ひまゐるじもかひなくやと見え侍れ。なごて。」

戀の通知らすといひし人やはあふさかまでも尋ね入りけむ。とあるを、獨るみせられ給ふものから、「いと罪えがましき事のさまかな」とひとりとち返して「たうらいせゝの天はうらんのえん」とうちすんじ給ふ御聲のいとおもしろう、いかなる事のありけるはかと思ふもあつらはしくて、なほなごていひやり給はぬものから、日の暮るもまゝに、心は空にて雲のばたてに物思はしきまめやかにはわりなれば、いかにせまじ、一かたに思ひそめにし事は月日に添へていと有りがたげになりゆくめれど、さりとはいかにせむと思ひなるべきことちもせず、この御事はよろづにめやすかるべき事と月頃思はざりつるにはあらぬと、今はいとくかはかりにてやみなばかたじけなきかたも心苦しきも、なごてなるさまに

思ひ過してやみぬべきことちもせねど、さりとも今ゆくりなく定まり給はぬ事のくち惜しうおぼざるは、かへすがへすわが心つきなかるべき心のすさみ、いと物こりしはて給ふべし。さてもかのあさかの沼の水絶えなむ事を忍びあへざりし哀は更に忘れ給はず。思ひよそへむ事あらぬ人の御有様などにつけてもすこしくだれるきはなど、おのづから見つゝし給ふ度ごとははまづおぼしむでられぬ折なし。道季が思ひよりし事ののちは、底の藻屑まです尋ねまほしき御心絶えざるべし。

「思ひやる心ぞいと迷ひぬる海山とだに知らぬ別れに」。思ひいつるは中々よなう聞かましかりける道玄ばの露の名残なめりかし。逢坂山のさねかづらば、人知れぬ御心ばかりにはおぼし絶えず、おろしやうにひたすらいかさまにして、のがるゝわざもかなとはおぼされず、いかにせまじとなげかれ給ふに、中納言のすけかのおとしおき給ひしふところ紙の事を聞えいでたるに、胸つぶれ給ひて心おくれといはせしかりける事かな、さばかりけしきとり給ひてはのがれ難き事にやなど、なほわづらはしく思ふまゝにもえせめ給はず、唯わろしやうにてわりなきひまなどに見る夢のたゞちにまどひ給ふ折々、ほのかなるたびごとには、いと心ぐるしうおぼしむたたるさまなど、唯世のつねの人にてだにおろかに思ふべきことちもま給はず。まいて何事にてかは、すこしもなめには思ひ聞ゆべきぞとおぼしなから、御文などもおのづからおちちらむ事つゝ、ましくておぼろげならではまゐらせ給はず、ねをだにたかくなかぬなげき、夜もまどる事もなくこの頃はおぼしあかし給ひて、

「人まらばけちもまづべき思ひさへ」と枕ともせむるころかな。無と人やりならぬなげきを添へ給ひける。女宮もありしのちおきわがりて母宮にもあきらかに見わはせ奉り給はず、ものをのみおぼしくづはれて、臥しまづみ給へるを、大宮もことわりにいみじくおぼしなから、思はずにくちをしかりける御すぐせも心憂くなどおぼされて、いたうも慰め給はず見入れぬさまにて過ぐさせ給ふを、さぶらふ人々などもあやしと見奉るに、うへの御前ぞいかなればかくのみはとあやしがらせ給ひける。御いそぎもいと近くなりぬるを、おぼしいそがぬ事など、大宮をもいとものしげに聞えさせ給ふも御むねさわさまさりて、あないみじや、さばかり恥かしげなる人に心おかれ給ふやうにやとおぼすに、いかさまにしてこのことのがるゝわざもがな、たれとだに知らばや、かゝりともいかにせむとて世のつねのなま上達部、殿上人などを思ひゆるすべきにはあらずかし、いでやかばかりの人のかく行くへなくあさましきすぐせあるやうやある、あな心うとおぼすに涙ぞほろほるとこぼれ給ふを、かく例ならぬ御ありさまをおぼし歎きたるとうへは御覽じて、かく月ごろになるまで見入れ奉らざりける事などおぼし騒ぎたり。この事の後はおのづから氣色見ゆる事もやと、目をつけさせ給へれど、かごとばかりもそのまゝと見ゆるはうぐのはしだにおち散らぬは、なほいかなりし事ぞとおぼつかなくゆかしきに、三月ばかりよりはまことしく苦しげに去給ひて、日にそへたのもしげなきさまにならせ給へば、よろづも忘れていかなるべき御ありさまにかとおぼしなげくに、みかどまいていみじき御思ひにおはしませば、唯この御方にのみおは

しまし暮しておぼしめし歎かせ給ふ事限なしと聞き給へば、いとゞかの人まれぬ御心の中はいふかたなけれど、いづれのひまかは御せうそくをだに聞え給はむ。やうやうあつき程にさへなるまゝに、消え入りぬべき御ありさまをたれもたれも歎かせ給ふこと限なし。常よりもあつき晝つ方御帳のかたびら少しゆひあけて、ゆかの上にて日のおましばかりをまきて、くれなゐのうすものゝひとへ、すゞしの御はかまばかりを奉りて、かひなを枕にてね入らせ給へるに、御ぐしの久しくけづりなどもせさせ給はねど、露ばかりまよふすぢなくつやつやとしてうちやられたるに、こぼれかゝらせ給へるいろあひ、つらつきなどのかく久しき御なやみに、露ばかりもおとろへすいといなまめかしく見えさせ給ふ。大宮もつくづくと見奉らせ給ふに、かひなたゆきも知らせ給はぬにこそと、心苦しう悲しくて涙のほろほるとこぼれさせ給ふ。うちみじろぎていと苦しと思されたるを近う寄りてうちあふがせ給ふに、ひとへの御ぞの胸少しあきたるより、御ちの例ならず黒う見ゆるに、心騒ぎしながら目とゞめさせ給へば、かくれなき御ひとへにていとまゝとまゝかりけり。いかなる事ならむとなほおぼつかないつるを、こはいかなる事ぞと目もくれまどひて物もおぼされず、誠に憂かりける御ありさまかな、いかさまにまない奉るべきぞとおぼしくだくること限なし。月頃はめのとたちにもかゝる事のあるはいかなる事ぞなどのたまはず、御心一つにおぼし歎きつるを、かゝる事ありけるを、今はわれひとりしてはもてかくすべきにもあらざりけり。又この人々の中に知りたるもあらむ。さりとともかくおはするまでその氣色知る人なきやうはあらじなどおぼし

なりて、いづも、やまとなどいふ御めのと違を忍びたる方に召しよせて、とみにもえのたまひ出でずむせかへらせ給へるを、いかなる事ぞと皆思ひさわぐ。からうじて、「かゝる事のおはしけるを、誰も知らぬやうはあらじ。などか今まで知らせざりける。いかなりし事ぞなどだに知りてしがな」とのたまはせやらぬを、うちきく心ちいかはありけむ、ある限あきれまどひてものもえ申さずかしらを集へて泣くより外の事なし。「月ごろもあやしう心得ぬ御ありさまを御もの、けにやなど見奉り、なくより外に又いかにもいかに見奉り知る事も候はず、れいせさせ給ふ事も、常にさのみおはしませば、あやしと見驚くべきにも侍らでこそ。とりとも事のありさまは老る人侍らむかし。昔物語にも心をさなき侍ひ人につけてこそかゝる事も侍りけれ。うちかはり誰も見奉らぬ折も侍らぬを、なほいつのひまにかさる事のおはしませむ。御ひが目にやさふらふらむ」といへば、「いでやなにか。誰もむげに知らぬやうはあらじ。とてもかくても同じうさとはいひながらその人とだに知らぬよ。かばかりの御身の程にかゝる事のためひあらじかし。さぶらふ人々の程にてだにいとかうあはあはしくとびかふ蟲鳥のやうに、ゆきすりのすぐせある人やはありけむ。唯さばかりの夢にてだにあらでこはいかにすべき忘れがたみぞ」とおしあてさせ給へる袖のまづく、ことわりにいみじとも世の常なり。「今はいかであうへの見つけさせ給はぬさまにいたし奉りてむ。神わざなどもまげう侍るめるといとおそろしく侍る」と聞ゆれば、さてもつひにはいかすべからむと、世のためしになり給ひぬへき御ありさまを見奉りはてぬさまに、わが身いかで世になく

なりなむと、かた時の程に思ひくだけさせ給へるさま、げにたれもたれもはかばかしき事あらじかしと見え給へり。かく言ひさゝめく程に筵道まぬれなどいふは、渡らせ給ふべしと聞き給ふに今少しこももまどふに、渡らせ給ひて見聞えさせ給へば、いとかういみじき事まではおぼしよらぬにや、いと心苦しげにてあつさをもてあつかひ給へる氣色なるも、いとうしろめたければ、少しあつき御ひとへなどに引きかへて、「又いとあさましき御事もありけるをおぼしもよらぬにや、心してうへにも見え奉り給へ」と聞え給ふに、宮又いかなる事ぞとやがてきえはつるこゝちして、たけき事とは引きかづきて泣き給へるに、うへ渡らせ給ひて「今の程はいかにぞ。あつさはあやにくなる年かな。いとゝいかに苦しくおぼさるらむ」とて寄せ給へるに、かくいみじげなる御氣色なるに、母宮もいみじう泣き給へるさまなれば、いと、おどろかせ給ひて、けさの程に苦しげこそまさらせ給ひにけれ。などかくとものためはざりつらむ、祈りなども思ひよらぬ事なくすれども、老るしもなくてかくまさるさまにのみなり給ふは、いかなるべき御事にかといみじくおぼし歎きて、をかしかりつる御々しなどを人に見せまほしかりつるものを、いとくちをしう落ち給ひなむ事とて、かさいでうちやらせ給へるに、まよふすぢなくて袷のすそばかりにやと見ゆる。すそのをかしさなどげにたぐひなしなどはこれをいふべきにやと見えさせ給へり。長さなどはこれこそなべての事なれ。すぢのをかしさつやさがりばなどはたぐひあらじかしとて、いとめでたう悲しと見奉らせ給へるを御覽するにも、大宮は心さわぎのみせさせ給ひて、哀れかばかりおぼし

たる御心にもいつかゝる事を聞かせ給ひて、おぼしうとまれ給はむとすらむと、唯よろしき人のうへにてだにかばかりうき事やはあるべきとおぼさるゝに、涙もつゝみあへずこぼれさせ給へば、例の袖をおしあて、物のたまはぬを、唯この御こゝちの事とのみ心えさせ給へれば、「さりともなんでふ事かおはせむ。こゝらの祈りのまゝるしものし給はざらむやは」とて我もうちなかせ給ひぬ。かうのみ日に添へてたのもしげなくなり給へるを、心やすき所にて御祈りなどもせばやと思ひ給へるが、かばかりまでものし給へるを、もどかしなど思ふ人も侍らむかし」と聞え給へば、「いざやかくてだに夜のまのおぼつかなさや、まいて見奉らざらむがいといふせきに、たのもしき人さへなく心細かりぬべき事」などのたまはすれど、「げにさりとてもかうたのもしげなうなり行く御ありさまをさのみやは」など聞えさせ給へば、さるべき宮づかさなど召して、御いのりの事などこまかにおきてさせて、出でさせ給ふべきにもなりぬ。かへすがへすもおぼつかなかるべき事をおぼしめしのたまはせて、殿にも聞えさせ給ひければ、さりぬ折だにはかなき事の折々、まづとぶらひ申し給へば、いと心苦しき御事と驚き給ひて、さまざまの御祈り始めさせ萬にぞあつかひ聞え給ひける。かくいとおもくなりていさせ給ひぬるを、大將殿聞き給ふに人知れずおぼし歎く事おろかならず。内侍のすけ艦にも常にあひ給ひつゝさるべきひまあらばすこしけ近くて見奉らむと、なほざりの氣色にはあらずせめ渡り給へば、「今はあるにもあらぬさまにならせ給へれば、よる晝大宮（殿）添ひおはしますすにはいかでかは。さらばおぼつかなき事をさへおぼいためるに、さや

うにはのめかさせ給へかし」と聞えさするを、さすがにあきらかにもあらずいひなしつゝ、思ひ歎き給へる氣色はおろかならぬを、いと忍びがたきに涙はせきもあへずこぼれながら、ことにいでゝいみじや悲しやとも泣きこがれ給はずながら、いと心深げに思ひみだれたる氣色など、おろかにはあらぬ御心にこそはと見るも心えねば、この御心ちも物思ひにかくまでもならせ給ひぬるにこそ侍るめれ。唯人知れぬ御事にてだにさばかり心深き御心ばへにおろかにおぼさるべきにもあらぬを、まいて大宮のおぼし歎くめる御心を御覽するに、いかでかはおろかにおぼしめされむ。「いでや、いとけしからぬ御心づかひぞと思ひ侍ればいと心憂くぞ侍るや。唯御文などをやちらしてましと思ひ給ふるを」といへば、「我さへかくのたまふこそ心憂けれ。誰がうへをも知らぬやうにひとへになにくみ給うそ。いとわりなし」とてありのまゝには知らせじとおぼすなるべし。あが君なほこの文ちらさむ事な好み給うそとよ、何事を知らせ奉るべきぞ、あやしかりけむゑるしをおぼしうたがふにこそあらめ、そがいとはしきぞ、なほざりのかいまみはあながちにびんなかるべしとも思はで、近き程に参りよりたりしにおちけむよ、たれがならむとおぼつかなくおぼすらむよりも、かくと聞かせ給はゞ今少し心つきなしとこそおぼしめさめ、行く末のたのみあぢきなき事にや、さらすとも岩にも松は生ふなるものをとて、なほ我とは知られ奉らじとおぼしたれば、いかにあやしく心得ぬ御心かなと覺えけり。宮は久しく御覽せざりつる故郷に立ちいでさせ給へるに、いと荒れまざりて、ものふりにける山の景色もものおそろしげにて、池の水もみ草ゐて昔の

かげもとまらぬに、かはづの聲ばかりたのもしきまゐるべにて、こととひまゐる人もなきまゝに、おきふしつとくとおぼし歎く事限りなし。月日の過ぐるまゝにはいかさまにして憂き名をもてかくして、明暮さぶらふ人々にも、このけしきを見せ知らせぬわざも、あはれがなとおぼすに、わが御こゝちもいとなやましくなりて、橋などをだに見入れさせ給はず、唯おなじさまにて臥しませ給へるを、姫宮も見奉らせ給ふに、憂き身一つのゆゑにかくさへならせ給ひぬるとおぼすに、いかでかは世のつねの心ちせさせ給はむ、けふあすにても先さき立ち聞えて、恥かしくいみじからむありさまを見え奉らぬわざもがなとおぼせば、いとまづみ入らせ給ひて、げにいとたのもしげなき御ありさまどもなれば、さぶらふ人々も一所の御事をだに思ひなげくに、又かくさへおはします事となげかしきものから、いづものめのとなど心かしこき人にて、姫宮の御ため聞きにくき事世にもりいでむよりはなど言ひ合せて、「大宮の今はとおぼし絶えてとがめさせ給はざりけるなむ出でさせ給ひて、いちじるき御ありさまに見なし参らせつる」など内にも奏してければ、げに思ひかけずもありける御事かたとばかりぞきかせ給ひける。なべての人のある事もとまりて程へさせ給ひにければ、「何事にかおぼしむとがめむ。老い子は人の大事なる事」と聞かせ給へば、「さてげに苦しうせさせ給ふ」とぞ聞かせ給ひける。世の中の人もあやしうありありて、中々めづらしき御事かたとぞ聞き驚きける。今年を四十五六になり給へば、などはさしも老給はざらむ、まいて御みめなどは三十ばかりにていと清げにぞおはしましたしける。われ先さきにといつれも同じさ

まにてたのもしげなき御ありさまなれば、明暮見奉る人々だに何事かは思はむ。内などにかくと聞かせ給ひてけるを、同じくばげにいかでいちじるからぬさまにもてなして、この御うき名をかくすわざもがなと大宮はおぼし念するけにや、唯同じさまにて夏秋も過ぎつゝ、冬のはじめにもなりぬれば、たしかなる事は知らねど、ありしふところ紙の程をおぼしめし出で、めのとたちにもさやうに言ひ知らせ給ひければ、ものとい何やかやと心知るとちはやすき空なく、むね、心をつぶしつゝ、うとき人々をばいつれの御まへにも近うは参らせず、唯「この事たすけ給へ」と佛神を念じ奉る。姫宮は大方の御こゝちなどは中々この程となりてはいと苦しくも覺えさせ給はねど、御身のありしにもあらず所せくなり行くまゝに、恥かしういみじからむ程のありさまをつひにいかにもてなさむとおぼすに、いといみじきに、人々のやすげなく、とやかくやといひかまふるありさまどもの、心づくしに思ひあつかふもいついかなる事を取り出で、あぢきなき心がまへのあさましさなどをさへ世のこと草にいひ傳へ、うへ聞かせ給はむなど人知れずおぼさるゝに、唯かくながら今のまに消え入りなばやとおぼし入るけにや、つねよりもいとなやましく暮れゆくを、ひつじの歩みのこゝちしてさすがにも心ほそくおぼさるゝを、木のまたはらふ風のおとといと身にしむやうなるに、かしらもたげて見出し給へれば、色々に散りまがひて梢あらはになりけり。

「吹きはらふよもの木がらし心あらばうき名をかくすくまもあらせよ」とていとよわげになき入り給へるを、大宮は少しぬえらせ給へれど、心とけてまどろむともなければ聞か

せ給ふに、我もいと消え入る心ちしてあはれいかなる人、いとかばかりものを思はせ奉りて知らずがほにて過ぐすらむ、昔の世になにの契にてかゝる事の有りそめけむ、いとかく思へば夢にも見ゆらむかし、かゝる御事をも知らぬにや身はいたづらになるとも、いかなるものゝふなりとも少し哀とだにとひ聞えは、さりとも忍びあへぬ氣色もりいでぬやうわらじやはとて、あさましくつらくおぼさるゝ折しも、さきの聲いとおどろおどろしくて参り給ふ人あり。かゝる御ことちの程とてもさるべき大夫宮づかさなどよりほかに、殊に参りとぶらふ人もなく、心ぼそきにさぶらふ人も立ちさわぎて、みずるじんのこわづかひも御門のあたりことごとしきを、人々はし近くて、「誰ならむ、めづらしくもあるかな」などいひて見るに、ひんがしのたいにつゞきたるわたどのより歩みいで給へるを見れば左大將殿におはしけり。宮のさぶらひして「中納言の内侍やさぶらひ給ふ」と尋ね給へるを、大宮さかせ給ひていと心ぼそくかすかなる御里の程にも、大殿の御心の哀にまめやかなるを、おろかならずおぼしえらるれば、近きみすの前にまゝとねさし出で、「こなたに」と聞えさせ給へり。参りて給ふありさま、うちふるまひ給ふ用意などより始め、例のわなめでたとのみ見えさせ給ふに、うち句ひたる御かをりもあやしきまで人には似ずを見え給ふ。いろいろの紅葉がさねのうへにくれなるのうちたるが、色もつやもなべてならずこぼるばかりなるに、りんだうの織物の御指貫の枝ざし花のにはひ、唯今おりて見るやうに織りうかされたる、目もかゝやくばかり見ゆるは、かつは着なし給へる人がらなるべし。立田姫の人わきなどまたるにはあら

じと見ゆるもてなしけはひは、飽くまでけだかう恥かしげになまめかしくて、御顔はこまかに美しくしげにらうらうとくわいぎやうづき給へるにはひは、誠にはなばなとあたりまで句ひみち給へるなど、所かへて見奉るは又光ことにめでたく見え給ふに、かばかり思ふ事まげき宮の内の人名残なくうちゑまされける。中納言のすけめして、御心ちどものありさまなどこまかに聞ゆれば、おとゝは常に参るべきやうにのたまはすれど、いかなるにか心ち例ならず思ひ給へられて、心ざしの程よりもをこたり侍りけるを、内にて承りつればたのもしげなきさまになむとていみじうおぼしめしなげかせ給へるに、おどろきながらなむ、「大宮の御心ちはことわりなる御事におはしますなれば、なぐさめ所も侍るを、姫宮の御心ちこそ聞えさせやる方なく侍れ。上もいみじうなげき聞えさせ給ふめる」などのたまへば、「わたくしにのみはいかでかは」とて参りて大宮にけいすれば、いと苦しうものもいはれ給はねどかく参り給へるもおろかならず思しめされて、先さきにはいそがれ侍れどいかなるにか、かくのみ露にあらそふさまにて、今まで長らへ侍るにも有りがたき御心ばへを、知らず顔にて過ぎ侍りぬべきをなむ思ひ残し侍りぬるには、もしとまる草葉も侍らば、よすがとは必尋ねさせ給へと聞えさせまほしかりつるに、嬉しく立ちよらせ給へるなども、はかばかしくつやけやらせ給はぬを、承る心ちもいと堪へがたきに、傳へ聞き給ふは袖にもあまひ給ひぬべし。かたみに苦しき御心ちどもにげにいかにも思さるらむ。さばかり心苦しうわえかなりし御ありさまに、心ちの日頃わづらひ給ひてうちふし給へらむありさまなど思ひやらるゝに、

やがてこのみすの内にもはひ入りぬべくゆかしう哀に覺え給へば、心にもあらず「小野の玄の原」と口ずさびて涙をみ給へるけしき、いひおぼすなつかしう哀なるを、げに大空も思ふ心を見知るにや、俄に曇りて去ぐるに、こがらしのあらわらしく吹きまよふにつけても、色々の紅葉散りかゝりつゝ、いたく濡れ給へば、みだれたる扇のかくれなきをさしかくして、「人知れずおさふる袖もまぼるまで時雨とともはふる涙かな」涙さゝやくべうもなくひとりぢぢ給ふを、中納言の佐の耳くせに、

「心からいつも時雨のふる山に濡るゝは人のさもところ見れ」露といふを、いつものめのと少し近く居て聞くに耳とまじりけり。語らばまほしき事とも數知らぬども、人どほなるけはひなれば、ことすくなにてなくなく立ち給ひぬるを、あかすのみ思ひきこゆるに、名残のにはひはなほくゆりみちたる心ちするを、若き人々はせちにぞ聞ゆるを、さし歩み給へる腰つき、指貫の裾などをたをとなまめかしきに、風に吹き赤められ給へるつらつきを紅葉の錦にもや、立ちまじりたるにほひにて、かうぶりの文いの、風に去たがひて吹きかけられ給へるなど、あまり人の心を見だるつまとなり給へるもいまいましうやと見え給ひけり。日の暮るゝまゝに大宮もいと苦しうせさせ給ひておぼされければこれや限ならむ。つひにこの事をもてかくさでやみぬる事、限あらむ命の程もくち惜しう、消えかへりつゝ、あるかなきかの御ありさまにて夜中にもなりぬ。姫宮はかた時の程もさきだち聞えずやなりなむと、なきこがれさせ給ふさま、誠に限なめりと見え給へば、見奉る人々のこゝちゆゝしういみじ。内よ

り御使参りちがひ、大殿よりもたち歸りあはれに聞えさせ給ふ。さわがしきまぎれに姫宮まづ消え入らせ給ふにやと見ゆるに、御めのとたちなきまどひてかゝへ奉りたるに、ちどのうちなき給へるは、今少し心まどひして、うとき人々はよらすたゞ大宮のせさせ給へると知らせたり。後の御事などこゝらたてかさねつる大願のまゐるしにや、いととうなりはてぬれば、こゝち少しまづめてあるにもあらで臥させ給へる。大宮をこもちのやうによろづにまふせ奉りて姫宮をば苦しうせさせ給ふとて、いと奥深くおはしまさせて、御めのとたちはかりぞ参りよりける。ちどの御ありさま更にもいはず、世にめぐらしきさまなる男にてぞおはしける。内の御使などかへり参りてかくと奏すればたひらかにせさせ給ひてけるを、嬉しく聞かせ給ひて、御はかしなど例のさはふども有りけり。のちは知らず唯今は先月頃思ひくづはれつる胸どもあきて嬉しくいみじきは、大宮もこよなく力出できたるこゝちせさせ給へば、めづらしき人まづ見奉らせ給ふに、唯大將の御同し顔にて誠に美しくしき御さまなるを、こはいづくなりし人ぞ、あなあさましと思さるゝに涙のはろほるとこばれかゝり給ふも、かばかりうくゆゝしく月比思はせ給へる人とも思されず、いまいましくせちに笑ひかゝらせ給ふにも、かゝる人のありさまを見ず知らず顔にて過ぐすらむ人よとつらう心うく思されけり。「雲のまでおひのぼらなむたねまきし人もたづねぬ嶺の若松」歌とのたまはする氣色もいと哀れげなり。いつものめのと、かのありし日の御口ずさみを語り聞えさせて、「この御顔のたがふ所なきにいとこゝち思ひ給へあはすれ」とけいすれば、中納言の佐がまわぎにや、さ

らば、こと人よりも目やすかりぬべきものを、つれなき氣色ならむは頼むべき程にはあらぬにこそはあらめ、うへの御けしきなどをものごとくにうけひかぬにやなど聞きつるは、かうにこそはありけれど、この御事をも知りたらむを、かゝる心がまへなどをいかに聞くらむとおぼすに、心いと恥かしくおぼしながら、行く末に宮たちにておはせむも、むげにことの外にならざりけりとおぼしつゝくるに、月頃は嬉しと思ひつる御あたりとも覺えず、たがふ所なきかはつきにつらく心憂くぞおぼしなりぬる。中納言の佐のあやしわやしと月頃目とまる事、耳に立つ事多かりつれど、わが心のくせにやと思ひけちつるを、この嶺の若松の御ひとりごとをほのき、けるに、いとゞさればよさればよと思ひ合せて、哀なりける御宿世を、いかなる事におぼし定めてかく忍び過ぐさせ給ふらむ、かばかり美しくしき人の御ありさまを、大やけものになし奉り給はむするよ、大殿のいひまらぬまづのをもとにも、この御子と名のらむは、いかばかりうれしからむと明けくれのたまはすなるものを、まいていかにおぼしよろこばまし、大殿もかくと知り給ひなましかは、さりとともえ忍びあへ給はざらましものを、くちをしき事なりやとかへすがへす歎かれけり。御湯よりのぼりて臥し給へる御顔、唯かの御この程と覺え給へるを見るにも、大貳のめのとにこれを見せたらば、言ひ知らず悲しがりうつくしみ奉らむと見るに、我だにいみじうらうたく覺え給ひて、いかでとく見せ奉らむと思ひあまりて、いづものめのとにぞ「そらめか」とよ。唯その御顔とこそ見えさせ給へれ」といふを、「いでや知らぬやうはあらじとつらければ、さしも見えさせ給はず。よき人どちはよし

なきだに似るものなれば、まいて同じ御ゆかりなればにこそは。されどこれは今よりさまことにおうげぞつかせ給へる御氣色にぞ」といふもをかしかりけり。

狭衣卷第二之下

七日もすぎぬれば姫宮は心より外にいさとまりぬるを、くち惜しう耻かしくおぼせど、げに限あるわざにや、やうやうさわやかになりて今はかうにこそはと、流れての名のうしろめたさをのみおぼすに、大宮のこの御うぶやの程は、こよなうよろしきさまにならせ給へりつれば、日頃よろづに思ひぐしたりつる人々もうちやすみて心ゆるびまたる夕暮の程に、たゞはかなうきえいらせ給ひぬるを、げに見奉らむとおぼし念じけるにこそはと、悲しういみじきに、姫宮はさらにおくれ奉らじとおぼしまどへる。げに心になはぬ事なりければ内にもきかせ給ひて、「人よりさきに参り給ひてあまたの宮達おはしませば、むつまじうやんどなき方には思ひ聞えさせ給へるを、何ばかりの程の御よはひにもあらで、かく別れさせ給ひぬるを、いかでかはよろしくもおぼしめされむ。姫宮さへとまらせ給ふべうもおはしまさるるを、いと心苦しうひとり御事をのみやおぼしめさるべき。今いくばくも侍るまじきを、今一ど見むともおぼさぬにや。をさなき人々のとまりて侍らむもなほもろともにご御覽じあつかはめ」とかへすがへす恨み聞えさせ給ひて、「なぐさめ申せ」とてさるべき人々な

ど奉らせ給へれど、われゆゑつひにかくなり給ひぬるに、かた時にも長らへてひとりまどひ給ふらむ道の行くへも知らざらむは、いみじう悲しかるべきをおぼしこがるれど、げに憂きに堪へたる御身にや、煙の雲となり給ふにもつひに立ち後れ給ひて、七日七日のはて方にもやらやうなりぬ。御とぶらひに大將の参り給へるに中納言のすけ對面して、かの嶺の若松とありしひとりごとを語り出でたるに、御かほいみじう赤くなゆを、あさましういみじとおぼしたり。「など今まで心憂くつけ給はざりつらむ、おのづから何事はつけても氣色は見給へらむものを、かくなむときかましかばいとかくよその物にはなし奉らざらましといとおはれげにくちをしとおぼしたれば、いでやいとけしからず心憂き御心から、たが御ためもいとほしう侍るにこそ。誠に物おもひに死にするものとはこの御ありさまにてぞ見侍りぬる。姫宮もさらにとまらせ給ふへうもおはしまさぬめり。まめやかに心憂き心にぞおはします」とてうちなけば、「こと人のいはむやうにもたまふかな」とて「げに身の程知らぬ心の程のおほけなさを罪には侍れ。それもことの外に人もたまはずとさかましかば、身をもなくなすとも人をばいたづらにない奉るべき事かは、思ひぐまなきやうなる心いられの心つきなさは、みづからだに思ひ知られたれば、まいて内などのさこしめさむ所のなめげなれば、御ゆるしなからむ程はと思ひ侍りつるぞかし。その程も時々聞ゆるにまたがひ給はましかば、見知る事もありなまし。よその人のやうになさけなくぞおはする」と唯うらみにうらみ給へば「おのれつらくてとは誠にこそ侍りけれ。過ぎにし方かやうにうらみさせ給はましか

ば」とてうち笑ひぬればいみじうもの哀とおぼしたる氣色にて、ことに物ものたまはず涙ぐみ給へれば、なほいとおろかなる御心にはあらぬなるべしと心苦しくて、「大宮さへかくならせ給ひぬれば、いと何事にかは内にはおぼしかばらせ給はむ。御心だに少しよろしくならせ給ひなば、同じ心にわか宮をも見奉らせ給はむ」と聞えなぐさむれど、いでや、それにつけてもくちをしう中々にこそあるべけれとて、いみじうおぼし入りたり。はかなく月日も過ぎて御四十九日などもはてぬれば、内よりは、「とくまゐらせ給へ」とのみうしろめたがり聞え給へど、おなじさまにうちぐし聞え給ひて参り給はましかば、何事も心より外なるさまにて、心うく耻かしきありさまもてかくされ奉らましを、何事に思ひなぐさめてかは憂きを知らぬさまにて、はぢに死にせぬ身を長らへむなど思しえづめば、起きだにわがらせ給はぬに、大將の御事も年かへらむまゝにといそがせ給ひて、めのと達のもとによろいすべき事どもなど仰せられたるを、うれしき事に誰も思ひいそぐを聞かせ給ふにも、おぼつかなき事をさへおぼしこがれて、絶えはて給ひにし。蟹の刈るてふ心つきなさは世に知らずつらう心うしと人知れずおぼし知るに、心よりはかならむもまほの煙は、あさましかりしまぼろしのゑるべならでは又夢にだにいかで見じとおぼさるゝを、いかにしてさるべき事のなからむさまに命絶えずは、身をあらぬさまになして、さばかり思ひつゝ消え給ひにし御身の苦しさを、知らず顔にてはいかで過ぐさむ。身の上より外にこの世に思しむすばゝるゝ事はなかりしものをなど、つくづくと過ぐる日數ごとにおぼしつゝくれど、さすがにわが御心

「つにてはすべきやうもなく、人のたまはせむも唯今はよき事といふべきならねば、唯たけき事とは御湯などをだに見いれ給はで、さばかりおぼし入りたりし身を、今までおくらかし給へるが心愛き事と、哀ともおぼしいで、けふあすむかへさせ給へとのみおぼしこがればにや、げに日に添へてたのもしげなきさまにぞなり給ひける。内よりは「今一ど見むとはおぼされぬか」とかつうらみなぐさめ聞え給ふ事、日にいくたびといふ事なく御使立ちかはりつゝ、参れど、何のかひもなく限とおぼさるゝ夕つかた、内より参りたる少將の内侍を召し寄せて、さかしきやうにやと恥かしくおぼさるれど、くらきにまぎらはして、「日頃はよろしくもやと待ちつるに、けふなどはとまるべきこゝちもせぬを、佛の御玄るしもやとこゝろみまほしくなむ。いかなりともまばし見むとおぼしめさば、今夜の程にもと奏してあんないいへ」とのたまはすれば、なくなく参りてかくなむと奏すれば、とばかりものもえのたまはせず、限りに見なし聞えさすともさばかり惜しげなる御ぐしを、いかでかいふかひなくなし奉らむとて、「あるまじき事におぼしめされて、かはらぬさまにて見えむとこそおぼさめ。いと心愛き事」とのみ聞えさせ給へれば、げにさぞおぼしめさるらむかし。さらばいかはなごち惜しうおぼし入るに、又の日などは誠に消えはてさせ給ふさまながらも、「少し哀と思ふ人あらばかうながらはさりと見ましや」とまればはいきのまにのたまはするを、めのと違などはさるるさうとなし奉りても、時のまの御命をたすけ奉りて見奉らむとふしまるび泣き」がれて、「度々かくなむ」と内へ奏してければ、げにかぎりあらむ御命の程をせ

ちにやつしがたう思ひ聞えて、かの海いをたがへむも後の世のためいかとおぼしなりて、この宮殿の御をぢの横川の僧都に仰せごとあれば承り給ひて、そのさはふどもまてかぬうちならし給へるを、聞く人々泣き合ひたるさま、大宮の失せ給へりしよりも中々心おはたしういみじげなり。めのと達の「なし奉りてもたひらかにだにおはしまさば」とさかしういひつれど、御ぐしをかき出で、そぐを見るは唯の人だに目もくれまどふを、まして明けくれなでつくるひ奉りたるかひありて、かばかりのたぐひあらじと見えさせ給ふを、かくまなし奉るは、なかなかむなしきさまにて見奉りたらしむにもまさりて、心もをさめられあへず臥しまろぶさまなるを、何のいたはりなき僧都の御こゝちにもことわり悲しくおぼされて、涙おしのこひつゝとみにもえそぎやり給はざりけり。内には「おぼしめさるらむかし。さらばいかはへにむなしきさまなさせ給はむにもおとらず、飽かずち惜しくぞおぼされける。されどげにいむ事のまるしにや、かくてのちはやうやう消え入り給ふ事など、よろしくならせ給へばわが御こゝちにも、今はいかでまばし長らへて行ひもせばやとこよなくおぼしつ。寄りつゝ御湯などばかりあながちにして召しなどすれば、あるかなきかなる御さまながらも過ぐさせ給ひけり。大將かゝる事を聞き給ふにくち惜しく悲しとも世のつねなり。ことのほかに心つきなうなどおぼえ給はむだに、人の御程、事のありさまなどをさしおぼさむにいかでおろかにおもほされむ。まいてままでおろかにいでやと思ひ聞え給ふにもあらず、あながちなる心のすさびにあまたの人をいたづらになし聞えつるは、人にこそそのたまはね。一方ならず

いかでかは世の常におはされむ。人知れず思ふことかなひなばなど、世のけしき見はつる程は、忍び忍びにも見奉りてむなどあまり心のどかに思ひつる程に、げに人はいかにおろかにつらきものとおぼしつらむ。夜目にもまろくさばかりをかしげなりし御ありさま、かみの手あたりなども今も思ひ出でられて惜しう悲しきに、今一どかはらぬ御ありさまを、なごてあながちにも見奉らずなりにけむと、くち惜しきに臥しまるび泣きこがれ給へどかひなし。過ぎにし方いとかばかり覺えましかば、たがためにも目やすからましと思ふには、さしも忍び所なき人だにも哀なるべきわざなるを、まいてつくづくと思ひいで聞え給ふに、何事を飽かず思ひてかくまなし奉りて、さばかり美しくかりし人を、よそのものになしつるぞと思ひつゞけ給ふに、苦しう悲しとはこれをいふにやと思ひつゞけられて、袖の水解けすわかし給ふよなよなは、今始めて別れ奉りたらむとこのこゝちして、寂しさも戀しさもたぐひなかりけり。げにすさまじきものにいひおきたるまはすの月も見る人がらにや、宵過ぎて出づるかげさやかに澄み渡りて、雪少しふりたる空の景色のさえ渡りたるも、いひまらず心ぼそけなるに、さよ千鳥さへつま呼び渡るに、貫之が「いもがり行けば」とよみけむうらやましくながめ侘び給ふに心もわくがれまどひて、例の御めのとこの道季ばかり御供にて、かの宮におはしたれば、みかどなどもわざとまたゝむる人もなきにや、入りて見渡し給ふに、時わかぬみ山木どもの木ぐらくものふりさを尋ねよるにや、よもの嵐も外よりはものおそろしげに吹きまよひて、雪もかきくらしふり積る庭のおもは人のけはひもせねば、わざともえ驚かし

給はで、中門につゞきたる廊の前につくづくとながめ給へり。見奉りそめし夜のありさまよりうち始め、あさましうはかなかりける契の程はわが御心にだに思ひ過しがたきを、まいて世をおぼしはなれぬるもことわりぞかし。あはれいかばかりものをおぼしつらむ、今とてもひとへに世をえおぼしはなれどかしなど、いはけなからむ人の御ありさまにつけても、わが身を愛しとおぼしをこたる事はあらじかし。あはれ唯今も寢覺めてやおぼしいづらむ、又いとかばかり思ひ歎くも夢にや見給ふらむ、さまで思ふらむなど知り給はじかしなど、思ひつゞけ給ふに、袖もまぼるばかりになりぬ。池に立ちぬるをしのおとなひも同じ心におぼされて、

「我ばかり思ひしもせじ冬の夜につがはぬをしのうき寐なりとも」（歌）といふも聞く人なければくち惜しさに、もし寐ざめえたる人やあると、こゝろみに近う寄りてき、給へど、音するなくてかうしどももの、風に吹きならざるゝぞ心ときめさせらるゝ。かひなくとも近き御けはひをだにきかまほしく、わか宮の御事もいかおぼしたると御氣色もゆかしきを、今夜すゝさむ事の心もとなければ、まろくする人もなくてむげにおぼつかなきを、いづれともなからむ御中に入り立ちて、玉藻かるあまの御言尋ねむも今更にかつとつゞましかれど、唯かうながらは立ちかへるべき心ちもま給はねば、とかうさぐり給ふにはなるゝ所もわりけり。風のまよひにやをらおしわけて見給ふに、御とのあぶらほのかにても見わくべうもなければ、さにはやと見ゆる方さまにつたひより給ふ、にはひの人よりはことにさと匂ひたるをおぼし

やあつるもまゐるく、姫宮はいつもとけて寐させ給ふ事なかりければ、あやしとおぼして少し見やり給へるに、あさましく思ひかけざりしよなよなにかはらねば、その折よりも今少し心ざわざせられて、なえたる御ひとへを奉りて御帳のうしろにすべりおり給ふも、わたわたとわな、かれてとみにも動かれ給はざりけり。男君もさなめりと覺ゆる御けはひに、われもえ恐びあへず、引きとひむると思へど、またある御ぞどものうはばかりぞ残りたる。くち惜し心うしともよのつねの事をこそいへ。いとかはかりまで見まうさものに、おぼしおかれにけると思へば、身より外につらき人なうくやしきいみじきに、御ふすまもさぬもさながらおしやられて、ありしながらの匂ひばかりとまりたるに、よもすがら泣き明し給ひける涙に、浮きたる枕のさぐりつけられたるなど、いとかはかり覺え給ふ事はなかりつるを、悲しなどもよのつねなり。張も釣するばかりになりけるも、唯わが身の上こそはあらめ。こゝらの月傾を、知らず顔にて心解けて明すよなもありけるは、われながらだに恨めしくいみじきが、唯からながら死ぬるわざもがなとおぼされて、このとめおき給へる御ぞを引きかづきて、よとぞ泣かれ給ふ。

「かたまきにいづく夜な夜なを明すらむ寐ぎめの床の枕うくまで」といとながし添へ給ふけはひのいみじきを、遠くもえのき給はすまらびいで給へれど、唯御帳のかたびらにまとはれて、さぐりやつけられむとおぼすに、恐ろしくてわたわたとふるはれながら、遠き程の御けはひに、いとよほざる、つらさにや、薄き御ぞひとへはやがてまぼるばかりに濡れ

100

にけり。夜もやうやう明けやまぬらむと思ふまで起き出づべきこと、ちもまたまはねど、若宮の寝おひれ給ひて俄に泣き給ふに、人々もおくるけはひして、風のあらしに御とのあぶらも消えにけり。「まそくもて参れ」などいふなるにも唯かうにて、ふせの少將のやうになりなまほしけれど、かひなきものからかくれ居て、いかに怪しいみじとおぼすらむとおしはかるも、今は更に唯いるにも御心にたがはぬをだに人知れぬ志にはと、せちに思ひおこして立ちいで給ふに、奥のかたには三の宮臥し給へるなるべし、御ぐしの手あたりつや、かに長うさぐられて、今ぞうち身じろぎ給ふ氣色なるを、昔の心ならましかはあげまきもいかゝあらしと、さすがに美しくしかりし御はかけはおぼしいでらるれど、今はかやうのかた誠にこりはてぬるこゝちま給ひて、風の音にまぎらはしていで給ひぬるに、若宮の御聲のなほ聞えてとみにもえ立ちのき給はず。

「知らざりしおしのまよひのたづのねを雲の上にやき、わたるべき」とて誠に過ぎがたけれどとがむべき人目もなき所といひながら、あまり長むせばばかり有りがたうめでたかりける御心の深さも、今更にあさはかにや見なされ給はむとあぢきなければ、明けくれの程にいで給ひぬれど、かの御枕のまづくのみ心にかゝりて寝られ給はねば、おてうづめしておこなひしつゝまぎらはし給ふ。源氏の宮の御方にも常よりはとく人々起きたる聲して、よもすがらつもりたる雪見るなるべし、たゝすみ給ふまゝにわた殿の戸より見通し給へば、若きさぶらひどものきたなげなき、色々の狩衣、指貫など清げにて五六人雪まらばしするを見

るとて、との姿なるわらはは若き人々など出でぬたる姿ども、いづれとなくをかしげにて「ふまゝく惜しきものを」などいへば、みすの内なる人「同じくば富士の山にこそ作らめ」などいへば、「越の白やまにこそあめれ」といふなり。御前には起きさせ給うてにやとゆかしければ、すみのまの御さうじの細目に明きたるよりやをら見奉り給へば、もやの軒端なる御几帳ども、おしやられて、常よりもはればれしくて、そばの柱のつらにけうそくにおしかゝりて見出させ給へり。皇太后宮の御かたみの色にやつれさせ給へる頃にて、この頃の枯野の色またる御ぞどもの濃く薄くすすきすすきなるに、おなじ色のうちたるわれもかうの織物のかさなりたるなど、こと人のきたらば物すさまじかりぬべきを、春の花、秋の紅葉よりもなかなかなまめかしう見ゆるは人がらなめりかし。わざと引きもつくるはせ給はぬ寝きたれの御くしの、こぼれかゝりたる肩のわたりなどさまことに見えさせ給ふ。人々の遊におる、を御覽じて笑ひなどせさせ給へるあいきやうなど、くもりなき雪の光にもてはやされ給ひて、俄にわたりまで光るやうに見えさせ給ふ。なほいみじと言へど、かばかりなる人はあらじかしと、見奉る度ごとには一かたの心まどひのみせらるれば、あまたの人をもいたづらになしつるぞかし。つひにはわが身もはかばかしき事もあるまじきぞかしと思へば、涙は例のこぼれ給ひぬ。富士の山いと大きに作り立て、煙立てたるは、げにいとをかしう見やられ給ふ。宮、「いつまでか消えずもあらむわは雪のけぶりは富士の山と見ゆとも」響とのたまはすれば、御まへなる人々心々にいふ事もあるべし。つくづくと見奉るにもなかなか心のみさわぎ

まさりて、いとかくも作りおき聞えさせけむ、むすぶの神さへうらめしければ、やをら立ちのき給ひて、

「もえわたるわが身を富士の山と唯ゆきつもれどもけぶり立ちつ、無など思ひつゝくる程は、行ひもけだいなするは思へばいと心うくて、「南無平等大會一乗妙法」と忍びやかにのたまへる、なべてならずたふとく聞ゆるに、人々「このわた殿のみさうじより御覽じけるにこそあめれ。おさましげなるわさがほを」と侘び合ひたり。おとなしき人々は「けぶりの今はといふべくもあらず、をかしき御けはひかな」とめで聞えて、御心のうちは知る人なし。東宮の御つかひ参りぬと聞き給へれば、例の心やましくて御まへに参りて見給へば、母宮もこの御方にて御文御覽す。御使はやがて宮のすけなりけり。女房の袖ぐちなべてならず出でぬつ、ものいふめり。御文はこほりがさねのからのうすえふにて雪いたうつもり、えもいはずまみこほりたる吳竹の枝につけさせ給へり。大宮「いとをかしき御文かな。かやらの折は御みづからも聞えさせたまへかし」とのたまはするを、大將はなどかくせちに聞えさせ給ふらむとふさはしからず聞き給ひて、うち見やり奉り給へば、いとつゝ、ましくておぼしもかけねば、母宮「めづらしげなきふるめかしさは、いかに見所ならおぼさるらむ」などもてなやませ給へば、大將の君「せうせうの人恥かしげなる御手ぞかし。けふはまいて見所侍らむかしとゆかしげにおぼしたれば、いとあるまじき事におぼしたるにいと、かう申し給ふ」と笑はせ給ひて、「やがてこの御かへりは教へ聞えさせ給へ」とて御文も給はせられたれば、見給ふ、

「たのめつ、いく世へぬらむ竹の葉にふる白雪の消えかへりつ、硯の硯の水もいたう氷りけると見えて筆がれに書きなされたる、もじやうなどこそまかにをかしげならぬと、筆のながれなどはいとあてにをかしき御手なりかしと見給ふ。」げにいとほしくさふらふめるを聞えそこなひてはくち惜しくや」とてうちおき給へば、「まいてそこなはぬやうはあらじ」とのたまはすれど、さりとはとて、

「末の世も何たのむらむ竹の葉にかくれる雪の消えもはてなで、硯とかけ奉らせ給へば、いとくるしとおぼしなごらもいかゞなども聞えさせ給はで、うちそばみて書かせ給ふ手つきなどの美しくしげさたぐひなし。雪の光に朝日さへさし添ひて、御かたちありさまけさやかに見え給へば、例の心の中はまづめがたうわりなし、御使の、かづけ物どもあまた取りいで、これはかれはなどおとなしき人々して定めさせ給ふまぎれに、御硯の筆を取りて、おりつる御文のはしに手習玄給ふやうにて、

「そよさらしたのむにもあらぬ小ざゝへ末葉の雪の消えも果てぬよ短短きあしのふしのまも」など書きすさみて見給ふにも、われながらこよなく見所あるを、何事にもおよぶまではなかりける身ながら、今一きはおとり聞えさせけむさきの世の行ひの程、くち惜しき中にも心にまかせてかきかはし、つひにはとおぼしたる氣色のうらやましさはねたかりけり。「ことわりといひながら、かばかりの事さへもこよなくさふらふものかな。いかゞ御覽する」とてまゐらせ給ふを、近くさぶらふ人々、「いとまたり顔なる御氣色かな」とて笑へば、我も

うちほゝるみつ、「誠にもえさふらふまじや、いかにいかに」とせちに申し給へば、見るともなくうちそばみておかせ給へるは、「あなおぼつかなのわざや」とて引きやり給ふを、大納言の君といふ人「賜はせよ。見くらべ侍らむ」ときこゆれば、「いでやすげなけなれば、まいてはかばかしう見ない給はじ」とてこまごまとやり給ひつ。かうのみひとへに明けくれ見奉り給ふまゝに、心ぎもをのみくだきつ、言ひまらぬことのはけしきをも、ひと所の御めにも耳にも見知らせ聞え給へど、その氣色を夢にも思ひよるべくもあらずもてなし給へり。さすがにあながちなるさまにて見奉らむとおぼさば、は山のまげりがたかるべきにもあらず。されど殿などのおぼさむ事も、いとうたて思ひやりなきこゝちのみして、思ふまゝにも亂れ給はぬまゝに、唯心一つにのみくだけつ、つれなく過し給ふなるべし。ありしねぎめの床のうき枕の後は片つ方の物思ひもまさりて、あはれにいみじくのみ思ひやられ給ひつ、いかでかはり給へらむさまをだにけ近き程にて今一たび見奉らむ、あさましういぶせき心のうちも人づてならで聞え知らせむなどぞ心にかゝり給へれば、中納言のすけにもこまやかに語らひありき給ふさま、過ぎにし方かゝらましかばと恨めしく覺え給へば、「いでや、ためこそ人のと心愛かるを、例の心愛くよそ人のやうにのたまふこそ大貳が心ならましかば」とうらめしげにのたまふもげにと思ひ知らる。筑紫へくだりにし式部の大夫大貳は、ことし三河になるべきぞかし、正月にのぼりたり、かのおぼつかなくさゝし人大貳の事誠にやときかまほしくおぼすに、参りて道の程のありさま、國の事など聞えさす。國々の野山、浦々いそいそ

のをかしかりしところなど、海の底まで残りなく語り聞えさせて、「あさましき道の
 そらにて俄に悲しき目を見給へしかば、よろづかひなくさふらひて、やがてまかりのぼりな
 むと思ふ給へしかども、大貳のせちにいざなひ侍りてなむ。けふだに慰む方なく思ふ給ふれ
 ば、つかさ給はらむ事ももの愛くなりてさふらふ」など涙ぐみて聞えさせれば、「さてはい
 とゆかぬ三河の八橋はいかゝあらむ。さてはいかなる心にて俄にさはありけるにか」との
 たまへば、「さらでだにくもでに覺えさふらふに、都はなれても何しにかはとも思ひ姿な
 る氣色も、げになまきん達よりはきらきらしげに目やすきを見給ふにも、誠にさもやありけ
 むとおぼすに、それと知らざりけるにてもなま心つきなくおぼされて、いたくもあひまらひ
 給はねど、見そめしありさまより始め、めのとの心わはせて盗ませし程、道すがら泣きこが
 れ心づよく近うも寄せず、限りのさまになりしかば心のどかに思ひ給ひて、寄りもつかず
 うちたゆみて侍りし程に、からどまりと申す所にて消えうせにありさま、海におち入りた
 るとなむ見給ひし。扇を取らせてなむさふらひしに、まかじかなむけがしてさふらひし。い
 かに思ひけるにか、たゞにも侍らで、七月八月ばかりに侍りけるは何がしの少將にや侍りけ
 む」と語るをき、給ふに、さは誠なりけりと思すに、氣色もかはるらむかしと覺ゆるまで、い
 みじく覺ゆれど、つれなくもてなし給ひて、「げにおほけなく心深かりける人かな。かへりて
 はうとましままでこそ覺ゆれ」などことすくなにて入り給ひぬ。折しも心つきなかりしもの
 いみよ。夢物語のついでにはおのづからとひ合せてましを、若宮の御さまにて美しくうてあ

らましかば、人知れぬさまにてはあらせず、大殿にはわづけ奉りてましとおぼすに、くち惜
 しい悲しき事限なし。さまたまにのつげつ、かゝりける人々をいたづらになしてけるも、昔の
 世のちぎり心うくおぼしつゝけられて、いと補のひまなし。露ばかりそれと知りて去たる
 事にはあらねど、人しもこそあれ、かゝるあやまちをしてわが心をかうまでまどはすも罪重
 きこゝちして、過ぎにし方のやうにもへだてなくはえおぼすまじかりけり。又の日、道季大徳大
 して「その有りけむ扇おこせよ。傳へよとありけむも、いとゆかしくなむ」とのたまはせられ
 ば、すなはちもて参りて、「これは長き世のかたみと思ふ給ふれば、返して給はらむ」と申す
 を、例のつれなくもてなし給ひて、「聞くやうなるうとうとしさならば、かたみなどあながち
 に忍ばでもありなむかし。せめてあらぬさまにいひなさるゝ程のそらごとかな」とのたまへ
 ば、「いみじきちかごとどもを立て、いけて見むと思はゞと泣き詫びさふらひしかば、すべ
 て唯まるねにてこそよる晝あつかひてさふらひしか」とせめてあらがふもあやしけれど、い
 たうもあひまらひ給はで、ことごとにいひまきらはしてやみ給ひぬ。人々まかでなどして日
 も暮れぬるに、この扇のとくゆかしければ、はしの方にいで、いそぎ見給ふに、空いたうか
 すみ渡りてはかばかしくも見えす、げにあらひける涙のけしきあるく、あるかなきかなるを
 たどり見給へば、たどる所なき水莖の跡はやがてさしむかひたるこゝちして、今はとておち
 いらけむ程のありさまなど、唯今見ると、ちして悲しなども世の常なり。さそふ水だにと涙
 ぐみたりし氣色もおもかげにおぼし出でるゝに、かゝるあとをつてに見てやむべき事と

は、契り思はざりきかしとおぼしつゝくるに、いと忍びがたきいみじくて、やがてその同じみをも流れいでぬべくおぼさる。

「からどまり底のみくづと流れしをせの岩波尋ねてしがな」（涙）かひなくともかの白波をだに見るわざもがなとおぼせど、都のうち御ありきをだにも御心にまかせ給はず、所せくわりなき御もてなしなれば、まいておぼしかくべき事にもあらぬば、いとくち惜しくおぼしつゝけらるゝに、かのひかる源氏の、須磨の浦にまはたれ侘び給ひけむすまひさへぞうらやましくおぼされける。

「あさりする蟹ともがなやわたつ海の底の玉藻もかづき見るべく」（涙）なげの哀をかけむ人にてだにこの御扇を見給はむは、あさかるべくもおぼさぬに、限なき御なげきのもりのまげさに何事も思ひけち給へれば、やどとなからぬ程の事は、まいておぼしけちしにこそはありしか。忘るゝとなけれど、いとすなはちのやうなる心まどひは、おぼしのどめてありつるを、今宵はよもすがら泣きあかし給ひて、つとめてもいつしかと見給ふに、顔にあて、泣き入りし涙の跡はいと煮るゝ、あどもあらはれ落ちたるを、又われもいと流し添へ給ふ。

「涙川流るゝあとはそれながらまがらみとむるおもかげぞなき」（涙）などかきつけてこの扇は返し給はず。式部大輔はこのたびのぼりてはありしやうにもおぼしたらず、ものしげなる御けしきなれば、あやしう心えずも思ひなげさける。誠かの若宮の御いかにもなりぬるを、かゝる程とていかにかではとて内よりぞよろづおぼしあつかひける。「たゞひなき御う

つくしき」と聞かせ給へば、「かゝるついでにいつしか見奉らせ給はむ」とてその夜内にも女三の宮ぞぐし奉らせ給ひて、入り給ひけるを御覽するにつけても、あまた引きぐし奉らせ給はましものとおぼしめすに、なきが多くもとは、げにこれにやとこといみもまわへさせ給はず。若宮を見奉らせ給ふに、いとかうまではおぼしめされざりつるに、いとあまりなる御かほつきの行くすゑおしはかられて、かゝるちどもありけりとゆかしきまで御覽せらる。中宮（中宮）の若宮の御うつくしきをたぐひなきものに思ひ聞えさせ給へるに、かくさまことにめづらしき御ありさまなれば、いと哀なるわたくしものにおぼしめすも、わが御世もけふすとのみうしろめたく覺えさせ給ふには、この御かたさまと見おかせ給ふべきすすがもなく、心ほそき御ありさまなるを、二の宮におぼしおきてしありさまにて、大将にうちぐしてものし給はましかば、やがてゆづらせ給ひてましなど、かへすがへすくち惜しき事を歎かせ給ひて、三の宮の御事をやなほさやうにもいはましなどぞこりすまにおぼしよりける。時なりてもちひ参らせ給ふに、めさまして御とのあぶらのわかきに見合せ聞えさせ給ひて、物語高やかにまつゝうち笑はせ給へる御かほの匂ひ、あいきやうのゆかしきまで美しくして、左大将の御顔にたがふ所なく似させ給へるに、ことのはかなるべき御中ならねばにこそはと、御覽じなすも飽かず美しくしうおぼされて、「大将の聲さつるは」と召し寄せて、「この御かほつきはいかに見給ふ。おとゝのそこをのみたぐひなき光と思ひ給へるに、かくたがはぬさまなる人もいできけるものを」とてさし寄せ聞え給へるに、ふと見合せてるみ給へるは誠に似奉り

たらむ。わがかはつねの御心おとりよりもまさりていみじうおぼし知らるゝものから、何となく涙こぼるればかしまりたるさまにまぎらはしてさふらひたまふ。内御覽じくらべて「武藏野のもの根ざしはかくしも尋ねぬもあるものを、あやしきまでたがふ所なくもおはするかな」とのたまふに、「いと聞かせ給ひたることもや」といわりなければ立ちのき給ひぬれど、「まことに袖のなかにや」とあかす美しくしき御顔つきを、わがものにて明けくれ見ましものをおぼすに、くち惜しういみじも世のつねなり。事どもはて、人々皆まかで給へど、例の御くせなればありつる御おもかげのみ懸しくて、立ちも出でられ給はず、よろづに何につけても、袖に涙のかゝりける御身の物思はしさを、ちぎりうらめしくおぼしつゝけられて、やがてあかし給ひてける。こののちは常にゆかしく思ひ聞えさせ給へど、いかでかは思ふまゝにも見奉り給はむ。人知れずいとも哀におぼしあまりては、いひ知らぬ事どもをこまごまと書きつゝけつゝ、中納言の佐していみじう忍びつゝ、参らせ給へど、まいて今さらに御かへりなどかきかはさせ給ふべきならぬば、そのまゝの露ばかりもなし。かゝるこに見ず知らざらむ所もがなと、この人のゆかりとおぼしめせば、すけをさへものしうおぼしたれば、いと苦しくてかくなむと聞えされど、ことわりぞかしとは思ひ知られ給へど、知らぬ涙は人わろくこぼれ給ひつゝ、「いかにしても近き程にて、ひたすらにつらきものにおぼしきみけむ罪のおもさも、聞え知らするわざもがな」とど語り給ひける。一方こそかく思ひのはかになり給はめ、この底の藻くづだにあらましかば、あなづらはしきわたくし物に

て、常にいたさうつくしみてましものを、いふかひなきわざなりや、いかなるさまにてもありときかましかば、忍草ひとりばものぬぢけたりともいひかはせむ。尋ねとるやうもありなましを、ひたすらさしも思ひなりけむよ、時々もほの見しに思ひとる方は少なくものはかなげにわかびたる人さまなりしかば、世に長らへて聞えむ事の、いみじう覺えけるにこそはとおぼしつゝくるにも、うとましかりける心の程とは覺えず、わがための哀はいと深うのみおぼされつゝ、こなたかなたこの頃はいとかわく世なき御袖のひまなきなめり。その夏頃よりみかど御こゝち例ならずおぼされていかで静なるさまになりて行ひをのどかにせばやとおぼしめして、嵯峨野のわたりにいかめしき御堂など作らせ給へり。世をまらせ給ひてはたさせにもならせ給ひぬ。一の御子おはしませばあかぬ事なき御身なれど、世をおぼしめし捨て、む事を、大殿などはいとくちをしく惜み聞えさせ給ひけり。さるべき御中といひながら、いと有りがたうなつかしき御心ばへありさまなれば、千年もかはらで見奉らまほしきもことわりなりかし。されども七月よりはまことしうなやましげにて、物心ほそげなる御氣色を、中宮はいと忍びがたげにおぼし歎きたるもいと心苦しうて、限あらむ御別れの程も引きとめられさせ給ひぬべうおぼしめさるれば、まいて少しもうつし心かよはせ給はむ日までは、かた時も立ちのき聞えさせ給ひぬべくもあらねど、大やけわたくしにつけてもよろづにたのもしき御行く末に、かうけふとも知らぬありさまにて、さのみ思ひはなれ聞えじとてもいかに。さてこそは、かぎりのわかれの程もすこしおもなれ給はめなどせめておぼし

すて、御すけのほいとげせ給ひぬへき御心まうけなどせさせ給ふを、宮は年頃の御ならひの名残なう悲しういみじくおぼしめされて、さかの宮にももろとも渡らせ給ふべきさまにぞおぼしめしいそぎける。萬よりも女宮たちの御事をぞ哀にうしろめたう思ひ聞えさせ給ひて、大殿にもかへすがへす聞えさせおかせ給ひける。二の宮の、「今はひとへにこの世の事おぼしめて、けるも、思へば中々いとよかりけり。齋院いせいんもおとなびて年頃たれにも目ならし給はぬならひに、さしも世の中かはるけぢめも知られ給はじかし。三の宮などこそいと心苦しきを、さ思ひそめしこゝろざしも侍り、なほ大將に若宮をもろとも思ひうしろむべきさまになむあづけむと思ひ侍る。今よりさまことなる生ひさきはいとゆかしげなるを、何となきなまそんわうにていとよせなからむよりは、唯わがものに思ひてものせよかし。思ふ心ことなめるひとすみなめりとわづらはしけれど、そのうちうちの心ざしをば知らず。かゝるゆるでんをさりとこの外にはたがへ給はじとひとへに頼むなり」などのたまはせてうち泣かせ給ふを、おとやはいみじう哀に見奉り給ひて、「一日にても世の中に立ちとまりさふらはむ限りは、いづれの御事をもいかでかは見はなち聞えさせむ。女子も持ち侍らず、あやしき窓の内のかしづきものにも、命の限はつかうまつり侍りなむ。大將のあそんはいかに侍るべきにか、明けくれ思ひあくがれたるやうにて、いとひがひがしくあやしき心ざまにのみ侍れば、うちうちにも思ひ給へ歎くをやくにてなむ。さりとともかゝる仰せごと承りなばいかでおるかには」などかたみに哀なる事もたのもしげに聞えさせ給ふ。うちかはり

かくのみのたまはするを、われさへ聞き忍びつゝ、さのみ過ぐし給はむもあるまじき事なれば、大將の御氣色も知らず顔にて、嵯峨野の御わたりのこなたに、三の宮むかへ聞えさせてむとおぼし立ちて、齋院いせいんのおはしましつるかたをいとみかきそへさせ給ふを、大將かのありし夜目にもまろくこよなくおとり給へりしものを、さばかり飽かぬ事なく、何事もこれこそは、だうりのまゝの限りなる人の御ありさまなめれど心のうちにもおろかに思ひ聞ゆべき事もなかりしを、だに、心深くまみにし方のなめならぬ目うつしには、われながらもあさましくなさせなき心ばへを見え奉りて、さばかりちぎりに哀なりける人語をも雲のよそに見なして、くやしき悲しと明けくれ思ひこがる、心のうちをだに、夢ばかりいひ知らせ奉らでやみぬべきこの世の悲しさは、いづれの折にか胸少しひまありて、さやうに世の常のありさまをまてきこえ奉らむ、さしはなれたるあたりだにあらで、袖にそよめくばかりにて、心より外に我も人もさぞかしく見聞かれ奉らむなどおぼしつゝくるに、すべて今ぞ世に見えぬ山路も、もとめいづべき月日来にけるこゝちま給ひける。心よりはかにこの世にははらぬさまながら、もし長らふともさてこそあなれともありか定めては聞かれ奉らじ。若宮をばげにさやうにえ奉らばやなど、この御事にのみぞさまさまに、うきよもひとへにえおぼし捨つまじかりける。八月十餘日になれば、嵯峨の院の御堂いそぎつくり出でさせ給ひて、おろさせ給ふまゝに御くしおろさせ給ふ。悲しなど今始めたらぬ事なれど、あやしき人の上にてだに、なほ見るも聞くも心ざわがぬやうはなきを、まいて中宮などのおぼしたるさまの

心苦しきを、大殿は聞えなぐさめさせ給ふ。春宮のぬさせ給ふなどは限なくめでたき御ありさまなれど、みづから御心の中にはかはりたる御すみかのみあはれに思ひやり聞えさせ給ひけり。かやらの事どもさしあひつゝ、三の宮の御わたりものびぬるを、大將は人知れずいとうれしとおぼしけり。嵯峨の院には御こゝちもよろしくならせ給ひて、宮達迎へ奉らせ給ひて見奉らせ給ふに、かたみにいと悲しくおぼしめされけり。中にも入道の宮はさまさまおぼしつゝ、くる事さへ多かる御身のありさまなれば、御袖もえ引きはなたぬ御氣色哀なり。いづれも今はかくて見奉らむをだになぐさめにとおぼしのためはするもことわりにも心苦しけれど、さのみ引きつゝきたらむも、思ひ入りしさまにはたがひてやとおぼしめせば、あるべきさまなど聞えさせ給ひて、入道の宮ばかりぞとまらせ給ふ。嵯峨野をやがて御前の庭にて大なる川も程なく見やらるゝに、をぐらの山の志の薄もほのかに見えて、鹿のねとおなじ心になきつくし給ひつゝ、行ひ給へるさま、げに後の世はたのもしげなり。院もやうやう御こゝちよろしくならせ給ひて、よひわかつきの念佛けだいなく行ひつとめさせ給ひつゝ、「後の世もかならず同じ所に」と語らひ聞えさせ給へる、哀にたのもしげなり。京には大嘗會など近うなりぬれば、源氏の宮は女御だいま給ひて、「やがて参り給ふべし」とあるを、今始めて聞ゆる事にはあらぬと大將の御心のうち思ひやるべし。「今はかうにこそは」とかぞへられて、我が身もうき世を思ひはなれぬる日數も、残なきやうに思さるゝにはさすがなる事多くて、年頃よろづに有りがたく思ひ忍びまぎらはしつる心の中も、やゝもせばわが身も人の御身

もいかならむと亂れまざりて、敷島のやまとにはあらぬと立ちぬにおほし侘びけり。されどかけてもえる人なき御心のうちなれば、たれもいそぎ立たせ給へり。年頃おぼしおきてつる事なれば、何事もなめならむやは。常の事にことを添へて今行く末のためしにもなるばかりと、御心とめておぼしおきてたるは、げにいとめでたき御心いそぎなり。九月も晦日になりぬれば唯けふあすばかりこそはと、いと吹き添ふこがらしも、身にまみまざりて物心ばそく詠めふし給へるに、寢殿の方に宮のきんの聲の、忍びやかに聞ゆるに、いと忍びがたくて、笛を同じ聲に吹き合せつゝ、参らせ給へれば、大方はいと物さわがしくいそがしげなるころなれど、この御方にはのどのどとして、なべてならぬ人々五六人ばかりおまへに近くて、ひさしのおましにおはしまして、若き人々わらはへなど、池の舟にのりて漕ぎ歸り遊ぶを御覽するなりけり。われも高欄におしかゝりて、笛を吹きつゝ、そのかし聞えさせ給へど、同じすぢを習ひしかど、このほかにおとりたらむと、なかなか耳ならさせ給はじとにや、弾きすさびさせ給ひて、「さらばこれを同じくば」とて大納言の君してことをさしやらせ給へれば、常よりも心やすく引きよせ給ふまゝに、

「忍ぶるをねに立てよとや今宵は秋のまらべの聲のかざりに」といはるゝを、人もこそ耳とひむれ、げにうつし心もなくなりぬるにやとわれながらもどかしくて、言ひまぎらはして琴を手まさぐりにま給ひつゝ、空をつくづくと詠め入り給へるに、きりふたがりて、月もさやかならぬしむいとゝもの哀なるに、かの天くだり給ひしみこの御かたちけはひ、ふと

思ひ出でられていみじう戀しきになぞやうき世にとまりけむことぞいとくやしきや。又やとこゝろみまほしけれど、ふもとよりだにこそかへるなれ。ほいのまゝに見置き聞えさせて、雲路にまじらむなほ心やましければ、みすを引きわけ給ひてなげしにおしかゝりて、「この御ことは弾かせ給ふばかりなつかしうはいかでか。なほまゐらせむ」とてせちに奉り給ひて、琵琶をひきよかせて衣がへをひとわたりおとして、「萩が花すり」とうたひすさびて、少し心に入れて弾き給へる、例のいひまらす心ほそく哀なるに、かきかへさるゝばちのおと、おもしろうわいぎやうづさて、雲の遙にひびきのぼるこゝちするを、かくれみの中納言の二の舞にやならむ」とむつかしければ、ばちついでし給へるを、人々も宮もわかずおぼしめしたり。夕霧絶え間なきにまぐれたちて、折々うちくらがりたる空のけしきものむつかしければ、入らせ給ひてみかうしまるなれど、つくづくと詠め給ひて、「きうろうまさにながし、こうかいに雨きたる」と忍びやかにすし給へる御聲、つねの事なれど、なほきくことにもづらしくめでたければ、若き人々などは奥へもえ入りはてすめでいりて、むれるつゝ、「この頃こそいみじうものおぼしたる氣色なれ。何事ならむ」などいひ合すべし。かくいふ程に一條院の、日頃例ならぬさまにおぼしめされけれど、折ふしびんなければ、風になど忍び過させ給へるを、折々御胸をさへなやませ給ひて、俄にかぎりのさまに見えさせ給ふに、内のおぼしめし歎くさまの常ならず。されどものはじめにかゝる折行幸はいかゝりなど、たれもせいし聞えさせ給へば、おぼつかなき事をさへにおぼしめすに、程もなくうせさせ給

ひぬれば、あへなしともよのつねなり。内には見奉らせ給はざりつる事をさへあかす悲しともよのつねなり。さらになべての世の別れともおぼしめされざりけり。世の中の御いそぎもみならずやみて、なべてくろみ渡りぬるもいとほしげなり。皇太后宮の齋院の御かはりには一條院の后宫の姫宮を居させ給ひにしが、大せんに渡らせ給ひにしを歸らせ給ひて、齋宮もおりさせ給ひぬるかはりにぬさせ給ふべき女宮達、このころおぼしめさざりけり。源氏の宮の御内参りやいかなるべき事にかと世の人々やうやういひ出づるを、殿にもきかせ給ひて「あなわぢきなや。まだ二葉よりたゞ人にならせ給ひにしかば、今更に神も大やけも知り聞えさせ給ふべきにあらす」とておぼしめかけたらす。さぶらふ人々も内わたりの今めかしさをいつしかと心もとながり思ふべし。宮の御かたちこの頃はいとさかりにとゝのほりまさらせ給ひて、誠にひかるとはこれをいふべきにやと見えさせ給ふを、みかど、申すともかゝる人世にはおはしましけりと、さはいふとも御目は驚かせ給ひなむかしと、見奉る限はいひ合せつゝ心もとながるに、宮の御夢にあやしう心えず、ものおそろしきさまにうちまきり見えさせ給ふを、いかになりぬべきにかと人知れず心ほそくおぼしめさるれど、かうこそなど母宮にも聞えさせ給はで過させ給ふに、殿のうちにおびたゞしきものゝさとしのあるをものとはせ給へば、源氏の宮の御年わたらせ給ひて、おもくつゝませ給ふべきよしをあらまた申したるを、いとおそろしうおぼしめしおどろきて、さまざまの御祈ども心ことにはじめなどせさせ給ふに、殿の御夢にも賀茂よりとてねぎとおぼしき人参りて、さかきにし

たる文を源氏の宮の御方にまゐらするを、あけて御覽すれば、

「神代よりまめ引きそめしさかき葉を我よりほかにたれか折るべき細川よしこゝろみ給へ。さてはいとびんなかりなむ」とたしかに書かれたりと見給ひて、うち驚き給へること、いとものおそろしくおぼされて、母宮大將などに語り聞えさせ給ふを、聞き給ふこと、ちなかなか心やすくうれしくぞなり給ひぬる。年頃もとやかくやと身一つを思ひくだけけなから、さすがにわが物にひき忍びとりかくし聞えて、ひたすら深き山里などにもてさすらはむも、あるかひなかるべし。さりとて親たちのおぼしよらぬありさまにて、ほのかに見奉りそめても中々なる心まどひはいやまさりこそはあらめ、さらばさてもあれとはかならずおぼしゆるさぬやうは世にあらじ、さりとて御心の中どもには思はずにもあるかなと、ことにふれつゝ明けくれおぼしみだれむが、いといはしう心苦しきぞかしなど思ひなげかれ給へるを、げに神代よりすぢことなりける御すぢせなりければ、今はなかなか心やすくて明けくれねたう心やましき心の中はあらじと、胸あきぬること、ちま給ひながら、いかに定めていかに歎くにか、あらばあふ世の限だになく、こゝらの年頃わが思ひくだけつるすぢは違なるにこそはとうち思ふは、又さまことにいみじき心中なり。内の御夢などにもさだかに御覽する事ありておぼしおどろくに、大殿に語り合せ聞え給ひて、御心中どもはいとくちをしけれど、御うらなどあるに、おほやけを始め奉り、殿の御ためにも、行く末遠くめでたかるべきやうにのみうらなひ申しければ、とかう誰もおぼし定むべき事なりで、定まり給ひぬるを、世

の中には思ひかけずあさましき事にぞいひける。齋宮には嵯峨野の宮嵯峨野ぞぬさせ給ひにけるも、大將の御心のよのつねのさまならましかば、齋宮、齋院世に絶え給ひてやあらましとぞ人知れずおぼしける。鈴鹿川の浪のよそになり給ひぬれば、さばかりの御心には何とおぼさるまじけれど、かうと聞き給ふはたゞならずつひにいかなるすぢのあなるにか、かうまでも目やすかるべき事どもはさまさまもてはなれ行くよ、もしから國の中將のやうに、こもちひじりやまうけむとすらむと、われながらまれれ獨るみせられ給ひけり。三月になりぬればくだりにし大貳の家に、齋院のわたらせ給ふべき事などいまひさかへていそがせ給ふ。母宮はいにしへの御ありさまなどおぼし出づるに、今さへ神のいがきに立ち添はせ給はむこととは、いとくちをしくおぼされて、かつ見るだにわかぬ御ありさまをいかにおぼつかなき月日、おのづからへたゝらむとおぼしなげき給へるを、院院は「いかでか、さは」とのみうらめしげに恨み聞えさせ給へるを、ことわり心苦しうて、「あまにならざらむかぎりは、いかでかおぼつかなき程にはなし侍らむ。行く末の事を思ふこそくちをしうは」など聞えなぐさめさせ給ひながらも、今はとならむ命の程も見奉るまじきぞかしとおぼすは、いと忍びがたう今よりおぼされけり。大將は御内参りのけふあすになりたりしに、おぼしとまりし一ふしこそ神の御かたざまうれしうおぼされしかど、さまことに定まりはて給ひぬれば、なほむげにまめの外にかけはなれ果てぬるぞかしと思ひとぢむる、いとやらむ方なかりけり。思ひあまる折々は、けぢかき程にて心の中をもうちかすめ、忍ばぬ涙をもらし出づるに、なぐさむと

はなかりつれど、よるづにありがたき御ありさまに目なる、に、多くの物思ひのまぎれとも
なりつるを時々など参りて、いとかうかうしくよそよそしからむ御もてなしにては、いかで
かは限あらむ命も長らへやるべからむと、いみじう心ぼそくて、この頃は唯この御方に暮
し給ひつゝ、人まにはいひ知らぬ御氣色などのより出づるを御覽するまゝに、いととうとまし
く心憂きにも神のいがきにのみ、いそがれ給給給給。露ばかりも知らぬさまにもてなさせ給
へるあまり、いとつらう思ひあまり給ひて、この年の頃思ひくたくる心のうちをもつれな
く思ひ返して、いかでけぞやかと思ふさまに見奉り過ぐさむと、わが身にもかへてこそ念じ
過し侍りつるを、などかむげに見ず知らざむ人のやうにおぼしめしたるにか、むげにさば
かりの事おぼし知るまじき程にもおぼしめさぬをと、過ぎにし方くやしさを、忍びやり
給はで、

神山の椎柴がくれ忍ばばぞゆふをもかくる賀茂のみづがき。さうともおぼし知らむと
こそ思ひ侍りつるを、あさましかりける御心ばへにこそ身もいたづらになりぬべけれ」とて
せさもやらぬ涙に、いとおそろしうわりなしとおぼして、うちなき給へるけはひなどのちか
まさりには、いとさし方行く末のたどりもうせて、「今はかうだに聞えじといく返り思ひ
念じ侍りつれど、物思ふにたましひもあくがる」とは誠にこそ。今はうつし心もなきこゝち
して今更にいとおぼしめしうとまれにけるにこそ。いでや、今はとてもかくても同じさま
にて世に侍るべきにもあらねば、見えぬ山路にももろともにはやとこそ思ひなりにて侍れ」と

さへのたまふに、いとゆゑ、しうおぼしまどはれて、御あせも涙も一つに流れまさりて、た
けき事とはいとかく侘しきめな見せ給うそと、おぼし入りたる御氣色の心苦しきは、神もい
かでおおるかに御覽せられむと見ゆる志るしにや、よさりのおもひのまぬらせに人を参れば、
さすがにつれなくもてなしてなくなく立ちのき給ふ。心ちとめて、はなはた過ぎしはもの^に侍に
もあらざりけり。いとかはかりのこゝちながらは過ぐさむやうもなきに、我ながらなき
めかね給ひて、大津のわうとの心の中をさへぞおぼしやるに、秋の月は程なくこそなきさめ
給へれ。これは御命の限りにさへいけるわが身と、いひがはなる行く末は、なほためしなく
ぞ思ひこがれ給ふ。今片つ方の侘しき床にまどはし給ひし夜のつらさも戀しさも、思へば心
づからのわざとはいひながら、いとさしもおぼしはなれにしも、唯かゝる方につけて物を思
ふべかりけるさきの世の契にこそはと、かの道志ばの露もこのつらに思ひ出づべきにはあ
らねど、見るめなきさには思ひやはかけしなど、物思ひのついでにはなほおぼし出でらるゝ
にや、その扇を取り出で、見給ふも、げにぞ千年のかたみなりけるも中々のもよほしなり。
いづれも限だになき御物思ひはいとくちをししく慰め所だになし。

「我が戀の一かたならず悲しきは逢ふをかぎりのたのみだになし。行くへも知らず」と
よみけむさへらやましうおぼされけり。齋院の御わたりの日になりぬれば、つとめてより
上達部みこ達より始め、世にある限の人参りあつまりていとものさわがし。女ばうなども
ある限り参りつどひたるかたちありさま、さぬの色うち目かさなりもなべてならずめでた

くむれるたるは、いづれとなくあなめでたと見えて、うちわたりの御まじらひの程いかにめでたからましと見えて、くち惜しう見渡さるゝに、御まへにさくららの織物の御どもの、うへ少し匂ひて、裏は色々うちかさねたるうへに、くれなるのうちたる櫻萌黄の細長、山吹の二重織物の小袷などの、所せうものはしげなるをいかなるにか、たをたとわてになまめかしく着なさせ給ひて、人々の参り集まりたるを、御几帳のほころびよりのぞかせ給ひなどする御ありさまかたちなど、なほ世の常の事をこそいへ、誠にゆかしきまで見えさせ給ふを、神もいかゞは見はなち聞えさせ給はむと見れば、まいて大將の御心の中はことわりなり。こゝちもいとあやしう、うつし心もなきやうなれば、起きあがるべくもおぼされぬど、さて臥したらば、たれもさすがによろづをすて、おぼし騒がむむつかしければ、われにもあらず落つる涙をのどひかくしつゝ、ありき給ふ氣色、一乗のかどをだに見捨て、は行きはなれがたき御さまなれど、院は唯いかでもかゝる事見ざらむ所もがなといそがれさせ給へば、みたらし川にみそぎさせ給はむ事をのみ心もとなくおぼさる。時なりて御車寄せつれば、又も見奉るまじき人のやうに限のこゝちを給ひて、あまた立ちかさなりたる御几帳にまぎれよりて、御ぞの裾を引きとめ給へり。いとゞおもくてとみにもえ動かれさせ給はぬに、あやしと見かへらせ給へれば、やがて引かれて心にもあらず近う引き寄せられ給へるに、

「けふやさばかけはなれぬるゆふだすきなどそのかみに別れざりけむ」とて扇をもたけ

給へるに、御手をとらへて泣き給ふさまいみじげなり。「よし御覽せよ。この同じさまにてや世に過し侍りける。とかう見奉りはつるまでと、あながちに念じすぎ侍りつるを、又御覽せられぬやうも侍らむを、この世の思ひ出にもま侍るばかり哀とだにのたまはせよ」とむせ返り給ふを、げにいみじき心まどいと見ゆるを、さりとも今よりはかゝる心も見じとするぞかしとおぼすは、さきさきのやうなる御心さわぎにはあらねど、いとかうけぢかきほどにては、いとゞいひ出でさせ給ふべき言の葉も覺え給はねば、唯いかでかかうとまじき心をやめて、いにしへのやうにへだてなく思ひかはして見聞えばやと、例の神の御志るしを念せさせ給ふに、殿殿の御聲にて「いづら、遅しや。大將はなど見え給はぬ」とのたまはすれば、立ちのき給ふこゝち誠にわれにもあらず、死に果てぬるをとおぼされながら、なほさすがに心づよく御供に参り給ひぬ。例のさはふの事ども思ひやるべし。宮司参りて御はらへ仕うまつりてさかき青やかにさしつるに、いとかうがうしげなるを見るにも、心まどひしてうちやすまむとも覺えず、やがて見えぬ山路へもあくがれなまほしきに、「いづくにか大將のとのる所に常にさふらはれむこそよからめ」など殿のたまはするを聞くにも、かゝる心の中は知り給はであるべきものとおぼしたるこそ、哀いばかりおぼしまどはむとすらむ。限あらむ御命などもいかにと思ひつゞけ給ふには、又引き返しやつしがたし。一方ならず悲しくて心こそ野にも山にも言はれ給ふはいかなるべき御ありさまにか。その後はけふやあすやとのみ、人知れず山のあなたに御心はあくがれて、いづくも心のどかにはおはせず、殿殿にても常

にゐさせ給ひし御かたを見給ふに、ゆかしきまで戀しう悲しくのみおぼさるれば、内にも更に参り寄り給はず、院に参り給ひてもこよなく遠くて、わざとさしいで見えさせ給はむとしもおぼしめしたらす、御几帳引き寄せなどしておはしませば、こよなくおぼしうとみたるなめりと、つらくくちをしき心の中をば神もいかに御らんすらむ。かうのみおぼえはわが身はかばかしからじと、みづからだにことわりにおぼされていと心細し。大宮はそのまゝにおはしましてとみにもえかへらせ給はぬを、殿はさのみもいかはといさなひ聞えさせ給ふを、院はいと心ほそげにおぼしめして、更にゆるし聞えさせ給はぬ程に、唯つねに院がちはおはしませば、上達部殿上人など、唯わけくれ大宮一條わたりを行き返りつゝ、そのわたりものさわがしきまでなりにけり。かゝる御いそぎなどに添へても、母宮などは大将の御ひとすみをおぼしなげかぬ折なし。この頃となりて物思はしげなる御氣色にて、いたくやせ給へるいかなるにかと見驚かせ給ひて、常よりも御祈どもこちたくせさせ給ふ。「かくのみあくがれ給へれば物心ほそくおぼさるらむ。なほさるべからむさまにおとなしう思ひ定め給へ。かくのみ物うがり給ふ程に、いと目やすかりつる事ども、たがひはてぬればわやしきわぢかな」と母宮も聞えてなげかせ給へば、うちほゝゑみて「昔の世にも契りける人の侍らざりけるにこそ。今よりも蓬萊の山も尋ねこゝるみ侍らむ」とのたまへば、「いで常にたはぶれにのみいひなひ給ふこそ見苦しけれ。かばかりになりぬる人の、かうものはかなくたいまひたるやはあるとよ。今はいとこの院の御ありさまの心細さに、ひと所にもあらねば

いとろめたうおぼえ給ふや。三の宮の御事のくち惜しきかはりに前齋院女はいかにおぼすらむ」とのたまへば、「さのみやうのものといはれ奉らむこそ世のおとぎも恥かしう侍るべけれ。あまりにやんごとなからぬ人は侍らなむや」と申し給へば、「げにこそみな心にくき御すぐせどもなりけれ。母宮の御ものいひの、などさしもと聞きしにこそたがひ給はざりけれ。目やすく」などのたまはするにも、若宮の御うつくしきありさまはまづ思ひ出でられ給ひて、さかせ奉りたらばいかばかりおぼさむと、わが御心にもこればかりはくやしう哀におぼされて、戀しく覺えさせ給ふ。折々は常に参り給ひつゝ、見奉り給ふに、日に添へては光るやうにのみなりまさり給ふ。若宮はこよなく見つき給ひてなれむつび給ふに、いと哀にて見奉り給ふたびごとに涙もこぼれぬへきを、あまりなりと人や見むと、まぎらはし給ふもわりなし。めのと達などはなつかしきさまに語らひ給へば、皆たのみ聞えたるさまにぞはのめかし聞えける。かの院にもかくと聞かせ給ひていとうれしうおぼしめしけり。女宮達にもむつまじうおぼしのたまはずべきさまにぞ聞え知らせ給ひける。入道の宮はさかには思ひ聞えさせ給へるを、「秋は外へ渡らせ給ひぬべければいと心苦しう、かくてはいかでおおはしませむ。むかへ奉りて殿にあづけ奉りてむ」とのたまふを、院はなほ「前齋院のひとり心ほそくてのこり給へるに、同じくはさてもやがてものし給はむはめやすかりなむかしとなむおぼしたる」と聞え給へど、世はいと有りがたくのみ覺えまさり給ひて、いかな

らむひまにもと、心ばかりは西の山もとにわくがれば、まいていとしもすぐれて
 とさかざりし御ありさまの、やうやうさかり過ぎ給へらむはさらにもかしからぬに、御うし
 るみたちは、げにさもあらせ奉らばやと思ひよりて、参り給ふたびごとにはもしさやうなる
 事や申させ給ふと、心づかひして待ち渡るに、唯いとすぐよかにて、若宮のやうやうありき
 給ふ美しくしさの、見る度ごとにこの世のものとも見え給はず美しくしさを、これやさばこの世
 のはだしにと、佛などのまおき給へる事にやとおぼし知られて、悲しういみじう覺え給ふ。
 見奉る人々もかゝる御氣色を嬉しくたのもしきものに思ひ聞えたり。かくのみ世の中をか
 りそめにおぼしなからも、げにおぼろげなからぬ御祈のまゐるしなるべし、かくのみものむつ
 かしきをなくさめがてら、弘法大師の御すみか見奉りてなほこの世のがれなば、彌勒の御世
 にだに少し思ふ事なき身とならばやなどおぼし立ちて、さるべき人々のまたしき御供に候
 ふべきよしなど忍びてのたまはず。寺の僧どもに賜はずべき法服ども、あまたまうけさせ給
 ひける。あすばかりと思す日、殿の御前にて「みだれ心ちの例ならず思う給へらるゝを、もし
 さてもやなほり侍ると、かうや、こ川などにまうでむとなむ思ひ給ふ。俄なるやうに候へど、
 あすなど日よろしく侍るなれば忍びてとなむ思ひ侍る」と申し給へば、我々もさのみ例なら
 ぬ御氣色と御覽するに、俄なる御いで立ちはいかにおぼすにかと、御胸さわがせ給ひてまづ
 唯御涙のこぼれ落ちぬるは、いかにおぼしめすにかと心苦しうて、「かねてよりことごとし
 くなり侍らば、殿上人なども我も我もと出でたち侍らむに、世のいそぎになりてもさわか

しくなり侍らむも、所にたがひてむつかしう候ひぬべければ、唯それがしなどまたしき人々
 十人ばかりをぞ聞えさせ給ふ。一よばかりさぶらふべきと聞えさせ給へば、同じ都の内にも
 あらず、大事にこそあんなれ。はかばかしき人もぐせでたちまちにはいかに思ひ立ち給ふぞ
 とて、いとろめたげにはおぼしたれど、又御心より外にとまり給はむをいかに思ひ給
 はむと心苦しければ、えとやめ聞え給はで、さるべき人々のうしろめたかるまじきをぞあま
 たまゐるべきよし仰せられける。きのかみには舟のまうけ、心ことにまうくべきさまなど仰
 せらるれど、かねてさやうの事もみなのためはせてければ、心もとなき事なし。けふになり
 てぞかくとあまた人々きゝて、我も我もといで立ち参らむとさわげど、「俄にはいかでか、こ
 とさらに忍びてなむ、さうじなどせざらむ人はびんなく」などのたまふを、かねて仰せごと
 なかりける事とくちをしがりなげど、これだにいと思はずに人がちにむつかしとおぼせ
 ど、殿のあながちにそへさせ給ふ人々はえとやめ給はざるべし。中務の宮の少將といひしは
 今は三位中將、この頃の殿上人の中には何事にもすぐれて世の人にも知られたる。中宮（堀河殿）
 の御をちの式部卿の宮（北条）の御ゆかりに、この御かたがたにも人よりはむつまじうなれ聞
 え給ひて、大將の御ありさまをもなづさはまほしう思ひ聞えたるなどばかりぞえり捨て給
 はざりける。霜月の十餘日なれば、紅葉も散りはて、山も見所なく、雪かきくらし降りつゝ
 物心細くていと思ふ事つもりぬべし。吉野川のわたり、船いとをかしきさまにてあまたさ
 ふらはせければ、乗り給ひて漕ぎ行くに、岩波高くよせかくれど、汀は氷いたくとちこめて

浅瀬はふねもえ行きやらすまをとしわぶるを見給うて、

「よし野川あさ瀬白波たどりわび渡らぬ中となりしものを」おぼしよそふる事やあ
るらむ。妹背山の近きはなは過ぎがたき御心をくむにや、御船も出で行きやらす。

「わさかへり氷のまたにむせびつゝさもわびさするよし野川かな。うへはつれなく」な
ど口ずさびつゝからうじてみなきり渡るに、かのそののみくづもおぼし出でられて、「唯か
ばかりの深さにだに思ひ入りがたげなるに、いかばかり思ひて」などさし對ひたりしありさ
まの、もの深くなどはなう哀れげなりしを、さしも思ひまづみけむよなどうとまじき方には
おぼされず、唯今見るこゝちし給ひて、涙のこぼるゝをまぎらはして、つら杖をつきてつく
づくと底深くながめ入り給へるまみより始め、御すゝにもてはやされたるかひなつきなど
の、世に人のなべてもたらぬものにもあらねど、めづらしく美しくしげなり。くまなき水の上
はいと光ことに見え給ふ。

「うき舟のたよりに行かむわたつ海のそこと教へよ跡の白波。あはれ」とひとりごち給
ひて「是人命終當生切利天上」とうちわけ給へるは、四方の山の鳥けだものゝ耳たつらむか
しとたふとくいみじきに、三位中將物めである人にて、涙をほろほるとぞこぼしける。まう
でつぎ給へれば、おまへの松山の氣色、谷の下水の流など唯石山とぞ覺ゆる。寺の堂僧すぎ
やうざどもの、よろしきもいやしき程のなどもあまたこもりたり。心ほそげにうち行ひつと
めたるけはひども、何事を思ふらむとうちやましげなり。うちもまどろまれ給はず、夜らぬす

がら行ひあかし給ふも一方にもわらず、心の中はみだれぬべくて、いとかう思ふ事かなふま
じくば、ひたすらこの世を思ひはなるゝまるゝま給へなどおぼし入りつゝ、「薬王汝當知如
是諸人等」といふわたりを心ほそくうちわけつゝよみ給ふに、太山下風さへあらわらしく吹
きまよひつゝ、わが御心中にも心ほそく悲しき事限なし。「我爾時爲現清淨光明身」など心
まかせてよみ流し給へるに、きく限の人々、何事もきく知らぬあやしきすぎやうざまで涙を
流したり。釋迦佛の説き給ひけむその庭にだに笑ひまぎらはしけむだいたゞ、げだうなど
いふらむものだに、今宵の御聲には皆るねうすらむと覺ゆるに、まいて身をついでとある
御誓はたがふべきならねば、みあかしのいとほのかなるに御前のくらがりたるに、ふげんの
御光いとけぎやかに見え給ひて程なく失せ給ひぬる、たふとく悲しともおろかなりや。かう
すむ衆生の御ねがひいとったのもしく、人天涅槃の上大をかいせむ事も疑なく、この世も後
の世も人にはことなりける身ながら、心の中の物思はしさは、人よりけにうちをしかりける
契と思ひ知らる。さらばこれやげに何事も人より少しまきたりけるものに、思はれたりける
かはりならむと我ながら思ひまられ給ふ。いと心も澄み渡りてうちやすまむともおぼさ
れねば、やがてさらいにこまでとほしはて給ふに、御堂の内まづまづとしてのだかななるにお
こなひの聲もやめ、おのおのまよさどもうち忘れつゝさゝ入りたるに曉がたにもなりぬ。せ
んすだらに忍びやかによみ給ひて、時々ねぶり給へる程をうちやすみ給ふと思ふにや、三昧
堂の方にせんす經をぞいみじくかういりたる聲のたふとさにて讀むなる。菩提の院となら

むといふ所、中にも耳とゞまり給ふに、中將いみじく哀がりて、いかやうなる僧ぞと見せにやり給へば、「かためあしき僧のいみじく哀げなるに候ふ」と申せばよびにやらせ給へり。あかつき月夜のさやかなるに紙ぎぬのいとうすきに、まげさといふものをさてうちさらばひたる程、さすがにいとまじげなる程とは見えでわりなく寒げにあはれげなり。中將いみじく哀なりつる御幣をさゝすぐされでなむ「今少しよみ給へ」といへど、「かやうの御まへなごにて聞かせ給ふべくも候はぬものを」といへども忍びやかによみたる、奥の方になるまゝにたふとく哀なり。大將殿はすこし奥のかたに入りて聞き給ふ。ひさうまにの天はいかにしてさしもかたはになりにつむ、何事もさきの世のすぐせなどいふらむ事は誠にや、わが身にはすむぞんじさいだらにといふ御誓たがはぬかしなど、かうあさましきかたはにさへわが御身をおぼしよそへらる。「この御寺に住み給ふか」など問はせ給へば、「かくて百日ばかりと思ひてさふらふなり。親などいふもの昔はさふらひしかど死に侍りしのち、唯かやうにいさよる山の末、鳥の聲も聞えぬ木のうつほなどにて苦のむしろをまき、松の葉をたべて、虎おほかみといふものを友と見ならひて過し候ふ」と聞ゆれば、人々いみじう哀がりて、「さても親はなにとか聞えし。いつまでかかくては」とせめてとはれて、「そちの平中納言といふ人侍りけり。をさなくてかたはものになり侍りにければ、法師になしてひえの山に行ひまておらせむなど申し、程に、うちつゝき筑紫にて親達かくれ侍りてのちは、安樂寺といふ所になむまかりて侍り。いもうと一人めのとなどいふものさふらひしかど、行くへも知らずなり

侍りにしを、ひえの山をがみ奉らむの心深くて、一年なむ長門の守の北のかたははなれぬゆかりとき、侍りて、それにつきて都の方にまうでこしなり。さてなむいもうとなどの事はのぼの承りしに、中々夢のやうに哀なる事どもの侍りしかば、夜をだにわかさで、土佐の室戸といふ所にこの二三年侍りつる」といふに、「さらばこの底の藻屑のゆかりなりけり」といみじう哀にて、大將殿さし出で給ひて近う召し寄せて、「さてその人はいかゞいふ給ひし。こゝにもほのかにき、し人の事なれば耳とゞまりて」などのたまふ御かたちの、いひ知らずきよらに見え給ふを、さる山ぶしのためにもめでたくてうちかきこまりて、「その人とはかりは見給ひしかど、身をいとふ心深くて見給ひしかば、髪などもそぎやつし侍りてなむ」とて人々のきくに残りなくはいはじと、さすがに思ひたる氣色を、我もゆかしういみじ」といひながら、中將のむかひ居たれば、唯いかにもいかにも海にはおちいらすなりにけるなめりとき、給ふに、あさましう嬉しく心安くてあり所は知り給ふらむな、をさなき人やぐしたりしとせめてゆかしうおぼされて、忍びてとひ給へど、「その事は聞えはてず、中々おぼつかなくて別れ候ひにし。年頃よりも哀なる事多くてなむ」とばかりいひけちて、「けだいに候ひぬ」とて立つ。すさかげかくれもなく風とまるべきさまにもあらぬをいと哀と御覽じて、あまた持たせ給へる法服ども、ことごとしきやうなれば、わが着給ひたる白き御ぞのなつかしう着なし給へるうつりが、所せきまでかをりみちたるをぬぎ給ひて、「山おろしむいとあらげなめるをふせぎ給へ」とて賜はすれば、「もの覺えてのち木の葉よりほかに身にもよせ

ならひ侍らねば、「かゝるものは昔の衣にかさね候はむいとかたじけなく侍るべし」とて更に手もふれぬを、なほ「あが君あが君又對面するまでのかたみにも去給へ。世をそむきなむのはいと深くていと年頃になりぬるを、ほだしなどのあながちなるもなきものから、さりぬべき所などなきをおぼろげならず思ひ定むる程に月日のみ過ぎ行くを、さるべきにや、弟子にも去給へと聞えまほしくなむ。されどこの度はうちつけに物さわがしきやうなれば、よろづ心にこめてなむ京にはものし給ひなむや。いつまでかくてはおはすべきぞ」などのたまへば、「都の方は今は見給ふべしと思ひ給へてなむ。残りの日かず今いくばくも候はず。この程過しては竹生島になむ又まばしさふらふべき」といふもいと行くへなきやうにてまどはしてむは中々年頃よりもいみじかるべければ、「さらば唯今まばしそのわたりにもものし給へ。ごやの程すぐしてぞ出で侍るべき。それに聞えさせむ」と語り給ふさまのなつかしさは、げにさばかりなほなほしき心にもえたちやらす。「いでさせ給はむに、かのみ堂の方に尋ねさせ給へ」とていぬる名残も胸ひしげたるやうにて、いとおぼつかなる残りゆかしとも世の常なれば、佛にもこの行くへたしかにきかせ給へとす々おしすり給ふまゝしいかゞとぞ。

狭衣卷第三之上

み山の里のさびしさは、げに男鹿の跡よりほかの通ひ路も稀なりけるを、よるの程にいと

閉ぢかさねてける氷のくさびは、あしもいみじく堪へ難くて歩みもやられ給はず。そこひも知らず深き谷より生ひ出でたる木どもの根の、苔がちにうちものふりたるけしき、枝ざしなどうとましげなるに、苦しうて寄り居させ給へる御顔の色合、けしきなど、山の中にも目といめ奉るものやあらむとゆゝしきまで見え奉り給ふ。

「谷深みたつをだまきはわれなれや思ふ心の朽ちてやみぬる。例の、ことにふれてまづおぼし出でらるゝに、これより山深くも入りなまほしきに、うしろめたくわりなしとおぼしたりし御けしきどもの思ひいでられて、いつしかとおぼすらむに、行くへなくきゝなし給ひて、いかばかりおぼしなげかむと思ひやらるゝ、あらましごとくに、あぢきなくなみだも落ちぬべきに、又うち添へて思はずに、憂しとおぼしたりしをりの御けしきは、おしわけ方の月ならねど、よろづにすぐれてこひしく思ひいでられ給ふに、いと道も見えぬまでかきくらすせ給ふ。

「戀しさもつらさもおなじはだしにてなくなくもなほ歸る山かな」とことごとなき御心のうちながら、からうじてまもやまにわゆみつき給へるにぞ、いつしかと奉らせ給へる御むかへの人々参り集まりたる。さるべき若上達部、殿上人などおくらかさせ給ひてけるうらめしさのかはりに、われもわれもときほひ出で、吉野の川のところもなきまで、心あわたししくなりぬれど、ありし山伏けさ誂ねさせ給へば、もの騒がしくてえあひ給はずなりぬれば、「必ず誂ねて参りあへ」とて道季（保元平家）をとめ給へる。待ち給ふとてやすらひ給ふに、からう

してとひ給ふに、「このごろさぶらひける所もとりはらひて、紙をやらじによべの御ぞをなむかけてさぶらひつる。こもりて侍る僧どもにとひさぶらひつれば、いもうとの月をろわづらひ侍りけるが、かぎりになりたるよし告げにおこせて侍れば、よのあひださぶらばむ、もし死なばのちのあつかひも見ゆづるべき人もなきを、いかすべからむ、よろしげならばやがて歸りなむと申して、夜中にまかりいでにける。そのいき所などは、知りたりと申す人さぶらはす」と申すに、くち惜しなども世のつねなりや、よべなど今少しとはすなりにけむ、曉に召せといひしかば、心やすくて行ひもまきれがまし、人目もいかなど心のどかに思ひしも、悔しくいみじとも世の常の事をこそいへ、いと都の方のものうさもわりなけれど、いでさせ給ひにしのち、「殿はものなどすべて御らんじいれず。夜など露ばかりも御とのごもらでおぼつかながらあかさせ給ひける」と口々語り申しつゝ、とくとくと急がし聞えさすれば、心にもあらずたななし小舟に漕ぎ歸り給ふ程胸の關路はひまなし。笛などもたせたる若き人々ありて、折に合ひたるねふきならしたる、水のうへにてはいとゞおもしろくをかし。又かひの雫のまほどけさも知らず顔に手づから漕ぎ歸りつゝ、聲をかしうて、「あれ妹背の山か。さばれ」とうたひたるさまどもは、おのおのほこりがに思ふ事なげなるは、なほわればかりもの思はしきはなきなめりと、うらやましく思ひわたされ給ふ。

「行き歸り心まどはす妹背山思ひはなる、道を知らばや」三よぐ方のなかりけるも契り心うくながめ入りて、舟のはたに寄りかゝりつゝ、ねぶり給へる御まみのけしきなまめかし

う見え給ふを、もの好ましき若きん達などはめでたうのみ見奉り給ひて、もの心細げなる御けしきをなほいかなる御心のうちにかと、安の河原の千鳥にも問はまほしかりける。殿にはゆゝしきまでこひ聞えさせ給ひければ、うち見つけ奉らせ給へる嬉しさの限なきにも、とゞめがたげなる涙のけしきも見奉らせ給ふに、たはぶれにもわが思ひよるすぢはあるまじきかなとおぼし知るべし。雪やけに足もはれてなやましうおぼさるれば、ゆでつくりひなどしてあるきなども玄給はず。けざやかなりしほとけの御ちぎりのおもかけ、戀しく思ひ出でられ給ふにも、なほいかでこの世をさまあしからぬやうにていとひはなれなむと、心のうちばかりは、ありしよりけにあくがれまさりて、行ひに心を入れ給へれど、齋院三ばかりにはおぼつかなき程にもなし給はず。さるはへだてなく見奉る事さへありがたくなりたれば、この世のいとほしさもよほされ給ふなるべし。

「思ひ侘びつひにこの世は捨てつとも逢はぬ歎は身をもはなれと三。あな心うや。この心ながらは、後の世もいかゞとうしろめたし。さてもあはれなりしあしせんをさへまどはしてしくちをしさも思ひやるかたなきまゝに、かへりきてやある」と粉川に人たびたびつかはせど「無し」とのみ言ひつゝ、歸り参れば、いもうとのはかなくなりけるにやとおぼすも、なかなかなるいなぶちの漣なり。

「ありなしのたまの行くへに惑はさで夢にも告げよありしまぼろし三。池の玉藻と見なし給ひけむみかどの思ひも、中々目のまへにいふかひなくて、忘草もやうやう玄げさまさり

けむを、さればさまさま夢うつ、とも定めがたう心をのみうごかし給ふ。げにいかなる昔の契にかとぞおぼし知らる。さらばありし曉そのゆふべにや消え果てにけむとおぼせば、誰ともなけれど、その程よりむつまじうおぼす僧どもにいひつけ給ひて、七日七日までとぶらひをぞいみじう忍びてせさせ給ひける。いかなるにてもこの忍草のありなしをだにきくわさもがなと、御心に離る、折もなし。まこと齋宮齋宮はつかさへ渡り給ひしかば、若宮若宮はいと人少なにもさびしうてもものし給ふを、大將は心苦しく思ひ聞え給へど、前齋院前齋院のひとりずみの心ぼそきにより、嵯峨の院の「なほさながら思ひうしろみ給へ」とのたまはすれば、大殿へもえわたし聞え給はで、常にみづから渡り給ふ。よるなどもとまり給ふよなよなおほかり。若宮若宮もみつき聞えさせ給ひていみじう惑はし聞え給ふを、いかでかはおろかには思ひ聞えさせ給はむ。やうやう住吉の里にもなりぬべかめり。いづれもこの女宮達をばいもうとのやうにあつかひ聞えさせ給ふにも、入道の宮入道の宮のいとひすて給ひしつらさも飽かずくち惜しうおぼしけり。ありし雪の夜の枕のしづくけ忘れがたう悲しう思ひいで給へる。今はいかやうにかおぼしめしなりたるともいかさまにしてか、今一たびけぢかきほどの御けはひを聞くわさもがなと思ひ詫びては、中納言のすけをのみぞうらみ給へど、かひなきよしのみ聞ゆればいと心うし。夢のやうなりしよなよな、なき給ふよりほかの御けはひは聞かやみき。一くだりの御返しなどはた見すべきものとも思ひたらざりしも、わが心のあながちに盡しそめてしかたよりほかには、なげきのもとに枝さし添へじとせちに思ひは

なれし折こそこれをまひてうらめしかるべきものとも思はざりしか。よろづにとり所なく悔しき事のみつきせぬまゝに、今さらには日に二たび三たび、藻鹽草かきつめつ、うらみ聞え給ふさま、あまの濱屋に餘りぬべし。されど見るべきものともおぼしたらずとのみさくは、過ぎぬるかたのむくいにやとつらく心憂し。かぎりなき御身のほど、いひながら、わが身はなどてさばかりのわはれをもかけられ奉るまじきぞと、淺からぬ御ちぎりのほどもおぼし知るまじくやはと心うければ、をがみわたすにてもやみぬべけれど、月日の過ぐるまゝにめづらしきさまにおよすけ給ふ若宮の御さまを、さすがによそのものと見なし給はず。かく契深くてわがものにわづかり給へるを、などはいかでかは世の常におぼしなむ。これよりほかのうき世の慰めはあるまじかりける身にこそと思ひ知られ給ふ。哀も悔しさも世の常ならず。大殿大殿も常にわたり給ひつ、見奉りうつくしみ聞え給ふさまはおろかならぬにつけても、ありのまゝに聞え給は、いかにとやおぼさる。宮の荒れたるところどころつくるはせなどせさせ給ひて、さるべきけいしなど別ちなさせ給ひつ、古宮にさぶらひし人々、かたへは嵯峨の院の齋宮齋宮などに別れにし。のこりはさながらさびしからぬさまにしてさぶらはせ給ふ。雪降りても心ぼそげなる夕つ方、大將殿内より出で給ふまゝに、いかにもの心ぼそげなる故郷故郷にをさなき人語、何心なくまぎれ給ふらむと思ひやらせ給へば、そなたさまにものし給へるにおぼしやりつるもまゝ、山里のこゝちして人目も稀なるに、若宮の御めのとだちばかり、はしつ方にうちながめける程なり。今どひさかへされたるおましど

もなほしなどして、うちとけたる姿どもをかたはらいたげに思ひたるもをかし。若宮は寢起きてむつかり給ひけるに、かくわたり給ひければ喜びてむつれ聞え給ふ。いみじうわはれに「参らざらましかばいかにくちをしからまし」とてうち涙ぐみ給へるけしきなどなほざりの心ざしとは見えす、いみじうわはれと思ひ給へるを、見奉るめのとたちなどはかゝる人もなし給はざらましかば、かぎりなき宮仕へといふともこのころはいかに心ほそく、よるかたなきこゝちせましと、殿の御心ざしをうれしと思ひけり。見えさせ給はぬほどはつれづれげにおぼして、いみじう戀ひ聞え給へるこそ心苦しう、「院のさばかりおろかならず思ひ聞えさせ給ふをばおぢ奉らせ給ひて」など聞ゆれば、「院の御心ざしに劣るべくも侍らぬものを、なほをさなき人は中々おとなびさせ給ふまゝに、おぼしめし知るにこそ」などのたまひて、はしつかたなるおましにうち臥し給へれば、若宮も御ふところにいり給ひて、何とはかばかしうも聞えぬ事を聞えたはぶれ給ふ。御あはひいとかならぬちをならば、かたはらいたくやわらましと見えさせ給へり。白きからの御どどもの、なべてならぬに、同じさまなるくれなゐのかさなりたるつねの事ぞかし。されど夕ばえにやなべてならずめでたく見ゆ。霞のいとおどろおどろしうふりたるに、おぢ給ひてきぬを引きかづきて身に響かひつき給へる、いみじうらうたくおぼえ給へば、「参らざらましかばたがふところにか入らせ給はまし。かくおそろしき雨もふらぬ。おとゝなどして常にもろとも侍る所にいでたまひぬ」とのたまへば、うちうなづきて、「おとゝはよしな。嵯峨の院こそかしらはさうらうとしておそろしげな

れ」とまづおとしめ聞えさせ給ふぞをかしきや。「姫君も髪は短くてにくげにぞおはしますらむ」などのたまへば、かしらうちふりて「いな、されどそれはよきぞ」とのたまふ。をさなき御目にもさぞ見え給ふらむかし。なかなかさまかはりて、いとゝいかに美しくしげにおはすらむかしとおしはからるゝも、罪深うおぼえながら、なほゆかしきにぞ胸うち騒ぎてものおはれなれば、枕がみなる笛を取りて吹きすさびつゝ、「宮中の」とくおよすけさせ給へかし。をしへ奉らむ、いかにうつくしう吹き給はむ」とのたまへば、ふと起き出で給ひてさかさまに取立て、うつくしき御口にあて、笛のねのやうに聲を細く出して、「さておのが吹くに似たるは」とのたまへば、いひ知らずうつくしうおぼえ給ふにも、つれなく思ひ捨て、知らぬ顔に見はなち給へる御心のうちは、なほわがあやまちといひながら涙こぼれぬ。

「うさふしはさもこそあらめぬに立つるこの笛竹は悲しからずや。さてもいかやうにかおぼしたらむと御心のうちもゆかしく、悲しきなぐさめにはふところ引き入れ奉りたるも、いとつめたき御身なりの美しくしさなどの、唯かやうにこそと思ひいでられて、いみじう悲しきにも、げにおろかなるべきかたみにはあらざりけり。目さしなる御ぐしをせちにかきやりつゝ、遊びむつれ給ふにぞ憂き涙はこぼれながらうち笑はれなどし給ふ。視引きよせて手習などし給ふに、御との油まゐるまで、ふところよりいせ給はで、火近く取りよせ奉り給ふに、やがて晝の空の景色よりはじめて、まつらひありさまなどもたがはで、わが一日ながめ暮したるさまなどを、思ふところなく繪に書き給ひて若宮の笛吹き給へるかたはらに、

ありつる御ひとりごともかきつけ給ひて、

「ちりつる古き枕をかたみとて見るも悲しきとこのうへかな」涙とてなき給へるところもあり。嵯峨の院へ奉り給ふ。内侍さぶらふ頃なればなるべし。若宮の御かたさまにつけて、今はいづかたにもうとうとしからず聞えかはし給へど、なかなか入道の宮にはなほ聞え給はぬを、院内侍は、「御返りなど時々は人づてならでのたまはせよ。かゝるかたさまにつけても、この人をなむたが御ためにも頼む」など常に聞えさせ給ひけり。宮は念ず堂におはしまずに、例のもて参りてひろげて参らせたるを、たがどと目とめさせ給へるに御心得させ給へるにや、御顔の色うつろひまさらせ給ひて御經にまぎらかさせ給へるさまなど、明暮ゆかしがり聞えさせ給ふめる人に見せ奉らまほしきに、いでや、過ぎぬる方のあやしく思はずなりしぞかし、何事のさはあるべきぞと思ひつゝくる。かうのみつめる御文の數もさだかに御覽じつゝけねば、なかなか何とも知らせ給はぬに、床の上のかたみ若宮などは残りなうき、あらはし給ひてけりとおぼすに、なべての人も皆かくのみこそはあらめ、されどよその人は何しにかはかうもいひ聞かせむ、中納言などもそのをりは知らぬとこそは思ひしかなどおぼすに、そのをりの御心まどひにおとらず恥かしういみじきにも、身一つにだにあらすあながちなりし御心がまへのほどを、院も聞かせ給ふやうもあらむかしと、こと人よりも御心のうちはいといとはしう、この世もかの世も唯憂き身一つのゆかりに、やつれ給ひぬるぞかしとおぼしやらるゝ御心のうちなどは、長らふるもあさましくのみぞおぼし知られながら、

げにかう死にせぬためしもありけるを、こよなかりける御心の深さかなとうらやましう、なきかげの見給ふらむもつきせず恥かしうぞおぼされける。

「憂き事も絶えぬ命もありし世にまた長らふる身をいかにせむ」涙などおぼしつゝくれば、今はいみじき事をつくし給ふともつらさをあらぬにはなしがたげなり。今はなほかやらの事もいとゝかたはなるを、見ぬわざもがなと、あらぬところのなきもわれがしうおぼし亂れながらも、ことに出で、こそなたまはせぬど、いと苦しき御けしきを見ればいかゞは聞えむ。常よりは御覽じつとばかりなる返事を、憂きものにおぼしえめられにけるわが心のうらめしさを、今はいかゞはせむともえおぼしえづめず、若宮の御うつくしさのなめならずおよすけ給ふ事、くやしう悲しうおぼさるべし。まことかのおほい殿内侍の御方にかしづかれ給ふいませ姫君は、甘にもやゝあまり給ふまゝに、いとをかしげにねびまさり給ふを、母上う八殿内侍とはなやかに物好みし給ふ御本性にて、齋宮の御有様を見奉り給ふもうらやましう、行く末の心ほそさも年月に添へておぼし知らるれば、この君をかうまで取り寄せつとならば、おなじくば人なみなみにもてなして、かくさまさまにもてかしづき給ふ御方々のくさはひにもせむかしなど、せちに人におとらじの御心おきてにて、内参りの事などおぼしよりにけり。殿内侍にもかくなど聞き給へば、まことの御子ともおぼされねど、げにこの御ためにはさあらずともおなじことなればなどはさもありぬべうはあしかるべき事ならねど、母上は内二殿一にも御らんせしものを、いでや、御心のうちもいとほしうやあらむ、あながちなる事とや世

の人もいひもどかむなど思すをばざるものにて、時を見給ふに、「いかにぞや、さやうの御ま
 じらひまではおぼしかくべうこそあらざめれ。なかなかなる事などもあらばたいなるより
 はかたはらいたうこそは侍らめ。唯大將だにたひりかにて侍らば、おのづからたが御行く末
 にも仕うまつりてむ。おなじ御心におぼし頼みてをものし給へ」と聞え給へば、唯ひとり
 御ゆかりよりほかに、おぼしあつかはじとこそはあらめなどうらめしうおぼされて、「さ
 さいの宮内と聞えさせしは尼にならせ給ひて女院とこそ聞えさせ給へ。御はらからと
 中にもいとねんぞるなる御中なれば、いかなる事なりとも御心に任せぬやうはあるまじけ
 れば、この人の事をかくなむ思ひ侍る。おと、鼓のゆかりにはなかなかかうしも思ひあつか
 ふまじけれども、年のつもるまゝには世の中も心ばそきをおなじうはとなむ思ひ給ふる。た
 ちまちのつれづれのまされにも、さまざまうらやましきなきさめに」など聞えさせ給ひけれ
 ば、内膳の渡らせ給へるついでに、まかじかなむと奏させ給ひける。「齋院の御ことのい
 とくち惜しうなりにしを、かごとばかりもそのゆかりはうれしかるべけれど、かのおと、
 のさも思ひ寄りざらむはいかなるにか」などばかりぞ聞えさせ給ひける。御心のうちにはお
 とのおぼしやりしもあるく、ぬぢけがましきおひいでなどを、いとめやすき事ともいそぎ
 おぼしめされざりけり。かやうの御けしきと御らんじ知るもいとほしければ、「故院の御
 事ののちはよろづものをのみおぼしめして、かやうの事を唯今はもの憂げになむ。なほおと
 の奏し給はむぞよかるべき」などぞのたまはせけるを、「殊更におとのかたざまなら

でもと思ひ侍るなる御心にこそ侍らめ」など度々聞えさせ給ひけれど、いと苦しう覺えさせ
 給ひて例のわたらせ給ふるに、「今おと、の氣色見てこそは思ふかたことにもあらむを、
 進み出で、はしたなうや」などのたまはせて、御心にも入らぬ事と御らんずれど、かくうら
 み聞え給へば、唯おぼし立つべきさまにぞ聞えさせ給ひける。いたうおし立ちものはなやか
 なる御心にて、少しは御心ゆかぬ事なりとも、女院もかくおぼしはなたぬゆかりにもあり、
 わがもてなしかしづきてさぶらはせば、えおろかにもおぼしを、おと、もさのたまふと
 も、いづれの御事にもえおぼしおとさじと思ひ立ち給ひて、殿にもいたう聞え合せ給は
 ず、御心一つにいそぎ立ちて二月ばかりにとおぼしけり。つれづれなる晝つ方、大將殿のな
 り給ふべく聞え給へれば、参り給へり。をさなくよりいづれの御方にもへだてなう殿のな
 らはし聞え給ひつれば、女房なども見え奉らぬはなき中にも、この御かたはみづからもわら
 かにあいぎやうづき給へる御心さまにて、わざとへだて奉り給ふこともなかりけり。くれ
 なるのきぬどもあまたがうへに、櫻のかた紋なるを着給へる御かたち、はなばなと清げにて
 見るかひある御もてなし有様なり。「年のつもり侍るまゝには世の中もいと心ばそくのみ侍
 るにも、後の世のためまでも頼み聞えさせてこそ、中宮の御かたには明暮へだてなくも
 のせさせ給ふなれど、こなたにはいと戀しき程にのみなさせ給へば、思ひ侘びて聞えさせつ
 るなり。この世はげにかうても過ぎ侍りぬべし。後の世のためを思ひ侍るにもいとくち惜し
 うのみ侍れば、この姫君の御有様をいかになど思ふ事侍りしかど、同じ心に思ひあつか

ふ人なきことはかなふまじげに侍りしを、女院に、内^庭の度々聞えさせ給ひければ、いかに
もかの御ことをいなび聞えさせむがたけなさに、いかにせましと思ひ侍るめれど、いざ
や、今はいとほけぼけしうなり給ひにける。人ばかり頼みてはいかゝなど、心一つなるやう
に侍るを聞えさせむとてなむ。内わたりの御有様などは、さりともえ御覽じ放たじとなむ頼
み聞えて」などのたまへば、いづれの御事も思ひわき聞えさせ侍らねど、何となう身のい
そがしう侍る程にをこたり侍るにこそ、中宮の御方などには、おなじも、まきにておのづか
らおぼつかかなからぬこゝちし侍るを、げにさやうにておはしまさばおなじことにこそは、か
かりける御いそぎをも承らざりけることなど聞え給ふ。「今やうの人はをさなうよりあるべ
かしうこそあれ。これ^ははいかなるにか。あまり心もとなき御有様なめるぞ。さやうの御ま
じらひにはかひなきさまにやと見え侍るを、さるべき事などをしへ聞えむ人もがなと、いひ
しを聞きてこの御うしろ見の琵琶を、をかしう弾く人ありとてこの頃習はし聞ゆるを、おな
じくばいかでまことしく人の聞かせ給ふばかりもとこそ思ひ侍れ。この頃ばかり御いとま
のひまひまに、このひがごとくも、なほさせ給ひてむや」と聞え給へば、「人の師などすばか
りにては、なほさるばかりのひがごとくにはよも侍らじものを」とてうち笑ひ給へるあいぎや
うこぼるなどはこれをいふにやと見えたるを、うちまもり給ひて「何事も御有様ばかりはい
とありがたうこそ。などで唯世のつねのさまにてもかやうの人をひとりまうけ侍らずなり
にけむ。若かりし程はかうしも覺え侍らざりしに、今こそいと心うく侍れば、かくあながち

なる事をも思ひ立ち侍るぞや」などのたまふ。淺緑なる空の景色いといみじう霞みわたたりた
るに、こぼれて匂ふ御まへの花櫻常よりもおもしろう見わたさるゝに、いともよほされて
もの、ねもはえぬべき程なめるを、「渡り給ひて少しもまゝならし給へか」と聞えよ」との
たまふに、かばかりまでおぼし立ちにけるはげにめやすきほどの御有様にこそはなり給ひ
けれ。げにさまさまのもの思ひに、心も盡き果てゝにくからざりし風のみよひの、後もえけ
しき見ぬぞかしたなまゆかしければ、やがてかの御かたに參り侍らむとて立ち給ひぬ。例の
みすのもとにて、「人や侍らひ給ふ」とおとなひ給へば、かの聲ばかりにて「内にこそ」といふ
まゝに走りて隠るゝおとす。うへ^への御おきてなめりと聞き給へば、みすを引きあげてのぞ
き給へるに、人々あまたありけるが走りかさなりて、きぬの裾をおのおの踏まへつゝ、すぎす
ぎにたふれふしたるは、まきの馬の心ちぞしたる。几帳などもたふれなどしていと、いもの騒
がしければ、つくづくと見入れてとみにも入り給はぬに、姫君^もはしつ方におはしけるな
るべし。今ぞ立ちて入り給ふ。色々のきぬどもに濃きうちたる櫻の小袷着給へるうしろでい
とをかしげなり。髪は少し色にてこちたうはあらずさばらかなるさがりばなど、あてやかに
なまめかしきさまにて、小袷とひとしうを見ゆる。うち見かへりて顔いと赤うなりながらと
みにもぬす、あきれたる顔さるかたに美しくしげなるさまぞし給へる。さはいへどおもりかな
らぬならひの立ち走りやすなるにこそはと、この身のはどにてはそれを罪とも見なされ給
はざりけり。からうじて母屋の柱のつらにぬ給ひぬれど、扇などの行くへも知り給はず唯う

ちふし給へる髪のかゝりつらつきなど、少しけぢかくては、今少し目とまらぬにしもあらず。「うとうとしくのみおぼしたるがつゝまじさに、常にもえ参らぬを、又おろかなるにやおぼしなすらむと、心ときめきばかりは絶え侍らず」など聞え給ふを、いふべき事もおぼえず恥かしげに汗のみ流れてわびしきに、始めおはしそめたりしに人々、いらへおそく聞えたりとて、母老るがはらだちの、しりて人々をばしたなくいひしをおほしいづるに、又いかにいはれむとおぼすに身もわなゝかれて、いと更にものいひ出づべうもなければ、かの母、よみがけたりし歌をこそは母うへ唄き、てほめ給ひしかど、されされ思ひ出で、いたうおびれぞどけなき聲にて、「吉野川何かは渡る」とひともじもたがへすいひ出で給へるを、げに人の忘れぬふしやよみ出でたりけむとき、給ふも、これれより後、よきもあしきもあまた見聞くを、さしも御心にも耳にもとまらぬを、いつぞやかゝることの聞え侍しとおほしいでたるはをかしきに、その折のいらへは又いかゝありけむと忘れにけるぞいとくち惜しきや。は、笑み給へるけしきはひ知らず恥かしげにて、

「吉野川かへすがへすも渡れとや渡るより又渡れとや瀬に入。入り立つもことに咎め顔ならざめるは心やすけれど、ひとわたりも心おとりぞま給ひぬる。母老るつばねなるにかくなむと人のつげれば、急ぎのぼりて姫君の給へるうしろの方の几帳おろしたる所に居たり。さなめりと見給ひて、「いづら、琵琶承はれとうへ唄のたまはせつるは」とのたまへば、いでや、人のなべて聞き知らせ給ふべくも侍らぬすぢことにこそ侍るめれと、いみじうまた

り顔なるけしきことにて、琵琶をとりよせて姫君に奉るまゝに、「まづ猿をつなげ」とさゝめくしも、例のあらはにぞ聞ゆる。教へられていとまどけなうゆるとぞつなぎ給ふ。又さし寄りて、「その次にはかなでをかなでを」とひちしてつくめれば、「いたち笛吹く、さるかなづ」とひき給ふを、母老るいとおもしろうめでたう思ふに、え堪へず心もすみ立ちて、末に待ち取りて扇うちならして、「いなごまろは拍子打つ。きりぎりすは」などはそめ明けてくびすぢ引き立て、たれれかへりたれれかへりひく。そばがほのみすに透きて見ゆるは、をかしなども世の常の事をこそいへ。明暮ものむつかしき心のうちけふぞ皆忘れぬるに、思ふまゝにもふしまるび、え笑はず念するぞいと侘しかりける。ふたかへりばかりひき給ふにいとわりなき聲をおとしわけ、まやうがするにはやされてかき返し、おなじいなごまろにて時もやゝかはるは、いとすべなきまでおぼえ給ふ。御うしろのいとさかしくかたはらいたきさましたるもてなしに、よからずあやしき若きものどもの集まりて、人にうちはやりありつかぬなめり。みづからの御ありさまも唯おびれて、うちさとび給へるにこそはなど世の常に思ひつるを、いとことのはかにおはしけるかな、又これを内に参らせむなどまで思し寄りつらむ。うへ唄の御心を今少しあさましきや。年頃もいかにぞやある御心とは見つれど、あまりかど過ぎて何事も出て、好まじき所などは、すゝみ給へると見つるはそらごとこそありけれ。かうまで心おくれ、思ひやりなきわざ出で給ふべしとは思はざりけるわが心さへ、くち惜しきまで思ひ知られ給ひぬる。あな恥かしや、見るに唯國王とてあざやか

はそばそばしうもおはしますず、さばかりなまめかしう恥かしげなる御ありさまに、このわたりよりとて御らんせられ給へむよ、げにひとへにはおほしめすへきにもあらねど、おとゝなどの見る見るいだしたてけむよとおほしめされ給はむ、いと名だ、しう愛き事にこそはわらめなどおぼすに、いかさまにてかこの事けふあすのほどにと、むるわざもがなと、あぢきなきもの歎きさへ添ひぬるこゝちし給ひてけり。まことにうへ壙の御心もとよりこまやかに、人のありさまなど知り給ふ事もなく、唯ひとへに人におとらじの御心はなやかにおはして、女院の御方さまもたのもしきを、中宮の御ありさまにや、立ちまざりてもてなしかしづきて、われもいでり見あつかはむとおほし立ちてしかば、少々のかたはなる事も見とがめられ給はぬなるべし。時々うちわたり見奉り給ふには、唯いとおれおれしうものつゝましげなるさまにてる給へるかたちなどは美しくしけれど、うちうちのかたくなしき御有様など見咎め給はぬなるべし。けしからずこわだかになどやうに見え給は、かうしもえおほし立たじを、もとよりいとふかひなきやうにおはせしを、いと母うへにおくれ給ひて程もなく知らぬ人の御あたりにおりつかず、引き別れてはなばなともてかしづかれ給ふに、われかのこゝちもせずはれ感ひ給へるに、この御うしる見さへ心にまかせて、いと荒々しうせめおどし聞ゆれば、いみじうおぢまざりて、うつし心もなきやうに月日に添へてなり給ふなめり。持ち給へりける扇のうち置かれたるが、手習ひせられたるは手づからのまわびにやとゆかしうて、取り見給へばまだはかばかしうも續かぬもじもの、いとをさなくあさましきさ

まなるは何と見とくべうもわらぬを、せちにまもれば「あめつちを袋に縫ひて」とあるは、母まろが習はし聞えたる祝ひごとなめりと見ゆるに、繪に、苗代し、あらたうちなどまたるところ、母もなくめのともなくて、「春のあら田をうち返しうち返し、返す返すも物をこそ思へ」とあめり。又「柳櫻をより合せうせざめれば、亂れぬめり」とあるは歌にやとてせちによみ續くれど、一つにはあまり二つにはよらぬをあやしとおぼせば、さすがに繪の心ともなめりと見ゆるにぞ、さはわがよみ出で給へるなりけり。三十一字とだに知り給はで何しにかは、扇の繪の歌よまむとはおほし寄るらむとをかしきに、かきさまさへうらうへかみしもひとしうて、一つに足らぬ歌を、やがて扇のひまもなく書きなされたるもじやう、えり深うわけ置かれたるなど、すべてかゝるはまた見ざりつるを、さまかはりてうちおき難うぞおぼされける。母まろうち見おこせて、「さらさらしく遊ばしつべう侍るめり。今やうの手はさうがちに濃く薄き墨つき、まぎらはしてうちよろほひて侍りつる。これはつよきもじづかひ昔やうに侍る。さは見知らせ給へりや」といふにぞ堪へてうち笑はせ給ひぬる。「さやうの事もはかばかしう見し侍らねど、げにかくこそは」とわが御心の程見えて習はし聞えさせ給ひければ、「琵琶もなほせ」などうへ壙のたまはせつるを、「なかなかゆがみぬべうぞ侍りける」とのたまへば、「いでや、さまでこととさうはいかでか」とてうち笑ふけしき、いとまたり顔に心つきなしも世の常なりと思ふに、「まことや思ひかけぬ人の御文をもちて侍りしか」などいへば、「おぼろげにては散らさぬものを、世に侍らじ」とのたまへば、「げに

世の常の御事とは見え侍らざりきと思はせて心だつがにくければ、そらごとしける人なり。さやうの事はまだならはず」など殊の外にのたまふを、いと高らかにうち笑ひて「けん晝間はなほぞ戀しき。などやさしたちたる、心つきなきぞ堪へ難けれど、まいてさまではいつ習ひにける戀の道にかは。なほたしかにのたまへ」とあるにぞ「大宮のわたりにて御秣がくれせさせ給はざりきや。よろづおしはからる、御口ぎよさかな。いとよう知りて侍るものを」といふにぞ耳とままりて何となう胸騒ぎて、「更に覺えぬぞとよ。たしかに唯のたまへ。何のたよりぞ」と今少し近づき給へば、「いで、さらばこそこの外にのたまはせつれども」とて「この御前の御母、故平中納言のいもうとにはおはせずや。その御姉は女院に中納言とてさぶらひ給ひしを、長門の前司何がしのおそんにぬすまれ給へりしぞかし。守清うせ侍りにし後、尼になりて常磐といふ所にぞ侍る。中納言のむすめ御は、めのとのもとに心ほそげにてなむときかせ給ひてめし、かど、めのと心かしこささまにもてなむとて、參らせざりし程に、御らんするやうも侍りけるとかや。前の別當左兵衛督の少將となむなのらせ給ひけるを、さやうのなまきん達のかげめてやくなして、三河の守何がしにつけて筑紫へ出し立て、侍りける。女はほいなきものに思ひ歎きて、海の底にも入りなむとて逃げて侍りけるを、かの長門の尼君御のふいに尋ね取りて常磐におきたり。明暮ものを思ひ歎きて尼になりて侍りけれど、さいつ頃つひになくこそはなり侍りにけれ。かたちなどは御覽じけむな。さばかりなるはおのづからもや侍らむ。唯人さまなどこそあやしきまで有り難うをかし

きまで見え給ひしか」などいふは、いかなる夢語りぞと心もことに騒げど、「今さらにもこそおぼえぬ。聞きたがへ給ひつる事ならむ」とてこまやかに語りふべき人さまにもあらねば、唯かの常磐といふ所を尋ねむとおぼして立ち給ひぬ。世にありとさくとも今はその人をとかく思ひ尋ねむも、いとねぢけがましきをひたすらなくなりけむは、なかなか心やすくめやすきに、唯かのまのぶ草の行くへのいみじうさかほしきにより、いと御こ、ちも静かならで、道季をよび給ひてよろづにぞ語り給ふ。所の程などはいとまゑるかりければ、たそがれ時の程にいと忍びて京を出で給うて、ならびの岡のわたりにてぞ馬に乗り給ひて、かばかりの程ながら、こゝらの年頃おぼつかなくてすぢけるもあさましくいみじきに、ありありてなき跡をしもたれにおひ見るべきにかとおぼすは、くち惜しう悲しとも世の常なり。月もおそく出で、空も霞み渡りたれば、雲のた、すまひだにはかばかしうも見えず、道の空もたどたどしう、ならはぬ御こ、ちにいと心細くわりなし。

「なき人のけぶりはそれと見えねどもなべて雲居の睦まじきかな」云。霞まむ空を見るべきものとは思はず、程なくありありてたち昇りけむむなき空は、恨めしさも悲しさもさまざまに中々なるこ、ちしぬべけれど、跡の白波をだにゆかしがり給ひしかば、まして横柱のよすがもいかでかはととおおぼすなるべし。近うなるまゝに、風につきて念佛の聲々ほのかに聞ゆるは、その人の名残にこそはとき、つけ給へる。かの底のみくづとかきつけたりし扇見つけ給へりしに、つきはてぬとおぼされし涙も残りあるこ、ちぞま給ふや。おはしつきた

れば、かどなどもなくて唯釘ぬきといふものをぞまたりける。道季を入れてもしありし山ぶしやあると尋ねさせ給へば、まばしありて」とく唯入らせ給へ」とあれば、まるべするまゝに入り給へり。少しはなれたる所の、かみさうじなどばかりにて、あらあらしきかりそめの居どころと見えたり。おまし敷きなどけいめいし騒々姿、見たまひしよりは少し例の人に似たり。夢のやうなりし對面の後、よろづに尋ね聞えしかば、行くへなうまどはし給ひてしかど、おぼろげならぬ志の程には、げにこそは山のまげりもさはるところなきわざに侍りけれ。今朝思ひかけずこのわたりにや通ひ給ふらむといふ人の侍りつれば、喜びながらなむ。この世とのみは契り聞えざりしを、心憂く「なとうらみ給へば、「聞えさせしいもうとのわづらひ侍りける、限になりて侍りける。今ひと度逢ひ見むとせうそくせさせてさふらひしを、必ずあひとぶらはむと思ひ給ひてまかり出でし程に、あないも取り申さでなむ。つひに亡くなり侍りしかば念佛もまどゝろに仕うまつりて、後の世のとぶらひをだにと思ひ給うて、かく籠り侍るもあすなむ四十九日になり侍る」といふをき、給ふに、涙とりあへずこぼれ給ひぬ。粉川にて思ひかけざりし御物語の残をこまかに承らまほしかりしかど、よからぬ事どもをなべての人にも聞かせじと思ふ給ひし程に、あさましうなかなかなりつる心のうちを、又今宵つひにかひなく聞きなし侍るも、唯さばかりにてこそやみ侍りぬべかりけれ」とておしあて給ひつる袖の雫、おろかならず見奉るに思ひかけぬ心ちする。さるやうこそはあらめと思ふに、かうまで尋ねられ奉るべかりけるにては、げにくち惜しうもありける命の程かなと、さ

る山伏のこゝちにも今ぞいとくち惜しく悲しかりける。「都の内はまたかへり見るべきものとも思ひ給へざりしに、この人のをほりにあふべき契や侍りけむ。こなにがしのあそん（音）の女房（音）のまかりのぼりしに、せちにいざなひ侍りてしかば、かゝるついでに比叡の山拜み奉らむの心ざしにて、まかりのぼりし道に思ひかけず見つけて侍りしありさまなど、取り申すもいとけうとき心ばへの程ときかせ給ひぬべけれど、ひたすら身をなきものになし侍らむと思ひ入り侍りし海の底をもさまたげて、この山里に尼になりて過ごさせ侍りつるを、こゝかしこす行の程に委しきありさまも承らざりし。いみじうものをのみ思ひ侍りつれば、やまひのつきてつひにかくなりぬ」といふさまいとすくすくしうて、委しき有様など問ふべきさまにもあらねば、「さてその筑前の尼君はこゝにか」と問ひ給へば、「まか侍る、明暮戀ひ歎きていとほれぼれしきさまにぞなりて侍れど、彼に何事も仰せ給へ」とて「かくとあない傳へ侍らむ」とて立ちぬ。佛すゑ奉りたる方におましなどひきつぐろひてぞ對面したる。げに年經にけるけはひしるけれど、故なきさまにはあらで思ひ給へかけぬまほろしにやと、いと亂り心ちにも静め難うとうちわななく。「たまのありかはこゝにこそ尋ね参り來つれ。こまかならむ御物語に少しもや慰むと試みまほしう」などうち始め、この年頃さまさまに思ひ慰む世なう歎き過ごしつる有様などを、おびたしからぬものから、少しづつもらしいで給へるけしきなど、いと忍び難げにせきやり給はぬを、さらばこの御心にいとかうこそおぼされ給へりけれ。げに海の底に思ひ入りてもなほあまりあるわざかなと聞くまゝに、短かり

ける命の程、今しもぞいと悲しくち惜しかりける。ましてさぐ人はまほるばかりになり
にけり。「さてもそのをさなかりけむ人は侍るや」とのたまふに、さまさまにかひなく聞えむ
もいとほしければ、「わが君やすべて聞えさせむかたこそ侍らぬ。かゝりける御事を露ばか
り知り侍らましかば、限ある命をこそえとめ侍らざらめ。このたまはする御事をさへ、
かく跡はかなくはまなし侍らざらまし。いかなる事など常におびたしかりし心おきて
をも問ひ侍りしかど、かけてかやうなる事とはほのめかし侍らざりしよ。いと心はかなくい
ふかひなかりける心の程かなと、今宵こそ承りあきらめ侍りぬれ。兵衛のかみのまゐるべきゆ
かりとばかりぞはの聞き侍りしかど、かのみづからは更に殊の外に思ひて、数ならぬ身の程
にたぐひ給はむもいとかたじけなきものになむ思ひ給へりしかば、さらばかうにこそ侍り
けれ。世に知らぬ御うつくしさをまかせ給ひて、一品の宮のいみじうゆかしがらせ給ひ
しかば、も、かの折に参らせ奉りたりしを、やがてとめ給ひてめのとたちなどあまたして
おぼしかしづくさまなどは、今おのづからまかせ給ひてむ、いとわはれ戀しきものに思ひ聞
え給ひながら、かゝる山がつの垣根におひいで給はむもいとくち惜しきを、いかゞはせむ
などぞおほいたりしか。宮にもなかななる知る人などやいで来て、知り顔にいほむも忍ば
せ給ふなゆり」などいふをきくにも、更に思ひ慰む方なくよろづいとかひなき中にも、なほこ
の忍ぶの露はかうてやむべき心ちもま給はず。「おまへわたりにこそ美しくしさに罪宥しても
おぼすらめ。さぶらふ人々などはいかにあなづらはしく思ふらむ。をさなき程こそさいふさ

いふもあらめ。ものゝ心知りおとなひ行かむまゝに、そのあまたさぶらふめる中納言宰相の
君などのつらまでこそわらめ。さりとして今はかうこそわりけれなど聞えいでむも人のまど
ふなる道」といひながらなほいかにぞやおほゆれば、遠山鳥にてやみぬべき事にこそはとお
ぼしつゝくるに、なきものにおぼしつる年をより今少し御心のうちいとあはれなり。「い
ざやさまさま聞えむかたこそなけれ」とてうちなき給ふに、「まことにわがわやまの心ち
していとくち惜しうなげかしければ、今おのづからさるべき御なかには、おぼつかながらぬ
さまにもならせ給はなむ。なべてのさまにももてなさせ給はざんなれば、行く末たのもしう
侍る。みづからも今は参らで久しうなり侍りぬれど、この御有様によりてぞ時々も立ち出で
ぬべく侍る」などいふ程に、後夜の念佛も始めつなり。尼君にはかひなきよのかたみにも、誰
かはと今よりは頼み聞えてなむ。宮のへんに「かくなむとゆめゆめな聞え給うそ。かまへて
なほ見せ給へ」などを語らひおき給ひける。明けぬさまにといそぎ出で給ふとてやり戸を押
し明け給へれば、曉かけて出る月影ほのかに霞み渡りて、四方の山邊心細げに見渡されたる
に、近き寺々の鐘の聲々も聞えつゝ、いづくによむにか経の聲もほのかに聞ゆなり。所のさま
もをかしう心細くなりけるを、もの思はしくてながめ過ぐしける心のうち、おぼしやるにい
とみじうわはれなれば、とばかりながめ入りてとみにも出でやられ給はぬに、唯この佛の
御うしろの障子のつらに若き人々物語するをき、給へば、いで給ひぬと思ふなるべし。「あ
なくち惜し。今少しとく尋ねておはせで、をかしの御句ひやなほとまりて枕にもうつりにた

り。かゝる人をこのわたりに時々にも待ちつけ侍りておはせばいかにもめでたからまし。いみじかりける御心感ひはげに身をなげ給ひけむもことわりぞかし。やんととなき人々だにいかでいかでと思はれ給ふに、露ばかり心とゞめ給はで心盡し給ふ人々多かりとか。姫君の美しくしさになべてのちごとも覺え給はざりしは、かくにこそおはしけれ。年経にける名残をだにさばかり忍び難げなりつる御けはひを、この暑きまでの命だにおはせざりつらむ。いみじかりけるさいはひをくち惜しき事なりや」といへば、今一人いできて、「三河の守のめにておはせましよりはこれこそめでたけれ。まろはかくて死なばや」などもいふなり。いと若き聲にて「今こそ思ひ合せらるれ。あすくだり給はむとて夜ざりまかりたりしかば、めのとおとゞがさゝめきがちにていひしを」など語る。かの常磐の森にとのたまひし曉に車にもえ乗りやり給はで、ゆふつげ鳥もとありしさまなど見ける事どもを語るに、いとゞあはれのみまさり給へど、よろづいとかひなし。

「秋の色はさもこそわらめ頼めしを待たぬ命のつらくもあるかな」などおぼしつゝくるに、念佛の回向果てつ方は唯うちきく人だにあはれなるを、まいて御袖もえひき放ち給はざるべし。云何女身即得成佛などいふわたりをいとみそかに口ずさび給へるが、はな聲なりしも今少しあはれにめでたきを、聲しつる人々「いまだいで給はざりけるものを、きゝや玄給ひつらむ」といふ。「明けぬるよし申せばいで給ふとても山ぶしにあひ給ひて、人知れず思ひたつたかの心深きを、佛の導き給ふにやと頼み聞えてなむ」など語り給ふさまいと悲しければ、われもうちなかれて、「さのみおぼしとりてけるをいかでか御心にたがふ事は侍らむ。さるべくこそ釋迦佛も三途をも出で給ひにけれ。さきの世の契おはしますらむ。とくに明けゆく光に目もあやにめでたき御かたちをうちまぼりつゝ、げにこの五ぢよく悪世にはあまらせ給ひけり。いかにしてかりにも宿らせ給ひにけむとうち歎くめり」とぞ聞えさする。「さてこの後はいづくにかおはすべき」とのたまへば、「この尼君の最期に逢ひ侍らむすれば、遠きす行などえ仕うまつるまじければいづみの嶽、竹生島などにぞことし明年は候ふべき」などいふもうちやましうち添ひぬべうぞおぼさる。されどあかうなりぬべしと、いそがし立てられ給ひて歸り給ひぬ。かの人知れずおきて給ひし七日七日のはてにもなりぬれば、忍びたれど又々添へさせ給ふ事どもおろかならず。常磐へもさるべき人々にのたまはせて、僧どもの布施、かづけ物、誦經の料など、なべてならぬさまにてぞあまた遣はしける。その後は尼君に、まめやかなるさまに思しやりつゝ、絶えずとはせ給へば、かたじけなき御志を見るまゝに、短かりける命をいとゞ悲しう、姫君をかく思はぬかたにまなし聞えたるもいとゞやしう思へど、今は引きかくしまぎらはし聞ゆべきひまも、たちまちにはあり難くもてかしづかれ給へばすべき方なきなるべし。二月には今姫君のうち参りあるべければ、大々大殿（二條院）こしいたきまで入りいそぎ給ふを、殿の内の人も、さいはひおはしける君かな、今こそその人の御むすめなどいはいはれ給へ、いとものげなき母の局より生ひ立ちしさまなど、めでたきにつけても世の人のものいひはきゝにくきものにて、この頃のあつかひぐさにこそい

れば、われもうちなかれて、「さのみおぼしとりてけるをいかでか御心にたがふ事は侍らむ。さるべくこそ釋迦佛も三途をも出で給ひにけれ。さきの世の契おはしますらむ。とくに明けゆく光に目もあやにめでたき御かたちをうちまぼりつゝ、げにこの五ぢよく悪世にはあまらせ給ひけり。いかにしてかりにも宿らせ給ひにけむとうち歎くめり」とぞ聞えさする。「さてこの後はいづくにかおはすべき」とのたまへば、「この尼君の最期に逢ひ侍らむすれば、遠きす行などえ仕うまつるまじければいづみの嶽、竹生島などにぞことし明年は候ふべき」などいふもうちやましうち添ひぬべうぞおぼさる。されどあかうなりぬべしと、いそがし立てられ給ひて歸り給ひぬ。かの人知れずおきて給ひし七日七日のはてにもなりぬれば、忍びたれど又々添へさせ給ふ事どもおろかならず。常磐へもさるべき人々にのたまはせて、僧どもの布施、かづけ物、誦經の料など、なべてならぬさまにてぞあまた遣はしける。その後は尼君に、まめやかなるさまに思しやりつゝ、絶えずとはせ給へば、かたじけなき御志を見るまゝに、短かりける命をいとゞ悲しう、姫君をかく思はぬかたにまなし聞えたるもいとゞやしう思へど、今は引きかくしまぎらはし聞ゆべきひまも、たちまちにはあり難くもてかしづかれ給へばすべき方なきなるべし。二月には今姫君のうち参りあるべければ、大々大殿（二條院）こしいたきまで入りいそぎ給ふを、殿の内の人も、さいはひおはしける君かな、今こそその人の御むすめなどいはいはれ給へ、いとものげなき母の局より生ひ立ちしさまなど、めでたきにつけても世の人のものいひはきゝにくきものにて、この頃のあつかひぐさにこそい

ひの、しりけれ。大殿のみぞ更にいと見苦しき事におぼして、殊に口入れ給はでよる晝いひくねられ給ふ。大将殿もかの吉野川の後にあさましく、帝の渡らせ給はむ度毎に、よみかけ奉り給はむすらすとかたけらいたう侘しき事限なし。琵琶の音も母玄ろが唱歌してはやし聞えさせむさ思ひやられ給ひて、ひとりゑみせられ給ひていみじきもの思ひにぞなりにける。いかなるわざをしてこの事思ひとめさせ奉らむと、まめやかにわりなく思し歎くゑるしにや、母上上の御せうと宰相の中將、はなれぬ中にて、おのづから見給ひて、なつかしき御かたちに思ふ心つきてはのめかし給ひけるを、うへ上も聞き給ひながら、かく思し立ちぬるもいとねたう心やましきを、みかども大殿もいとしもうけひき給はぬけしきなどを見知れば、後の罪もあへらじとや思ふらむ。あさてばかりになりてね給へる所に入り臥し給ひにけり。唯ちごなどのやうにておはするさまかはりて中々美しう覺え給ふに、かねて思ひしよりも忍び隠さむ程も苦しかりぬべきを、いかにせましと思ひなりぬるけはひなどやゑるかりけむ、近う臥したる母玄ろ驚きあひて、ふと聞きつけて、「いなやこゝに男のけはひこそすれ。そら耳か、いでいでけふあすみかどの君のうつくしみ愛し給ふべきわが佛を、いかなる盗人のいかにしつるぞや」といひて火も消えにければ探り寄りたるに、烏帽子手にあたりぬ。さればこそと心ちも惑ひて、「人々玄そくさして参り給へ。こゝにいと怪しきまれのあり」と高やかにいふに、寐たる人驚き騒ぎぬ。「さてさて先うへの御まへに申さむ」とて立ち走りて足音いとおどろおどろし。近うだに寄らす道中よりもけ給はる。「姫君の御前に男

入り臥して侍り。いかに仕うまつらむとする」といふ。よ聲のいと高きに、うち聞き給へるぞげにあさましきや。「近う寄りきて忍びやかにだにいへかし」といみじければ急ぎ起き給ひて、「あながまあなかま」といふいふ、いかなる事ぞとわたりて見給へば、消えたる火どもまだともしつけぬなるべし。帳のかたびらをか、げつゝ、玄そく手毎にさして、まづまづこの頃参り集りたる女房の限、廿よ人ばかり重なりて居て見わさみたり。「あな物ぐるはし。忍びやかにてこそ出しやりてめ。などかく見苦しう集りたるぞ」とのたまふも聞き入る、人もなげれば、御供に参りたる宰相の君といふ人して、人々のけ玄そくどもけたせなどし給ふまざれにぞ男君帳の内よりいと忍びて出づるを、母玄ろおひつきて袖をひかへて、「たそなのりせよ。さらずば天が下に出しやらでからさ目を見せむ」と玄かりかゝる氣色いとほしければ、「浦通ふみるめは常にかはらじを鰐の刈るてふなのりせずとも」といふ聲をも心までひてき、知らず。浦通ふとあるがほのぼの聞ゆるにぞ西の國のす領にやと心えて、いと悲しう心憂ければ、つゐて、「あな悲しのす領すくせや」とめしずりといふ事をして泣く聲いみじければ、うへ上いとあさましう思されて今を近うよりおはしたる。「あなかま。たまへ、いかなるにてもかゝる事は忍びやかにもてなしてこそあらめ。世のおとぎ、のいみじきをだにもて隠し給へかし」といみじう制し給へば、はしりきて又君の臥し給へる所によりきて、ゆかより荒らかに引きおとしつゝ、「こゝらの寶をつくしてうへ上の思し急ぐさいはひを、心として焼き失ひはるほし給ふにこそあなめれな。今いくばくの日敷の心もとなさに、

ずりやう男は急ぎし給ふぞや。げらうの身の物のようなきだに名の惜しければ、若うよりひたすらものした、かなる男はまうけ侍らぬものを、いづちもいづちもはやうせ給へ。はぢ知り給はぬかな」と顔にあて、つまはじきをまかくるさま、いとおどろおどろしげなるに、髪をふりかけてなき給へるはかげいと心苦しければ、うへへいさばれ、さるべきにこそおはすらめ。唯まろがせちにかゝるかたさまの宿世のなかりけるを、あながちに思ひ立ちて人笑へになりぬるのみこそは心憂けれ。殿のうけひき給はざりつる事をいかにき、給はむと思ふこそよろづよりはねたう恥かしけれ」とていともものしとおぼしたるもことわりなり。ずりやうとさへ見あらはして、さわやかにいひ續けたるを、かゝる人とはいかでかは知り給はむ。まことにかくゆゝしくおぼさるれば、ことにものたまはで歸り給ひぬる御氣色を見るに、いと腹立ちまさりて、「早う早う尼法師になり給ひね。たれたれにもいかでかは見合せ奉り給はむ。そのす領の北の方にて給ふらむ。うしろみ更に更にえま侍らじ。同じさまにて又殿の内にもえおはせじ。さてもさてもなごか入り來りつらむ折に、聲高らかにうち泣き給はざりし。心やすくひれ臥し給ひたりつらむ事よ」とてひたひ髪をひきあげて、いでいどとにかみかゝる顔、氣色や、もせばくひかきぬべし。せちにこゝちのおぼゆべかめれば、又立ち走り北おもてに行きて、「たれもたれもむげに知る人なくて入りくる人あらじ。いみじき盗人といへどもたよりを尋ねてこそ入るなれ。たれぞとよ」と在る限の人々をいひせむれば、おのおのえもいはぬちかごと立てつゝ、いひ誓ひ、泣き腹立つさまども、聞きにく

ゆゝし。かくいひ合へるを姫君聞き給ふに、生けるこゝちもせずいみじきに、心よりほかの事だにあるに尼になれといふをだに聞かずば、遂にいかゝまなされむとおぼせば、恐ろしきに人の思ふらむ事の恥かしきなどにはあらで、尼になりなむと思ひ給ひて、櫛の篋なる鏡取り出で、髪かいて見給ふに、常よりもこの頃つくろはれてをかしげなるが、さすがに惜しう悲しけれど、昔物語にも憂き事あるにはさこそはまたりけれなどほのき、しも、思ひ出でらるれば、泣く泣くこゝかしこまどけなくそぎおとして泣き居給へるに、母まろ又せためによりきたるに見付けて跡まくらも知らずかき臥し、「いかにせむいかにせむ」とまどひ、死に入りて泣き入りて臥せり。うへへ聞き給ひて、「尼になれ尼になれと責むればこそはあらめ。とてもかくてもよからぬ人と見る見るかゝる事を思ひ始めける、まろこそかへすがへす恥かしけれ」とのたまふを、おと聞き給ひて、「いでさればこそはかばかしき事はあらじと思ひ侍りし。世のおとぎもたゞならむよりはたがためも恥かしうもあるかな。内にいかにきかせ給はむとすらむ。よくぞこの事にひとこともわが口入れせめざりける。母まろが足すりことわりな、り」とて笑ひ給ふを、うへへはげにねたう腹立たしうも恥かしうも、かたがたにおぼし歎く事限なし。大將殿はいでさればこそと、からうじて思ふ事かなひぬるこゝちしたまふものから、あまりいとまな定まりたるむこの君ぞいと名だ、しくおぼさるゝ。にくからざりし顔つきはさすがにあはれにもおぼされけり。内には更に御心もゆかざりし事なれば、何とも御耳にもとまらせ給はざりけり。

狭衣卷第三之中

月日すぐれど故院（一）にあさましくおぼつかながら、別れ聞えさせ給ひにしことを、他かすおぼしめさるれば、「その御かはりには女院（二）の姫宮（三）などをめがれず見奉らむ」とのたまはせて藤壺に御志つらひせさせ給ひて、常におはしまさせ給ひけり。姫宮をも一品になし奉らせ給ふ。大將かく御内すみにもかの忍草（四）はぐしてやおはすらむとゆかしければ、人知れずさるべき折々はそのわたりをたすみより給ひつゝ、氣色を見給ひけり。早うも少將の命婦（五）とて去たしう侍らふを、語らひ給ひて御文を時々奉らせ給ふ。御けはひもほのかにきゝ給ひしを、か茂の川波に立ち別れ給ひにし程に、わざと聞え給ふ事は絶えにしぞかし。今はおなじ百敷になり給ひて、おぼつかながらぬ程にこととひ寄り給ひつゝ、なほその御心絶えぬさまにぞほのめかし給ひける。里におはします折も、若宮のおはする一條の宮は唯はひ渡る程なれば、つれづれにおぼさるゝ折々は御文も聞え給ふなるべし。みづからもさるべき宵々は渡り給ひつゝ、命婦と語らひ給ふ折もありけり。そのついでにも「さる人や」など唯大方なるやうにて問ひ給ふに、たれとたしかにはいはねど、世に知らず美しくさよしを語り聞ゆるにいとゆかしうおはれにて、この御あたりの立ちきゝかいせ見も必に入りたり。もし見つくる人もあらば宮の御ため、あぢきなき事やいでこむと、あづらはしきかたもなき

にしもあらず。常磐の尼君のむすめ小宰相とてさふらふを、思ふ事も語らはまほしけれどさすがに何となくて、いひよらむもさやうのけまやうなどおしなべては習ひ給はぬこゝちに、人もあやしと思はむとつゝ、ましくて、えいひより給はざりけり。忍びたる所より夜深くかへり給ふついでに、やがて一條の宮へおはするに、この宮のみかどいととくあきていづれの殿上人の車にか、よもすがら立ちあかしけると見ゆるは、いかなる人の、局より出づる人ならむと見入れ給ふ。院（一）はよべ内に入らせ給ひにしを、宮（二）もや参り給ひにけむ、さらば忍草も人すくなにてやとおぼしやるに、いと過ぎ難くて例のやをら入り給ひぬ。常に立ちきゝ給ふ戸口に入り給へれば、局に急ぎおしける女房のおしもたてすなりにけるにや、いと廣うあきたるを人起きにけりと見給に、わづらはしけれど宮（三）などおはせぬ程にて、人すくなゝらばかき抱きてや出でぬべきと思して入り給ひぬ。御前の方を見入れ給へれば、御殿油消えがてにまたゝきて奥は暗うて物も見えず。こゝかしこに人々あまたねたりと見ゆれど、をさなき人はいづれとも見えず。臥したらむ所も知らねばたどり寄りむ方もなくて、唯つくづくと見入れらるゝにもこうきでん（四）の南の戸口はまづを思ひ出でられ給ふ。思ふまゝなるはわがためにも人の御ためにも、あぢきなういとほしく悔しくもあるわざどかしと、いくらの年の積りならぬと思ひ知られ給ふ事多かれば、わづらはしくやをら出で給ふに、ありつる車の人にや、ゑばう子なほしなる人のふとさしあひたるに、出でどころのびんなければ袖して顔を隠して、めん道の口に隠れ給ひぬれど、聞はあやなき御句ひより始めてなべての人にまがふ

べき御有様ならねば、かうにこそありけれと見はて、見ぬ顔にて過ぎぬるも、おほきおと
 の御子の權大納言（一）なりけり。早うより思ふ心ありて御めのと（二）中納言の君（三）といふ
 に、志あり顔に見せつゝ通ひけるに、今となりてははのめかしいでつゝせめ渡るを、いとめ
 づらかにあさましきこゝちして、今はをさをさ對面する事ももの憂くのみ思ふに、よべ院も
 内に入らせ給ひて宮（四）はとまりせ給ひて、母の内侍のめのも風にわづらひてまうのぼら
 ずなりにしかば、かはりには御かたはらにとて参りたまへといひしを、かく人すくなゝる程
 にて、近きわたりにするべせよと、よき折とうかひわやくにとり籠めてせめあかしつれ
 ば、御かたはらにもえ参らずなりにしなりけり。世の中思ふまゝにはこりがにもてなして、
 ものいひなども少し憚なき人ざまなるを見や知られぬらむ。さらばあぢきなくいとほしか
 るべきわざかなと、大將は苦しうおぼしたり。その後中納言の君に大納言あひて、まかまか
 たしかに見し事と、ありし曉のありさまを語りて、「いでや、かゝればさしもこのほかにも
 の給ふなりけり。さはありともみこ達をも何とも思ひ聞えぬ人にこそあめれ。あなをこがま
 しや、見むかし。内や院などきかせ給ひては、更によもまめやかに御覽せられじ。いかに口清
 くあらがひ逃れむとすらむものを、御うしろ見たちのかたちけはひにははかられ給ひて、かゝ
 るわざはま給ふにこそあめれ」などのたまふに、「いとあぢきましくなりぬ。」早うこそさやうの
 御氣色見えしかど、あるべき事にもあらずとて聞えはなたせ給ひしかば、さてやみたまひし
 事を、まして内の御氣色に従ひてけふあすにても世をそむきなむとこそおぼしめしたれ。い

とゆゝしき事かな。かけてもかゝる事なのたまひそ。まことしういひなす人もこそあれ」な
 どけざやかにいふを、「さらば我は知り給はぬなゝり。今おのづからさゝ給ひてむ。世にある
 事は暫しこそかくればあれ。少しにぶにぶしき事を見たらばこそあらめ。口清くものたまふ
 ものかな」などいふさまの、たはぶれどとの氣色にはあらねば、げに人もなからむ事をかく
 のみのたまはむやは。唯一よまではかくはいはざりしを、いかなりける事ならむとあやしう
 思ひて、母の内侍のめのとに、「かくこそこのたまひしか」と忍びていへば、「少將の命婦（一）の、
 「いつぞやいかなるにか、この頃立ち返りのたまふ事どもこそあれ」といひしかど、「あな苦
 し。嵯峨の院の宮達をうちかはりあづけさせ給へど、さゝ入れ給はぬに、まいてさかり過ぎ
 させ給ひぬ。あな恥かし。おぼろげの人見え給ひぬべくやはとてやみにしを、少將の命婦（一）
 の局になむ時々立ちより給ふとき、しを人のいひなすらむ。すべて高きも短きも候ふ人々
 につけてかゝることも出でくるなり。またまねびをだになま給うそ」とむつかられてやみぬ
 るに、大將（二）のおほしやりしもまゐるく、大納言はいとけざやかに出でおはせしを見てしかば、
 ことにはいかりもなく、心やまじきかたさへ添ひて、いふをさゝ繼ぐ人はあまたになりつ
 ゝ、内わたりにも聞え、院のへんにもやうやういひいでければ、近う侍らふ人々は「あさまし
 き事かな。かゝるものまねびなせそ」とかたみにいひいさめけれど、まことならぬ事も唯片
 はし出でければ、まことしうのみいひなす人多かる世のさがにて、そのよの曉にさていで給
 ひし事御車そこそこを立てたりしか。夜深うそのまの御格子、つま戸の明きたりしはさ

にこそおとりけれなど折々の立ち聞き、かいま見の程をほの見ける人々も、その折は何と目も
 どいめ給はざりしを、かゝる事いで來てのちは忍びつゝ、おのおのいひいだしなどしてさ
 めくもあるべし。ましてなべての世には年經にけるさまを、つゞきつゞきういひなすを女院も
 聞かせ給ひて、内侍のめのと御事をめして、「かくいとあさましき事を世の中にいふなるはい
 かなる事ぞ。むげになき事をば人のいふ事にもあらぬを」とのたまはするにいとあさましく
 なりて、この權大納言ののたまひける事をぞ語り聞ゆるに、いでさればこそ少將の命婦のぞ
 わざにやとおぼしよせ給ふに、いと心愛く胸ふたがりておぼし歎くに、その後ともいぢ
 るき御氣色もなきは、いかばかりなめげなる心の程ぞなどさへ、さまたま安がらぬ御心のう
 ちなり。少將の命婦かゝる事をきくにあやまらばなけれど、はかなき御文のつたへもさずが
 に年經ぬれば、いと苦しうてをさをさ御まへわたりにもさしいでぬに、内侍にもさかせ給ひ
 てなまわづらはしきに、「その人知らぬやうはあらじ」など仰せられければ、いとあさましく
 思ひ歎きて籠りぬたり。宮二もいと若き御程にもおはしまさねば、かゝる事をさかせ給ふに
 いかおろかにおぼし歎かせ給はざらむ。糺の神も引きかけて、さださたとあきらめさせ給
 ふべきならねば、院にもさやかに見合せ奉り給はず、おぼし亂れたるをも唯ひとへに思はず
 に、心愛くのみ見奉らせ給ふのみぞわりなきや。大將はかくなむとき、給ふに、さればよ、す
 べてよからぬわが心の、何事にもち悔しきぞかしといといとはしう思されて、少將の命婦
 紅一編一のもとへこまやかにかさ給ひて、「御前わたりにはいと、いかににはしたなう侍らむと、つ

とましう思ひ給へど、この度ばかりはあへなむとて」とあるを、わがもとなるも取りぐして
 内侍のめのとに忍びて見せて、なくなく誓ひさかすれば、女院の御まへにまで参りて少將の
 いふ事啓すれど、いかなるとてもかゝるがるしうよろしからぬ御名の流れぬを、おぼし
 めし亂れてものものたまはず。文はさすがにゆかしうやおぼさるらむ、取りて御覽すれば、
 「思ひやるわがたましひや通ふらむ身はよそながら着たる濡衣二とある書きさまた手など
 はしも、げにみこたちなどの御あたりならでは、ちらさむはくち惜しかりぬべかめりと御ら
 んするにも、いかなる心にてかくぬれぎぬにしもなしたらむとさへ、なほ涙のみこぼれさせ
 給ふ程、いといとほしう聞えさせやらむかたなし。大殿三にもこままと聞えさせる人あり
 ければ、年頃もこの御事を深う思ひて、いとひがひがしきまでおぼしはなる、事もあるなり
 けりとおぼすに、いといらうたう美しくと思ひ聞えさせ給ひて、大將に「かく世の中には残
 りなく聞ゆるまで、知らせ給はざりけること」とうちゑみてのたまふ御かほの氣色、いと嬉
 じとおぼしたるを見給ふに、宮四の御ためいといとはしう、みづからのためにはまことしく
 も取りなされば、いと煩はしくびんなかるべき事なれば、いたうまめだちて、「少將の命婦と
 いふ人は早うより知りて侍りつるを、内わたりにて時々立ちより侍るを、いひなす人の侍る
 にや、かけてもあるまじき事を内などにもさかせ給は、びんなうかたはらいたきことにこ
 そ」とていとまめやかに苦しとおぼいたれば、「何かはさまでびんなかるべき事かは。みかど
 の御むすめ、今も昔もえ奉る事世の常の事なり。われらよりおとりたる人だに當代のみかど

の御むこになりたるためしとおほかり。まいて更によびんなき事とおほしめさじ。かくのみよるべなくて過ぐし給ふいと心苦しきに、まことにさやうにもものし給は、内にも院にも奏してむ。あるまじき事とおほしめすとわが申さむ事更になびさせ給はじ」とのたまふを、「故院（院）もすべてさやうに思ひ聞えさせ給はざりければ、女院も今更によき事とおほしめさじ。いととおなしき程にもならせ給ひにたれば、何事にかさやうにわながちなる心などつかひ侍らむ。すべてあるまじき事に侍る。今おのづから宿世などいふものある人も侍らむ。かくても世に侍らじ」などいと怪しきまゝにけざやかにささせ給ひてやみぬるを、「かくてもいみじう忍びて御文だにおぼろげならでは難ければ、唯人知れぬさまにてやみなむとおぼしたるなめりと、女院はいみじくおほし歎かせ給ふ」とこまごまと申す人のありければ、「さればこそこの御ことをさへ、唯かやうにまぎらはしてやみなむと思ふ給へる、いとあさましき御心の程なめり」といとほしがり歎き給ふ事限なし。「わがすゝみ申さうらむに、あれよりいかでかかゝりけり、さはともなたまはせむ。なき事にてもかばかり人名を立て奉りて、おとなくてやまむはいとふびんなる事なり。承けひき給はぬまでも我この事を女院に申さむ。さのみ心にまかせて見るべき事ならず」などまことしうむつかり給ひて、参り給ひて、「さるべき人していと忍びて唯あづかり聞えむ」と度々けいし給へば、さればこそみづからは人目をせちにつゝみ給うて、おとゞしてかく申させ給ふなりけりと、心得果てさせ給ひぬれどいかゞはせむ。さらばなどはいかでかはのたまはせむ。もとよりかやう

のすぢには思ひ聞えざりしを、今はいとさかりもすぎさせ給ひにたり。みづからの御はい深きさまに、けふあすにてもとおぼしためるを、かゝる御名の隠れなくなりぬるをいみじくおぼし嘆かる。さりとて又たしかならぬ事によりて、われさへうちまかせ聞えむもなほつゝましく心苦し。又かく人のわながちにいふ程を過ぐしても、さばかりこそはやみ給ひにしかなど、世のためしにいひ流され給はむさまなどを、ささまに釣するわまにもおとらずまはたれ過ぐし給ひにけり。内にもおとゞついでつくり出で、はのめかし奏し給ひければ、人のものいひはまことなりけりとおほして、遠山鳥にてはとりどころなきを、げにさもなかはとおほしめすに、さばかり若くめでたき有様を、おとなしき程のおとろへも恥かしうやあらむ。限なき御事といふとも心ゆかず思はれて、うちまもられ給はむこそいとほしかりぬべけれ。嵯峨の入道の宮（院）又なくめでたく聞えしをだに、齋院にはおとり給ひてあらむかし、この御有様に劣らざらむを、わがめに見定めてこそとて今までかくはあるとこそは、あなかたはらいたとおほしめされながら、さはいかゞはのたまはむ。又ささまの事を聞かせ給へば、かの心に少しも物憂からむ事をば更になび言はざるものを、おとゞのかくかたがたにねんごろにいふは、かのみづからのけしきにまたがふにこそあらめと、推しはかられ給ふぞたのもしう思しめされける。女院にもかくなむと聞えあはせ給ひて、のがれぬ御宿世やありけむ、誰もいとつゝましうおほされながら、人のかくねんごろにいふ折に思ひよわりぬるさまにもてなしてむとおぼしなりぬる。大殿は限りなく嬉しと、年頃のはいはかなひに

たりとおぼし悦びたるを、大将のおぼし歎くさまぞいみじかりける。嵯峨の院の昔より殿の御志に劣らず、あはれにかたじけなかりしをだに、このかたさまには見知らぬやうにてやみにしものを、げにその折は思ふ心一つによりてぞかし。今はざりとて心よりほかに世に長らへてむ限り、かゝる獨すみにてもあり果てぬやうもありなむを、されどかく心よりほかになげのあはれも、かくる人のあらむ折にやその心もたがはむ。こむ世のあまとなりても更にかつかくはやむまじき御有様に、少しもよからざらむ人をば夢にも見まうければ、さばかりはかなき世におのづから嘆く嘆くも、過ぎなまほしくあるまじかりける事と、片つ方の御契を見果て、のちは、かく心よりほかに、世に長らふるにてはさてこそあらましか、されど今はかたがた世に在りごと、佛などの示し給ふなめりと見えつれば、ひとへに思ひ立つ事も、いかなる心にてかく世づかぬ獨すみにて過ぎたるぞとだに聞かれ奉らむと、すべて何事も露ばかり心に飽かぬ所ありて、この人々に少しも劣り聞えたらむは見ず聞かじ。かく嘆く嘆くもはかなき世の、もとの季の程は、おのづから過ぎなむとのみ思ひ取り給へるに、かく芹つみし世の人にも問はまほしき御心のうちいふかたなかりけり。心にかゝりてゆかしくわはれにおぼされし忍ぶ草も、露知らまほしからず恨めしくなり給ひて、その渡りかき絶えおながちなりし夜な夜なの立ちぎも、例の僻なれば悔しくわりなし。六月十日宵のいと暑き晝つかた、二條の宮にて、若宮ぐし奉りてはしつ方に涼み給ふに、俄にかき曇りて村雨の

おどろおどろしきには、柏木の下風涼しく吹き入れたれば、みず少し上げて見出し給へるに、ならがしはいげにいたくもりわづらふも目といまりて、

「柏木の葉守の神になどてわが雨もらさじと契らざりけむ。雨風につけてもくやしき事がちなる慰めに、若宮を見奉る度ごとに、さておはしまさましかばとおぼされぬ折はなかつるを、いとこの頃は御心にかげぬひまなくあはれにくやしき御心のうちなり。いとあつかはしげなりつる前裁どもの、雨にこゝちよげに思へる中に大和撫子のまはれたる氣色、中にもらうたげなるを一枝折らせ給うて、嵯峨の院にまゐらせ給ふ。

「戀ひわびて涙にぬるゝふる里の草葉にまじるやまとなでしこ」とあるを御覽せさせられど例のかひあらむや。一品の宮の御事は八月十日のほど、定まりぬ。さばかりの御ほどにおぼし急がせ給へば、世の中ゆすりていとめでたくあらまほしき御事に世の人さへ思ひたり。かゝる御事によりて、今まであやしかりつる御獨すみなりなど疎きも親しきも思ひあはせ、つきづきしうぞいひなしける。みづからの御心にはいとみじうのみおぼしなげかれて、一條の宮にのみこもり居給ひて、若宮と起き臥し語らひ聞え給ひて、かなはざりける世の中を恨めしくおぼすまゝに、唯今まばしかはらぬさまにておはせましかば、かゝることを人もおぼし寄らましやなどおぼすに、わがあやまちともおぼされず、つらさのかずも多く、まいてかゝる事を聞き給ひて、いかやうにかおぼしたるらむ、唯今もさしむかひ聞えさせていひなやましつゝ、見奉るわざもがなとあくがれまさりてわりなければ、いひあはせてだになくさ

まむとにや、中納言のすけ（表乳）たづねさせ給へば、齋宮（齋宮）にぞ侍らひける。車遣はして「かならず聞えさすべき事ある」とのたまひたりければ、若宮もひさしく見奉らぬにと思ひて参りたり。待ち給ふとはしつ方にぞよりふし給ひたりける。「やよやいかにと思ひわびて聞えつるなり」とのたまひて若宮を抱き奉りて、明暮の御有様、物いひの美しくさなどを泣きみ笑ひみ語り給ふ。「かゝる人おはせざらましかば何事によりて今まで侍らまし。長らへてもげに心より外に、ものむつかしき事もありぬべければ、今ぞまことに世にあらじと思ひ果てぬるを、唯この御有様にこそ思ひわづらひぬれ」とてなき給ふさまいと心苦しげなり。「過ぎぬるかたこそ侍らめ。今はよろづこの御有様にはうきも憂からずこそおぼし慰まめ。いとゆゝしくあるまじき御事かな。又この頃は思ふさまなる事と世の人も聞えさせ侍るは、いと嬉しうこそ侍れ。げに又かゝる事の侍るべかりければ、過ぎにしかたはあやしう心苦しき事も侍りしにこそ」と聞ゆるを、「こと人よりはさりともおなじ心にとてこそ聞えつれ。心憂くものたまふかな。いでや今は聞えじ。藻にすむ蟲なれば」とて思ひみだれ給へるけしき、今少しいとほしげになりまさり給ふと見るも、例の御くせぞかしたなまにくかりけり。「さてもかやうの事ども聞かせ給ふらむな。いつか嵯峨へ参り給へりし」とのたまへば、「さいつ頃参りて侍りき。何事も何事もすてきゝやせさせ給ふらめど、さらにゑるきことも侍らばこそわらめ。よき人と申すなかにもあさましくおはしますなり。されどはかなき御手習にこそは、御心の内をも見奉りあきらめ侍りしかば、今はたゞ佛に向ひ奉らせ給うてのみ暮させ給

へば、世の中のよしなし物語も御まへにて申す人も侍らず」など語るも、げにかの見奉りそめし夜の事どもなど思ひ出でられ給ひて、ことのねより外のさしいらへなかりしぞかし、あるべき限り美しくしうめでたかりし御ありさまけはひなど、唯今のこゝちしていふかひなく悲しくおぼさる。いとかくのみ物のおぼゆれば、「よし見給へ。つひにはかくてもえ侍るまじきを、唯今一たびみづから聞えまほしき事のあるを、その明暮向ひるさせ給ふらむ佛の御前にゑるべま給へ。それをだにこの世の思ひでにし侍らむ」と語らひ給ふをげにあるまじき事と、せちにはらふべき御なかの契とは見奉らねど、昔物語の姫君のやうに中だちの人のいふに従ひて、まぶまぶにぬざり出でさせ給ふべきにもあらず。「その佛の御まへにもゆくりなくはいかでおそろしうぞ侍るや。中々見奉りまらせ給はゞ御心こそ亂れまさらせ給はめ。有り難く見はなたせ聞えたと覺え侍りし。過ぎにしかたに侍れば今は何か返事もかひ侍らじものから」と見るまゝの事を聞ゆれば、「あな心うの御物いひや。かたがたにむげにいふかひなき心の程とこそ思ひ侍れ。それもげにことわりなりや。げにさこそおぼし憚らるゝ御さまなれど、いとままでをさめやらぬ心の程と見給ふらむこそ恥かしけれ。おろかにて見放ち聞ゆべくも思はざりしかども、いとかく生けるわが身といひがほなりける宿世にてありける事も、みづからの罪にわれさへ常になし給ふは心憂きなり」とていとつらしとおぼしたれば、「いでやことのほかにたどたどしげに聞え侍りし關の戸さしも、ゑるべなくてたどらぬ人も侍りければ、いとうしろめたうまめやかに、過ぎにしかたにかばかりなる御心

ならましければ、いかにもやすく侍らまし」といへば、いたたまれだちて、「かくな常にいひむかへなま給うそ。時々はわれだに、あはれどのたまへ。昔も心には罪ありきとも覺えざりき。唯物を思ふべかりける契のみこそは、みづからのあやまちなりけれ」などよもすがらうちもまどろます歎きあかし給ひて、やがて嵯峨の院へ送り給ふとて御文書さ給ふに、またいと暗ければみすを少しまさわけ給へるに、御まへ近きすいがいのつらなる萩の葉の露の、いたう亂れて折れかへりたるを、吹きこすこがらしにはらはらと亂れ落つる露の白玉、げに袖にはたまらぬとおぼされて、とばかりながめ入りておしのごひつゝ、えぞかきもやり給はぬ、「こまやかなるはしつかたにこの心は聞かせ給ふ事も侍らむものを、なごか、

折れかへりおきふしわぶるゑた萩の末こそ風を人のとへかし、なごやうにて、この御返りつゆも見せ給はずば、苦しうおぼさずとも又對面せじ。唯こればかりをなむ御志に見るべき」などのたまふを、「いとわびしきわさかな。さらばこれや限りに侍るべからむ」とわぶわぶ車に乗りぬ。嵯峨にはいととく参りたれど、ごやおきの御行ひのまゝにみ堂におはしませば、かひなきまでもえ御らんせさせぬに、晝つかたになりて齋宮齋より奉らせ給へる御返り聞えさせ給ふとて御硯めしよせたるついでに、取り出で、ひろげてうち置きたり。令更にかゝる物の常に見ゆるを、人もあらばいかにといみじうおぼしめさるれど、さわやかに物もえのたまはせねば、唯御顔の色いとほしげにて御らんするやうもなけれど、よもすがらのたまひつる事どもおぼしたりつるさななど、ところどころを少しづつ聞えさせて、若宮の御うつ

くしさによるづを思ひ慰め給ふさま、あはれも淺からず聞えさせて、「御返事見すば世にもあらじなど侍りつるを、さなきも聞えさせいで、かやうにも傳へほのめかし申すも、あるまじきさまにかたはらいたくかへすがへすも思ひ給へ知りながら、院の御前にもさすがにこの御事をば、行く末までさしはなちてはあるまじきさまにおぼしめしのたまはすめれば、若宮の御かたさまにことよせては、なごかはことのはかにと思ひ給へ侍りてなむ。今はいかさまにもそれによるべき御事ならねば心やすく」など申せば、いと御顔の色うつろひまさりて寄り臥させ給ひぬれば、この御かへりなほときこえさせむかたはらいたくて立ちぬ。宮のつくづくとおぼしつゝ、くる事多かるなる中にも、この未越す風のけしきは過ぎにしその頃もかやうにこそはと、少し御目のとまらぬにしもあらで、筆のついでですさびにこの御文のかたはらに、

「夢かとも見しにも似たるつらさかなうきはためしもあらじと思ふに、起き臥しわぶる」とある所に、

「ゑた萩の任露さえわびしよなよなもとふべきものとまたれやはせし。

憂き身には秋もゑらるゝ萩原や末こそ風のおとならねども」などおなむうへにかきけがし給ひて、こまやかにやりてすけの参りたるに、捨てよとて給はせたるをかくれにもて行きて見れば、物書かせ給ひたりけりと見るに、うしろめたきやうにはありともいとほしくのたまへるに、これをおもがくしにせむと思ひて、「かゝる物をなむ思ひかけぬ所にて見つ

けて侍りつるを、奉るもおぼろげならぬ御心ざしに侍る。さば今はおぼし慰めよ」など聞えさせたり。一條の宮には、殿（御）より、「けふよき日なり。一品の宮に御文奉り給へ」とのたまへど、けさのまゝにながめ入り給ひて、佐（膳）のものとよりいかゞいはむと待ち給ふに、からうじてかくやりほぐをえ給ひて、せちにつぎつゝ見つゞけ給へる心ち、げに今少し御心のうち亂れまざりて、引きかづきてぞ泣き臥し給ひける。こののちはいとゞいかさまにしてのがるゝわざもがなと、多くの願をさへぞ人知れず立てさせ給へど、まゐるしもなくてその程ときく日も近うなれど、ざりとてこの事により山はやしに入りけりと、いひながされむ世のおとぎゝもいとものぐるほし。人の御ためもむげにいとほしかりぬへければ、ひたすら思ふまゝにもえなり給はで、まことにうつし心もなきやうにぞ思されける。その夜になりて大殿（母）母宮など、立ちぬおぼしいとなみていだし奉らせ給ふさま思ひやるべし。常の御句ひも人に似給はぬを、晝よりさまざまのかうども取り出で、これはかれはとふせごあまたして焚きしめらるゝ。おどろおどろしきままでくゆり満ちたを、いづら、これをやかれを奉るべきとて、あまた取り出で、時なりぬとあれど、たましひもまことにあくがれ出でにけるにや、心もほれまどひてとみにもえ起きわがりがり給はねば、殿渡り給ひて、「いかにおぼさるゝぞ。いとみじきわざかな」とけいめいし給ふさまのわりなきに、げにいとあさましきわざかな、いかでかくしも思はじとよろづに思ひ念じて、さうぞくなどかたのやうにして御前に参り給へるを、いと嬉しとおぼして、よろづにつくろひ立て、出し奉らせ給へど、こゝちもまことに惱まし

きかな。たび所にてかうくるしくはいかゞせむとて、まみなどもいたう泣き給へりと思ゆるを、母宮はいと心苦しうかうまでおぼしたる事を、われさへ何しにわながちにきこえつらむと胸ふたがりておぼさるれど、今宵になりてはげにすべきかたもなければ、歎く歎くいで給ひぬる跡に、火をつくづくとながめて人やりならずうしろめたうおぼしやりたり。御前なりつる人々も、「いとほしかりつる御氣色かな。男の御身もえ心にまかせ給はぬものなりけり。かうのみおぼしたらば女宮（の）の御ためこそ心苦しけれ。何の物語ぞや。かゝる事のあるよ」といへば、「それのみぞ多かる。若火たく屋の親の心こそにくけれ。少將もあまりなれども男親に従ひたるぞとよ」などいふを母宮聞き給ひて、物語にてだにさばかり心つきなき事を、今はさばかりになりぬる御有様を、いとかくせちに思ひ歎かするも、人はいかに思ふらむなどおぼしけり。待ち聞え給へる宮（の）の御有様世の常ならむやは。みそぢにも餘らせ給ひぬれば、おとなしうわかぬところなくねびと、のほらせ給ひて、恥かしげにけだかう心にくき御有様など唯ほの見聞き奉り思ひやりしにたがはず、いかさまにしてあかし暮さむと、獨寝のわかし難かりつるのみ戀しくて、うきはためしもとありし御手習の、心にかゝりて思ひいでられ給うて枕のぬれぬるぞゆゝしきや。世はいとあり難うこそありけれ。思ふ事一つによりて何事をあかずと思ひ聞えてつらき物に思ひはてられ奉りてすき給ひけむ。その報いは必ずわが身にありなむと思ひつゝ、唯今宵の内にむかはりぬるこゝちし給ふ。惱ましきのことつけていと夜深く出で給ふ。一條の宮におはしぬ。また夜深うて起きたる人もなければ、格

子を一手手づからわけ給ひてやがてながめ臥し給へるに、「雁のあまた列ねて鳴き渡るはたが玉章を」とひとりごちて、「せいたいの紙の色紙」とすんじ給へる御聲など、げにみかどの御いもうと、いふとも、世の常ならむはわかずおぼされむことわりなる御さまなり。

「聞かせばや常世はなれし雁がねの思ひの外に懸ひてなくねを」懸など獨ごち給ふを聞く人だになきぞいと加ひなき。硯引きよせて御文かき給ふを、けさのにやと見れど嵯峨の院へなるべし。入道の宮は、御持佛堂のつま戸押し明けさせ給ひて、峰の朝霧の晴間なきをながめやらせ給ひて行はせ給ふに、院院もごやの御念佛のついでには必ず渡らせ給へば、阿彌陀の大じゆよませ給へるいとたふとく聞ゆる。御前の花ども露に亂れ合ひたるなどを人もとくおきてつくるひなどするに、中門のかたに人のけばひのするを見やれば、何のじようなどにやあらむ、太刀佩きたる人のこゝかしこさしのぞきつゝ、人あないすると見ゆればみすなどおろして問はずれば、「大將殿の御使内侍のすけの御局にわないし侍る」といふを、院院も聞かせ給ひて、「思ひかけずをかしき程の使かな。よへは一品の宮に参ると聞きしを、まづ急がれつらむもをかしうこそ」とてやがてめし入るゝを、すけ今ぞ聞きつけてこまかなる事もやとわびしければ、惑ひ出で、局の方よりたづねれば、「早く御前にめしつれば参らせつ」といふを胸つぶれてきゝ居たるに、院の御手づから引きあけさせ給ひて、「見る度ごとさもめでたうなりゆくてかな。あやしうこの世の人とはおぼえずのみ、何事もねび行くこそあまりゆゝしけれ」とめでさせ給ひてよませ給ふを聞けば、

「思ひきや葎のかどを行き過ぎて草の枕に旅寐せむとは葎とばかりわりけるは、かやうにもとり出でよとおぼしけるにやとさくも、なほ心ある人の御まわざはかゝるぞかしと、胸落ち居ぬ。けさはこと事思ひまぎらはしたりつらむものを、いかばかりとくいそぎ起きてかきつるならむと見ゆる心の、たゝなるよりはをかしうおぼされて、はかなき事につけても人になさけを見せ、おはれをかけられむとなりたる人なりけりや。かく急ぎものしつらむものをともてはやさせ給ひて、「この御返事はめづらしげなき内侍がいひたらむよりは、今少し心を動かすばかり御手づからのたまはせよ。何事もをりからになむ侍る」とて御硯などまかなひ聞えさせ給へど、今朝しも思ひ知り顔に見せむも恥かしうおぼしやらる。院はさもおぼしたどらで、心ではさやうにおぼしめしたれど、かやうにをかしき程の事は見苦しうやとてきかせ給はねば、聞え煩はせ給うて御みづから書かせ給ふ。

「故里は淺茅が原となりはて、蟲のね繁き秋にやあらまし囀。今こそ嬉しう」とあるを見給ひて、まことにありしながらの御身にはなさまほしう、思ひこがれ給ふ程に秋の日もはかなう暮れにけり。殿より、「けふの御使はいかなれば今までは奉り給はぬぞ」と聞えさせ給ふも聞きにくければ渡り給ひぬ。御使は内へも殿上人の數にてさぶらふ左衛門の權の佐といふをぞ奉り給ひける。

「まだ知らぬ曉露におきわびて八重たつ霧に迷ひぬるかな無などやうにことなしびならむがし。院院はめでたきかさまなどを御らんするにも、思ひかけざりし事かなとなほ

御胸つふるべし。この御返りは「かばかり聞えさせ給はむに、さだ過ぎたらむはかたはなるべければなむ。殊更ばかり」と聞え給へば、なかなかいはけなからぬ御程はよろづいとつゝましげにいとほしき御氣色なれど、筆紙などなべてならぬを御几帳の内にさし入れ給ひて、「なほなほ」と聞えさせ給へば、おぼしわびて、たゞ引き結びておかせ給へるを包みていださせ給ひぬ。御使には例の事なれば世の常ならぬ女のさうぞくに細長などにこそはあらめ。まがらみかくるさを鹿のこゝちして、御前に参りたるもいとをかしくて、思ふさまなる御心どもなり。御返りいかならむとこれさへ見劣りせむと侘しかりぬべければ、とみにもわけ給はぬをいと心もとなしと母宮おぼしたれば、廣げ給へるに、物もかゝれざりけり。古代のけさうぶみの返り事は伊勢がかゝる事をまける、げになかなかならむよりはいとよしかしと、これにてぞ思ひまし聞えさせ給ひける。されどあなおぼつかなとてうちおき給へるを、宮御は「思みもこそすれ。ことになきわざもし給へるかな」とてももしげにおぼしたり。三日の夜の事例の事なれば思ひやるべし。さばかりの御中におぼしいそがむことの、何事もなのめならむやは。四口のつとめては心のどかにてものし給ふを、男の御ありさまぞいとまばゆかりける。唯みすのとなて見奉るだに恥かしく、いかなる人かれに見え奉らむとおぼえつるを、あたり苦しきまで光りかゝやくやうに見え給へば、さぶらふ人々はいとわりなく、顔の置かむかたなきこゝちするに、まいて宮はこよなき御衰への程をおぼし知れば、唯御ぞにまとはれて臥し暮らせ給ふを、いたうもあらはし聞え給はず。よなよなの御手あたりにはたがはず

やと、恥かしげなるまりめに時々見奉り給ひつゝ、かねてはされどいかゞはせむ。忍草を近くて見むを取り所にて、思はずなる世をも過ぐすばかりと思ひ、その慰めも又見給はぬ程なればにや、かなはざりける世の中をつらう心憂くぞおぼえ給ふ。さばかりわかぬ所なくらうたげにうつくしかりし御色さまをだに、なほ室の八鳥にはたちならび給はざらむと、せちにおとしめ思ひやり聞え給ひし御めのならひに、ことわりぞかしとまづうち思ひ出でられさせ給ふも、いとわびしうて垣ほに生ふるとぞいはれ給ひぬべき。いとさばかりの宿世こそ難からめ。などこの嵯峨野の花はよその物になしはて聞えけむ。何事かはなのめにいでややと思ふ事のありしと思ひ出でられ給ふにも、さはいへどけ近き程のあはれはこよなく忍びどころ多かるにや、涙もこぼれぬるを見答むる人もやと苦しきに、心安く泣き暮しつるさし方いと戀しく、いつまでいとかうのみ思ひて過ぐさむとすらむと、さすがに行く末遠きこゝちぞし給ひける。かへすがへすもいと侘しうおぼされける年頃のほい遂げつべきなめりと、けさのまに多くの事を思ひつゝけて、かたはらに臥し給へるもいとすさまじげなり。日頃の過ぐるまゝには人目もえつゝみあふまじく、有りふべきこゝちもし給はねば、殿の御まつらひもなほさながらおかせ給ひて、さぶらふ人々もおなじさまにて、よるも常にとまりなどお給ふを、殿は「いとあるまじき事なり。たとひ心にあはずとも、むげにいはけなく心のまゝなるべき心つかふべき程にもおはせず」などむつからせ給へば、「いでやさは思ひし事ぞかし。いつまでかくさいなまれむとすらむ。悔しとおぼす折もありなむかし」とせめてむつかしき

折々はうちむつかり給ひて、いと近き一條の宮に隠れるて慰め給ひにける。まれまれのどかにおはする折も、殊のほかは若くめでたき御さまの恥かしさにおぼしつゝみて、女宮は更に晝はわたり給はず恥ぢ聞え給ふを、なほとも聞え給はず、唯かしてまり従ひ聞えたるさまにて、つれづれなる折々はをかしき人々のあまたさぶらふをめし出で、こと琵琶ひきあはせて遊び給ふ。さてやがてよるなどあかし給ふを、かたはらいたくわりなしと思ふ人もあるべし。女宮も限なくあてなる御心といへども、さきの世より結ぶの神のまおき給へる御契なればにや。かるがるしき御名を流し給へる始より、みま憂くつらき人とおぼしむすばるゝ程に、いと中の疎くのみなりまさらせ給へど、見知り顔にもうらみ聞え給はず。心つくろひもあまり苦しき折はけふけふとのみ山のあなたの家居もいで立ち給へど、明暮こと事なき御祈のまるしにや、心は空ながらも長らへ給ふまゝに、唯寄すればなびく声のねとのみことぐさになり給へるを、母宮は御目にかけていとゆゝしくうしろめたく思さるれば、殿の一つ心にあながちに聞え給はざりけり。ありし天わかみこにおくれ給ひけむ悔しきも、この頃ぞ思ひ出で給ふ。ありしやうにてやこゝろみましもおぼえ給ひけり。普賢の御光も忘れ難きをいかでとくかの誦經を人知れずおぼしけり。晝つ方内よりまかで給へるに、一品の宮に参り給へれば、からうじて女宮こなたにおはしましたけり。うちをばみて臥し給へるをまづさし寄りて、「あなめづらし。おのがつまと聞えさせむぞなめげにや」とてうちをみ給へるにはひもあいきやうもあたり苦しければにや、いと顔を隠してそむかせ給へば、「あないぶ

せのわざや。時々はないげはゆるさせ給へ」とて例ならずひきあはし聞え給へば、げに御年もさばかりにこそと見えて、やせやせにあてやかにて、まみいと恥かしげにらうらうしく清げにぞおはしける。御ぐしのかゝりたる程、さばらかに清らにてたけ三尺ばかりにや餘り給ひつらむと見ゆる。裾など細らせ給へり。香染めの御どもに青き濃き薄きわれもかうの織物奉りたるも、いとにはひなくすさまじきこゝちしたるにも、ありし雪のあしたに齋院の、かれのがさね奉りし御寐くたれ姿ぞ思ひ出でられ給ふ。はなやかなる色合よりもめづらしうも見えしかなとまづ思ひ出でられ給ふ。

「武藏野の霜枯に見しわれもかう秋しもおとる匂ひなりけり」〆おなじ色とも見えぬは、くちをしき事かなと心の内におぼし續くるをも、人聞かざりし所にて、心にまかせたりしひとりごとさへ口ふたがりぬるをなほいとわびしう思ひあまり給ひて、「冬深き霜枯の雪のあしたこそこの色はをかしけれ。この頃は餘りおとなしくこそありけれ」とのたまふを、あなあぢきなの事どもやと耳とまり給ひて、引きかづかせ給ひぬるもいとほしく、心とげなる御氣色に、何しに聞えつらむとなほわづらはしければ、いと言少なにてつくづくとながめふし給へる御心のうちいと物すさまじ。女院のおはします方にをさなき人々のけはひどもして走り遊びなどするを、さにやと耳とまりて聞き給ふもゆかしければ、「宮にをさなき人のものし給ふとき、侍りしはなど見え給はぬ。この足音はそれにや。つれづれなるにこなたに渡し給へ」とのたまへば、「いつの程にかさまでは」といらへ給ふ。」をさなき人は必ず程

ある事かは。御心ならひにうとうとしくもてなさせ給ふめり。いかなるもをさなき人のゆかしく侍るを唯見せ給へ」と聞え給へば、「いぎや、なれぬるは悔しきとかや聞けば」とて扇のそばよりまれまれほのかに見おこせ給へるまじりうらうしげにわづらはし。「あなうたてや。いとかるがるしき事をも知らせ給へるかな。八重立つ山のなどこそいひ侍るなれ。あな心う」などうちなよび給へるかたちけはひなどは、心あらむ女高きもみじかきもいかゞは見知り聞え給はざらむ。例の姫宮^{結城}は院^院の御方におはします。つれづれなる晝つかた、をさなき人々のおとのせしさうじのもとに寄り給ひて、ほのかなる穴よりのぞき給へば、八つ九つとをばかりなる。又それよりもをさなきなど次々にていとあまたがなかに、蘇枋の織物の細長着て、髪は肩の程よりも過ぎて、若宮の御程なるやそれならむと見ゆるに、物いひてうちゑみなどしたる口つきのあいぎやういとかをりうつくしけれど、若宮の御けだかさには劣りたるまみの、いとわらゝかにてらうたげなるは、唯かのよなよなの月影に變らざりけりと見るに、涙もこぼれて、細き穴よりいと見えすなりぬ。「まろは宮の御前に参らばや。なでふ知らぬ人のあるぞ」と「字よ」とうちむつかり給へば、十ばかりなるちどの「唯おはせませかし。みかどには見え奉らずやありし。ましてこれは今少しげすにてこそあなれ」といへば、又「宮のおまへの御男ぞ。されば姫君の御てゝにこそあなれ」とさかしくいひて、「いぎ行きてのぞかむ。かたちのめでたくおはするぞ。されば姉は見え奉るこそ死ぬばかりはづかしけれといふや」などいひて、ぬき足に寄り來て、まやうじをはなちていさゝかあくるを、こなた

よりひろく明けてさし出で給へるに、あるかぎりあきれて立てるけしきどもいとをかし。ひめ君をかきいだいてこなたに入り給ひぬ。ちかくて見給ふは、たゞその人と見給ふになみだこぼれぬ。

「忍ぶ草見るに心はなぐさまで忘れがたみに漏る涙かな」と顔に袖をおしあて、いみじう泣き給ふを、いとあやしう恥かしと思ひたるものから、うち泣きなどもし給はず。顔も赤うなり、汗もうちあえて、いかにぞや思ひ給へるけはひなど、かばかりの程ながらいとかう似たるものなりけりとあはれなる事限なし。放ち給はで「おぼすべき人ぞ。こなたに常に渡り給へ。をかしき遊び物ども奉らむ」とのたまへば、うちうなづき給へるなども今よりさまことにならうたげなまがことなどは、唯その人とおぼゆべきなめりとゆゝしきまで見え給ふを、思はずにおぼさるゝ御あたりもいかゞはせむ。年頃行くへもなく思ひなしつる人をおばかり見るにまさることは何事かはあらむ、かゝらざらましかばいかでかは見まし、今は唯この人に慰めて長らふべきにやと、こよなく思ひ慰められ給ひけり。もろともに添ひ臥し給ひて、「ひゝなもち給へりや。恥ぢ給はでこなたに遊び給は、いみじく作りて奉りてむかし。若宮の多く持ち給へる遊びものども取りて奉らむ」などのたまひて、さまざまをかしき繪など書きちらし給ひて奉り給へる。もとよりいとなつかしき御心にてうち笑ひ、ものなどのたまへるも、あさましきまであうつしと給へるは、なかなかなる心まどひなり。人のあなづらはしく思ふらむに、かくとや宮^{結城}に聞えてましとおぼせど、物語もうちとけては聞えにくげ

なる御ありさまなれば何かは、さらすとも今はわがかくてあればいとよくもてなしてむとおぼす。女なるしもかく物げなきさまなるこそくちをしけれ、などか今少し人もり聞かむに、人々しきわたりにかゝる事なかりけむ、何ばかりすぐれたることも見えざりしかげの草の種をしもといめけむよなど、數ならず思し出づるにしも、いと昔の秋のみ戀しくなり給ふ。よろづに唯かやうのかたに思ふ事かなはざりける宿世かなとぞくち惜しきや。涙のこひ隠して宮の御方に「なか渡らせ給はぬ。つれづれにわびてをさなき人を語らひてなむ慰め侍る」と聞えさせ給へど、われもかうの恥かしかりしにいと向ひにく、おぼされて渡り給はず。ありつるをさなき人々参りてかうかうと語り申せば、「さばかり心のくま多げなる人にをさなき人をしも見せつらむよ。いかにしてたがめていきつるぞ」とてもものしげにのたまはずれば「たれかぬて奉らむ。この子どもの騒がしうてみえやうじをわけたる」などめとかやと聞ゆる人を参りて、「今は渡らせ給へ。人に知られぬ御ありさまこそわやしうなどおとなふなれば、聞きつけていなまほしげに思ひたれば、いなき給ひて聲する方のさうじのものと寄り給ひて、いみじうとうとうとすうたれももてなし給へど、この心はいとうつくしうあひおぼしつべかめれば、はしたなうありつかぬこ、ちし侍れど、今よりは慰みぬべうこそとて、さし出で給へるさまのいとまばゆければ、扇をさし隠してゐたるさまなどめやすければ「何とかめす」とのたまへば「母とこそはいらへ給へるがいとつくしうて、今よりはさらば母をこそ頼み聞えめ。猶あひおぼせ」と教へ奉りて引きたて、のき給ひぬ。忘れがたみにと

ありし御ひとりごとを宮の御めのとどの中將といふ人、みさうじのつらにていとよく聞きけり。宮の御前にてまごまご語り聞えさせ給はば、さらばこのちどは何がしの少將のと聞きしはあらざりけるにこそはと、これによりてこのわたりには尋ねよりにけるにや、いみじうもの思ひたるさまなるも、この事にこそあなれなど心得させ給ふにも、いとあなづらはしくおぼしつるゆかりなれど、唯うつくしかりつる人によりてこそつれづれなるに、をかしきさまにおぼし立て、もたらむとおぼしかしづきつれ。かくばかり見えま憂くつらき人と思ひつるに、いとこれがゆかりばかりにて、心は空ながら見え過ぐさむこそなどおぼすに、人わろくいとくちをしき身の宿世かなと、いとおぼし歎きけり。そののちは姫君をも制せさせ給はず、常に渡らせ給ひてわが御身はありしよりもげにうとうとしくなりまさり給ふ。まれまれ見え奉り給ふ宵々もまたいとけ遠くもてなして、いとわりなき事のみまさりゆけど、内などの聞きおぼしめさむ事をおぼすにより、宮のおぼしよるもまゑるく唯この忍ぶ露のかゝりて、見えらぬさまにてぞ過ごし給ひける。姫君はいみじうなれむつび聞え給ひて、唯この御方にのみおぼすればいだきうつくしみ給ふ。「年の積るまゝにかゝる人のなきこそつれづれなるべけれ。心にまかする事などのやうに殿などの、今まで見せぬ事とさいなみ給ふこそわりなけれ。まことにもたるまじきにや。こゝかしこの例の人のやうならましかは、おのづからかこち出づる人もやあらまし。今はいかせむ。姫君をこそ頼み聞ゆべかめれ」とつれなくのたまふを、あながちに隠すべき事かは。聞かまほしきにはあらねど、よろづにく

まありげなる心の程かな。まいていかになどおぼしや。らるゝ心の内も恥かしう、いつまでと
 かりそめにのみおぼされて、いかさまにしてなほ思ひたちにし有様にもなりにしかなくお
 ぼしけり。霜月はかりには若宮（若宮）の御袴着の事おぼし立ちて、大殿にも急がせ給ふに、この
 姫君も同じ程にこそあるらめとおぼせば、このついでにきかせばやとおぼして、宮に「この
 君はいくつぞ。袴着はまだしきか。さらば若宮の御事、殿のおぼし立つが羨ましきに、わたく
 しの急ぎし侍らばやと思ふをさかしらにや。又知るべき人は侍らぬか」とのたまふいと心つ
 きなしとおぼして、

「思ふより又思ふべき人（人）やあると心に心問はゞ知りなむ（思ふ）とて少しほゝゑみ給へるは
 聞き給へるにこそはあらめ（思ふ）、常警の尼君が聞えてけるなめりかしとおぼせど、やがてこれ
 に書きつく、

「思ふより又は心のあらばこそとひもとはずも知りてまどはめ。心得ぬ事どもかな」（思ふ）
 てやみ（思ふ）給ひぬる氣色、のこりおほげに恥かしげなるもいと見せ憂くおぼさるれば、げに
 おなじ心にて、かゝるついでにいかに着せまほしからむ、唯うちまかせてさやうに渡したら
 むついでにさてもあれかし、これがゆかりにてあながちに念じ過ぐさむもいと人わろくお
 ぼゆるを、はふ木あまたになりぬれば、なかなか思ひしほいのまゝになりていかに嬉しから
 む、年月に添へては罪のみこそ積らめ、かくて見過ぐしても何ばかりの目やすかるべきぞな
 どおぼしなりて、院（院）にもかうにこそありけれとも聞えさせ給はず。唯「若宮のついでにおな

じ所にても」と聞えさせ給へば、「ついでならずとも、さばかりの事はこゝにても難くやは。
 たちまちに知らぬ人に何かはまかせ給はむ」とのたまへば、されどわざとはことごとしう思
 ひ立つべきにあらぬを、「何かはたゞにてだにのみじうゆかしがり給ふを、かゝるついでに
 と思ふにこそあらめ」とてなほ渡さむと思したれば、さるやうこそはとてその御心まうけせ
 させ給ひけり。大將殿はありしのちはわづらはしければ、又もえ聞え給はず、人知れずくち
 惜しくおぼしけるに、あすになりてぞ姫君は今宵や渡し給はむと聞え給ふに、「日頃さもの
 たまはせざりつれば、にはかにはいかでか」とのたまへば、「こゝに皆思ひまうけたれどこゝ
 にてはわざと思ひ立たむもうるさきに、げについでよく侍りなむ」とこそ院（院）ものたまはず
 れど、かううじてこと續けてのたまはするも聞き給へるなりけりとおぼせば、あまえて「つ
 いでならずとも年返りて二月ばかりにて侍りなむ。かうしも見聞ゆればみづから獨こそお
 なじ心に聞えさせ給へ。ほかへはたちまちにさらずとも侍りなむ」と聞え給ふを、又いかに思
 ひ給ふにかとおぼせば、返す返すもえのたまはで心もとなげに思ひたるものを、「院（院）の御方
 にも忍びやかにてもありなむ」と獨（獨）をたせ給へば、「さもなかわざとだにこそ院（院）の御前
 にて女（女）は手觸れさふらひ奉らまほしけれ。かしこにてはたれかはとこそことなしびに」と
 いひなし給ふに、げにおぼし立ちたる事ども、かひなかるべきを、うちつけのたよりならず
 とも難かるべきならねば、今はわれしも思ひあつかふべきにあらず、さこそことなしびに言
 ひなすともいかにばかりもてなさまほしからむものを、引き忍びたらむもなほあぢきなから

むなどおほせば、院に「内々の事は聞えさせ給はねば、かくまで思ひ立ちぬとならば」などのたまはせて、御としゆひにみづからのかはりにとて大殿に聞えさせ給へば、渡り給ひてぞ着せ奉り給ひける。大將も若宮の御むかへに晝より御いとまなけれど、あまり見入れざらむも人目あやしければおなじさまにぞあつかひもてなし給ひける。その程の有様思ひやるべし。おとなしうまたてられ給へるうつくしさを見給ふにも、人知れず哀れなる御心のうちなり。若宮はやがてそのつとめてを渡し奉り給ひける。御供にはめのと達二人、女房廿人を参りける。ぐれなむどもにりんだうのうはぎ、菊のからぎぬおしわたして着たり。御まづらひなどなべてならずめでたきこと更なりや。よろづよりも若宮の御うつくしさを、うへはよそに聞き給ひしよりもうつくしう有りがたう見奉り給ふに、類ひなきものに思ひ聞え給ふ。大將の御ちを生ひにたがふ所なく似させ給へるぞ、げにさきの世より契ありける御中にやと、うつくしうかたじけなくあはれにおほさる。大將の出で入り給ふに、御指貫の裾にまとはれていだかれむとのみし給ふを、いと悲しげに思ひ聞え給へる氣色なども、近くて御覽すれば猶いかなりし事ぞとまでおほされけり。暮れぬればみこ達左右の大臣を始め奉りて世にある人、高きもくだれるも参らぬ人誰かはあらむ。御前の御まづらひありさまなどは思ひやるべし。たちあかしの晝よりもあかきに、若宮の御直衣などあざやかにまたてられ給へる、おとなしき御さまのゆゑしさを、たれもたれも涙を流して見奉るに、大將の御心のうちはいとよかき暮され給ふも、いまいましくせきわび給ひぬ。その夜の事もかきつゝけまほしけれどなかな

かにもやとてもらしつ。その後は若宮をば母宮ハハノミヤ見奉りては片時もいかでかはと、さま悪しきまで御目放ちがたう思ひ聞え給うて、更に返し渡し奉り給はず。前齋院ゼンサイインの御つれづれも心苦しう大將は推しはかり聞えさせ給へば、「いかでか」などおぼしのたまへど大殿も「おとなびさせ給ふまゝに、よそよそにてはおのづから心よりほかにおろかにもありぬべし。又いとつれづれなる慰めにも」などのたまひてゆるし給はねば、いとほしさに、かくてのちぞいとねんごろに参り仕うまつり給へば、御うしろみ達もまめやかに有りがたかりける御心かなと嬉しう聞ゆるにつけても、なか今少し思ひなき中らひにても、見あつかひ聞え給ふまじきと思ひけり。大將の御心にも同じうき世の有様ならばさてこそあるべかりけれ。こまやかなる御かたちなどやいかならむ。大方の御有様はいとわてにけ高きものから、すぢことなる御有様どもをなど今ぞおぼし寄りける。たそがれ時のたどとしき程に参り給ひて、若宮さへうつろはし奉りていとよまざれ難からむ御つれづれを推しはかり奉りながら、「御殿も心よりほかにこそ怠り侍れ」など聞え給ふを、今はまいてかくさだまり給ひぬるを、何のわづらはしくわれしも心ときめきしがほにやは。有り難き御心はへをあまりわかあかしうおぼし知らぬさまなるも、かへりてさまにわはぬやうにや、嵯峨の院もさこそいづれをも聞えさせ給ふめれと集まりて聞えさすれど、いかにもおぼしわくにはあらで一程、唯世に知らず恥かしげなる人にかでかといとつゝましうおほされて、わざとはのたまはせねど、け近き程に参り給ひつる折々は、げにあまりならむもいかゞといとほしき御心さまも御覽じ知

らるれば、ほのかなれどさによとまり聞ゆる御けはひ、唯入道の宮の同じさまによとおぼゆるに、ものあはれにおぼし出でられ給ふ。さこそはあながちなる心も遣はざらめ、もて離れたりける御宿世ともかな、心ゆかずながらもけふまで見奉る人はなくやはありける、逃れ難かりければこそ思ひかけざりし濡ぎぬさへほしわびて、誰も誰もかくおぼしなりにしか、過ぎにしかたの隠れ簀を見あらはす人のなかりしこそ、さるはかの心おくれたりしふところ紙のついででは、もて騒がれぬべかりけるものを、よしやそはさるべき長き世の物思ひとなりぬべかりける宿世にてやみぬとも、この御あひずみの程になどは空言などいふ人はなかりけるぞと、過ぎぬるかた悔しき御くせはさしもあるまじき事さへ取り返しうち歎かれて、「おなじくば着せよな蜚の濡ぞろもよそふるうらににくからずやと」何となくいひけち給へるは、人聞き知るべうもあらねど、院は少し心得させ給ふらむ。されど聞き知り顔ならむもつゝましければ、いと奥深うならせ給ひぬるも飽かずおぼさるべし。誠かの常磐の尼君のむすめ結は長門のにはあらざりければにや、小宰相とて心ばへかたちなどもなべての若き人よりは目やすかりければ、昔のともとおぼしむつぶる方もこよなくて、事にふれつゝよそひ見せつゝなつかしう語らひ給ふを、姫君姫を思ひ聞ゆるかたさまにはいかゞはおろかに思ひ聞えむ。過ぎにし人の事などもいと耳とまり給ふばかり聞えさする折々などのあるを、忍びあへぬ氣色にておなじ心に語らひ給ふを、おのづから氣色見る人は安からず言ひさゝめくを、いづかたさまにつけてもおなじ心なりけりと、宮は心つきなくおぼし

めさるれど、かゝるかたの物にくみして見えむもいと恥かしく、わが心の中にはことたがひたるべし。唯けふあすにても女院の見奉らせ給はずなりなむのちにこそは、身をもいかにもなしてめとおぼしとりて、いかにも見入れさせ給ふ事なくて、唯明暮行ひよりほかのことなし。よるもわたらせ給ふ事なければ、唯山鳥のやうにてぞ明し暮し給ひける。

狭衣卷第三之下

あらぬ所とおぼしなぐさみ給ひし一條の宮にも、若宮のおはしまさねば、隠れ所なくて若宮にことづけ給ひて、殿がちにのみなり給ふを、内に聞かせ給はむこといみじうびんなき事に大殿の聞えさせ給へば、大方世になありそとおぼしたるとむつかしければ、齋院に参りて隠れる給へり。常の冬よりも雪霰がちにて晴間なき空のけしきも、いとゞ所からはまめやかに物心ほそくて参り給ひぬれば、又何事よりも忍ぶもぢずりは、さまことに亂れまさり給ひぬべし。御まへの方を見やり給へばちひさき几帳を引きよせ給へれば、はかばかしくも見えねど御ぞの袖口などは隠れもなし。蘇枋の御ぞどものいと濃きより薄く匂ひたるうへに、からの浮線れうの、白きやうなる籬の菊の枝ざしより始め、うつろひたるにも色々に織り浮かされたるも例の事ぞかし。されど人がらにはげになべてならすあなめでたと見え、御ぐしの肩の程よりこぼれ出でたる御ひたひがみの袖口まで、ゆるゆるとひかれいでたるもさまこと

に見ゆるに、御ぞの裾にもたまりゆきたる裾のそぎ末など、繪に書きたるやうなるもかうし
もなきを、よろづにくち惜しき目うつりのいとゞしきなめりしかし。いとゞほかざまにも見
やられ給はず、つくづくとまもり聞え給ふ御心のうち、いとくち惜しく憂き身の宿世おぼし
知るべし。殘なくさしむかひ聞えし折何事思ひけむと、過ぎにし方さへ戀しく思ひいで給ふ
に、御ふところに寝たりける猫の起き出で、はしざまに出づる綱に引かれて、み几帳のかた
びらのひき上げられたるより見合せ給ふに、御顔いと赤うなりながら、わざとひき入りなど
も玄給はず、御扇にまぎらはして少しかたぶき給へる御かんざし御くしのかゝりより始め、
久しう見奉らざりつるけにや、猶さまことじめでたき御ありさまかなと思ふに、心うの身の
有様や、などかいとかはかりの事こそかたからめ。少しもなずらふばかりのよせ見るまじき
もの思ひ知らず、いはけなかりしそのかみより、何事もなのめならむ人をば見じ、唯この御
有様に劣る宿世あらば世にもあらじと、安き空なく思ひくだけし心のうちは、など露ばかり
もかなふ事のなかりけむ、いでやわが心よろづにいふかひなくを、しき心のなくて、親に
もひとへにまかせられ奉りて、心づからいとかう憂き世にも長らふるぞかしと、思ひつゞく
る。身よりはかにつらき人なくて、例の脆き涙のみぞことわり知らぬものなりける。まぎら
はしに扇をうちならして猫を「こちこち」とのたまふに、寄りきてらうたげなる聲にてうち
なきつゝ、なづさふ移りも身に添へまほしくなつかしければ、袖より隔てなく入れ給へる
を、喜びてむつるゝいとつくしうらうたし。くぬぐぬしく侘しき目を見るよりは、かくて

こそあるべけれとおぼされて、「この猫は暫しあづかせ給へかし。人はだにつくるよりは」
とのたまふを、せんじといふ人うち笑ひて、「今さへはなでふ人はだをば尋ねさせ給ふはと、
おとなしき御あつかひをさへこそせさせ給ふなるに、猫は所せうこそはおぼえ侍らめ」と聞
ゆれば、「更なりや、岩間をくゞる水だにも漏るまじければ」とてうち笑ひ給ふものから、い
とかゝる心のうちも今は知らせ給はねば、思ひなほりていつしかと、あるべかしきゆかりむ
つびをさへして、もてあつかふとしおぼしめすらむかし。おなじさまながらだに見え奉らじ
と聞え知らせ奉らじものと、恥かしういみじとも世の常なり。御まへなる人々の繪などか
きちらしたる筆ども見ゆるをとり給ひて、紙のはしに、

「かつ見れどあるはあるにもあらぬ身を人の人と思ひなすらむ」^{一五五}。手すさびのやうに
片假名にかき給ひて、ふところなる猫のくび綱に結びつけて、人少し立ちのきたるに、「あな
いぎたなや、今は起きて参りね」とおしいで給へれば、聞き知りかほに外さまへもいかず参
りて、むつれまるらするぞいとうらやましきや。年の果になりてはかの常磐の事の果てせさ
せ給ひけり。御志のゑるしには、今は何事をかはとおぼせば、經佛の御かざりなべてならず。
まことに日の中に佛道なりぬべきさまにおぼしおきてたり。その日はいみじう忍びてみづ
からもおはしぬ。講師は山の座主なりけり。まやう僧は六十人、七僧などもなべてならぬを
ぞせさせ給ひける。常ののりのことばといへどもおぼしおきてつる人がらにて、一乗の法文
すぐるゝわざにや、願文の心ばへなくなくよみ給へるも涙流さぬ人なきに、いとゞ大將殿は